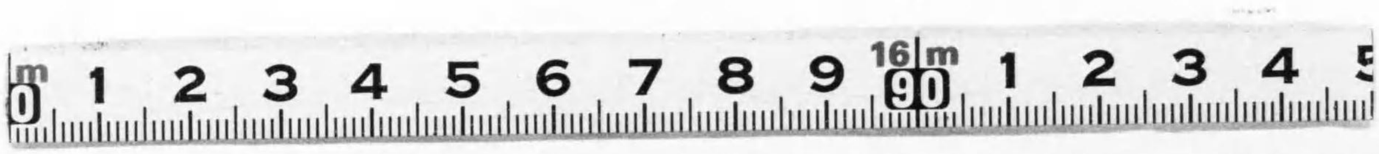
551
39



551-39

聖ジョウン

―戯曲的年代記―

六場及び終曲

バアナアド・ショウ作
北村喜八譯

「聖ジヨウン」の序文

事實のジヨウンと推測のジヨウン

ヴオジユの田舍娘、ジャンダアルクの生れは一四一二年で、外道、妖術、魔法の罪名で燒き殺されたのは一四三一年、同五六年にはそれでもどうやら名譽を恢復し、一九〇四年に至つて尊貴（ウエナラブル）の稱號を受け、一九〇八年に神聖（プレツスト）の名を冠らせれ、遂に一九二〇年聖者の列に加へられた。彼女は基督教史の中で最も有名な戰鬪聖者で、中世時代の奇行に富む數多くの御仁の中でも最も奇妙な女であつたのである。彼女は自らカソリツク教徒を以て任じて居た敬虔な信者であり、又、フス一派討伐の聖軍の發起人であつたが、事實は、新教（プロテス）徒（タント）の最初の殉教者の一人であつた。又、國家主義の最初の使徒の一人であり、當時の遊戯的な身（み）の代（しろ）金の賭博に耽つた騎士氣質を脱しようと努力した那翁的現實主義（ナポレオニツクリアリズム）を最初に開業

した佛蘭西人であつた。彼女は婦人用半ズボンの先驅者だつた。そして、彼女から二世紀後の瑞典のクリスチナ女王と同じく、男に變裝して兵士や水夫の職に從つたカタリナ・ド・エラウゾを初め數多の無名な女傑連のことは言はずもがなの事、ジョウンも亦、折角の女といふ身分を振棄てゝ、男の如くに裝ひ、男の如くに戰ひ、男の如くに生活したのである。

かやうな遣方で極端に彼女は自己主張をやつた結果、二十歳にもならぬ身空で（實際二十歳以上生きてゐなかつた）西歐に汎く知れ渡つた程だから、法規に觸れて若い身を燒き殺されたのも別に驚くには當るまい。火焙りの表向きの理由は、現今ではそのやうな事では處罰をうけさうもない樣な、數々の死刑に當る罪名であるが、內面の理由は、現今でも女らしからぬ我慢のならない潛越行爲のためである。十八歳のジョウンの主張は、最も自尊心の高い法王や最も傲慢な帝王の主張さへも越えてゐた。自分は神の大使、神の全權公使であつて、まだこの世に生をうけては居るが、實際は天上敎會の一員であるも同然だと言ふのが、その主張であつた。彼女は佛蘭西王の守護者を以て自らを任じ、英吉利王を促して自分の命令に從へさせようとした。又、政治家、敎主連を訓誡し、說伏し、之を指圖

した。將軍達の戰略を無視し、彼女自身の立てた計畫で軍隊を指揮して戰に勝つた。其の筋の意見、判斷、權威、又は、軍務局の戰術、兵學をば、無遠慮に、公然と輕蔑し鼻でありしらつて居た。假に彼女が聖人と君主の德を具へて、最も尊い敎主政體と光輝ある王朝を兼ね現はしたとすれば、彼女の主張や行動は、カシウスに對するシイザアの主張同樣に、政治家達には心辛いものであつたであらう。だが、彼女は實際は成上り者に過ぎなかつたから、彼女に就ての意見はただ二つある許りである。卽ち、彼女を奇蹟的な人物とするか、或は我慢のならない女とするかである。

ジョウンとソクラテス

若しジョウンが意地惡い女であるか、利己的であるか、卑怯であるか、或は馬鹿であつたならば、歷史上最も魅力のある人間の一人とはならずに、最も憎まれる一人となつたであらう。若し彼女にして、人々の間違つた行ひを指摘して侮辱したならば、その結果がど

うなるかが分かる位の年功を積んで居たり、彼等に詔つて彼等を自由にするだけの方法を心得て居たりしたならば、彼女の命はエリザベス女王のやうに長く續いたかも知れないのだ。然し彼女は、あまりに年は若く、素朴で、經驗に乏しかつたので、何等かやうな手管を知らなかつたのだ。彼女は、馬鹿者だと考へて居た人々から妨害された時に、彼等を馬鹿だと考へて居ることや、彼等の馬鹿らしさに我慢のならない事を、少しも隱立てしなかつたのである。そして彼等の間違を正して危害を受けないやうにしてやつたのだから、自分に感謝していゝ筈だと期待して居た位に、彼女は純眞(ナイイヅ)であつた。人より優れた智者にとつては、比較的愚鈍な者の痴鈍さを摘發した爲に、その憤怒を招くと言ふ事は、常に理解し難いことである。ソクラテスでさへ、あの年功、あの經驗を以てして、彼の試練の日に、常の人なら、己に對して長い月日の間怨が重り積つて居ることを知つて、わいわい騒いで命請ひするのであるが、そのやうには自己を辯護しなかつたのであつた。彼の求刑者が、二千三百年後の今日に生れたとすれば、倫敦のシティへ通つてゐる郊外電車の朝晩の急行時間のどの一等車からでも拾ひ上げる事が出來るのである。何故ならば、ソクラテスの求

刑者やそれに似た人間と言ふのは、ソクラテスが口を開きさへすれば絶えず馬鹿であると素破抜くので、それでは堪らないと許り、その他の事は本當に何にも言ふ事のない人間なのであつた。これに氣の附かなかつたソクラテスは、恐らく自分の攻擊點が間違つてゐたんだらう位の考で痲痺してゐたのだ。彼の死後に殘つた事實は、彼は一人の老兵士で、その一生は尊いものであり、彼の求刑者は馬鹿な似而非紳士であると言ふことだつた。彼がひたすら善意を盡し、良く援けてやつた人々が、その心の中で、彼の精神的卓越の爲に彼を怖れ憎んでゐた事に就いては、彼は全く無知であつたのだ。

ナポレオンとの比較

ソクラテスは七十歳にしてこのやうに純眞無垢であつたとすれば、十七歳のジョウンは如何に純眞無垢であつたかは容易に想像出來るのである。ソクラテスは議論の人であり、他人の心に靜かに穩やかに働きかけて居たのに反し、ジョウンは行爲の女であり、他人の

身體に急激に働きかけて居た。これが疑ひも無く、ソクラテスと同時代の人間が、彼の七十に到る迄の長い間彼に我慢してゐた理由であり、そして、ジョウンがすつかり女にならない先に滅されてしまつた理由である。然し、二人共淡白、個人的な謙讓、慈悲の大きな力を有つて居た點で一致して居る。而も、この點が狂暴な人人の嫌惡を招いて、全く無道な、從つて二人にとつては譯の分らぬ犧牲に陷つたのである。ナポレオンも同樣に大きな力を有つて居たが、二人の樣に淡白でも無く、公平無私でもなかつたので、彼は自分の人望の性質に就ては幻影を抱いてゐなかつた。閣下の死を世間はどう考へますかと訊かれた時に、ナポレオンは、俺が死ねば世間はほつと一安堵するだらうと答へた位だ。だが、精神上の天才が、他人を憎んだり、害を與へようと目論んだりする事が無いのに、他人の方では、單に優者と共にゐると言ふ事で自分の虚榮を傷けられる爲の嫉み心から許りでなく、共にゐるために脅かされるので、全く恐入り、正直に、精神上の天才を憎み、これを滅亡させたがると言ふ事實は、精神上の天才にとつては容易に理解の出來ないことである。恐怖は人を驅つて極端に導くものである。そして、優れた存在によつて起された恐怖は理屈

では分らない神祕である。その神祕は測り知り難いので、その寛大さや道義上の責任やに對する推測も保證も無い場合には、換言すれば、公の地位を持たない場合には、それは我慢が出來ないものなのだ。ヘロッドとパイリット、アンナスとカイアファスの法律上にも世間的にも優越して居たことが恐怖を惹起した。然し、國のためになり保護的であるやうに見え、從つて、測り知ることも、避けることも出來るやうな譯の分つた恐怖ならばまだ良いが、基督の不思議な優越と、それが因となつての恐怖に到つては、彼の慈悲心を知ることの出來なかつた人々をして、彼を十字架に、と叫ばしめるに到つたのである。ソクラテスは毒人參（ヘムロック）を飲み、基督は十字架に、そしてジョウンは火焙りの柱にかゝらねばならなかつたが、ナポレオンは、セント・ヘレナ島で生涯を終つたけれども、少くともベッドで往生を遂げることが出來たのだ。恐ろしくはあつても、全く底の知れる樣な、お役人の大惡徒の多くは、その自然な死に際に、此の世の國々からの榮光をうけて死ぬのである。これを見ても、征服者になるより聖者になる方が遙に危險であることがわかる。マホメットやジョウンのやうに征服者と聖者を兼ねた者には、征服者が聖者を救ふべきであり、敗北

して捕はれることが殉教に他ならないと言ふことがわかるのである。ジョウンが燒かれる時に、彼女の味方となつて彼女を救はうとして雙手の勞すら取る者が無かつた。彼女に導かれて勝利を得た味方も、彼女に恥しめられ打破られた敵も、彼女のお蔭で王冠を戴いた佛王も、ロアル河へその王冠を蹴落された英王も、皆等しく彼女から脱れるのを悦んだのであつた。

ジョウンは無罪か有罪か

以上のやうな結果は、弱者が血迷つてゐる場合にも、又强者が優越してゐる場合にも起り得るものであるから、ジョウンの場合にはその二つの中のどちらであつたか調べなければならない。ジョウンは非常に注意深い眞面目な裁判によつて、同時代の人々から不利な判決を下された。二十五年後になつてその判決が取消されたのは、卽ちジョウンが形式だけは名譽を恢復したのは、實はシャルル七世の卽位を有効ならしめるための確證に過ぎなか

つた。これよりも興味のあるのは、意見を同じくせる彼女の遺族が唱へ出した取消しであつて、これが極端に赴いて終には彼女の聖者推奠となるのだが、この取消しは、最初の判決を無効とし、彼女を裁いた裁判官を逆に取裁いた。だがそれは、今日迄のところでは、彼女を裁いた彼等の裁判よりも遙に不當なものである。それはとにかく、一四五六年の名譽恢復は、遣り方としては汚れたところはあつたけれども、凡ての理性ある批評家を滿足せしめるに足る證據を與へた——卽ち、ジョウンは世間にありふれた喧嘩好きな女でもなく、淫賣婦、不敬神者、或は法王以上の偶像崇拜者でもなくて、從軍し男裝した事や大膽不敵に振舞つた事以外には別に間違つた振舞ひもせず、その反對に、氣象の優しい、男を知らぬ生娘であり、敬虔で、つゝましやかで（彼女の食事はフランスでは水の代りに飲んで居る普通の葡萄酒に浸したパンであつたが、それは禁欲的であると言つていいだらう）親切で、兵士となつては勇敢で豪膽であつたが、淫らな言葉や放埒な行ひを許し得ぬ氣象の女であつたのを認めしめたのである。彼女は火刑の柱につく迄、一點の穢無い性格を持つて居た。只、難を言へば、彼女を火焙りになるやうな羽目に導いた高い自負心、當時の

人の言を借りれば「潜越さ」があつた許りである。だから今、エリザベス朝の史劇ヘンリイ六世（シエエクスピアによつて下手にぶち壞されたと言はる）の第一部の中で、ジョウンが大詰邊りで酷い取扱ひをされて居るのは、極端な愛國主義に阿つた爲であることは、説明するのも無駄であらう。現在では彼女に投げられた泥はすつかり洗ひ落されて居るので、現代の作家がその上洗ひ落す必要が無い程だ。かへつて彼女の裁判官に投げられた泥や、本來の彼女を認める事が出來ない迄に彼女の姿を歪めてしまつた白塗りを洗ひ落とすことが遙にむづかしくなつたのである。極端愛國主義者の惡口が彼女を最も酷く取扱つたとすれば、宗派の惡口（この場合には新教徒（プロテスタント）の惡口）は、彼女の縛られた火刑の柱を用ゐて、羅馬カソリック派や宗教裁判を叩き潰す道具とした。羅馬カソリック派や宗教裁判をメロドラマの敵役にする一番容易な方法は、「乙女」をその劇の女主人公にする事である。然し、こんなメロドラマは屑物として棄てられてしまふだらう。ジョウンが教會と宗教裁判から受けた裁判は、彼女と同じ型（タイプ）で同じ狀態にある囚人が、今日の裁判所（お上の手にあるもので、宗教上のものではない）からうけるどんな裁判よりも、ずつと公平なもので

あり、而も判決は嚴密に法律に適つて居た。そして、彼女はメロドラマ風な女主人公（ヒロイン）では無かつた。美しい主人公（ヒアロ）の、肉體的に美しい見棄てられた寄生虫では無くて、天才であり聖者であつた。人間なら誰でもなる事の出來るやうなメロドラマ風なヒロインとは全然反對のものであつた。

さてこの言葉の意味を明らかにして置かう。天才と言ふのは他人より遠くを見、深くを探り、他人と異なつた倫理的評價を持つてゐて、その天才が男であれ女であれ、自分の天分に最も適應する方法で、この獨自の洞察とその評價を實現するのに充分の氣力ある人間なのである。聖者と言ふのは、英雄の德を行ひ、教會の專問的分類に從へば超自然的命令と言はれる天啓或は力を享けて、聖者推奠の資格を得たものである。若し歴史家が女權主義反對者であつて、男の傳統的な繩張り内では女は天才を表はし得ないものだと信じ切つて居るならば、その歴史家は、軍事及び政治の實際方面に主としてその天才を發揮したジョウンからは、何物も得ないのである。若し歴史家が唯理論者であつて、聖者の存在を否定し、意識の推理に依るの外は決して新しい觀念を生じないと主張するならば、その歴史

家は到底ジョウンの外貌を理解する事は出來まい。ジョウンの傳記作者に就いての理想を言へば、彼は七九世紀の誤謬偏見に囚はれて居てはならず、中世時代、羅馬カソリック教會、神聖羅馬帝國を理解することウイッグ黨の史家以上に委しくなければならず、男女の性の區別やそのロマンスを棄てて、女を人類と言ふ種類の女性として考へ、特別な魅力や特別な柔弱さを有つた一種變つた動物と見做してはならないのである。

ジョウンの美醜論

只今述べた最後の點をざつと有りの儘示すためには、ジョウンを美人として書き始めてある本は、すべて、躊躇なくロマンスの列に投げ込んで良いのである。ジョウンの味方の誰一人として、村でも、宮廷でも、陣屋でも、或は王を悦ばすためにジョウンを褒めてわが身を卑しめる時ですらも、ジョウンを綺麗な女だとは言はなかつた。彼女の容貌に就いて語る者は皆、熱心にかう言つて居る。「ジョウンは或る程度まで女性としての魅力が無

く、そしてこれは、彼女が花ならば蕾の年頃であつて、醜くもなく、不器用でもなく、不具でもなく、人間として不愉快な感じを起させるところもなかつたのを考へると、不思議に思へる位である」と。その明白な事實は、彼女のやうな剛膽な統御振りの女の常として、男の方が彼女を非常に怖がつてゐたために彼女と戀に陷ることが無いので、彼女は性の爭鬪では中性になつて居るやうに思へた事である。彼女自身は無性ではなかつた。或點までは神に捧げて、死ぬ時も尙、處女であつたが、結婚の可能を自身で否定して居た譯ではなかつた。假初めに心を惹かれ、これを追ひ慕ひ、軈て手に入れて夫にする結婚と言ふものは、彼女の仕事ではなかつた。彼女には他になすべき事があつた。バイロンの口癖の「男の戀は生活(くらし)の他の遊び事、女こそ女の全部」の文句は、ジョオジ・ワシントンやその他の英雄連の活躍兒に適用しない以上にジョウンには適用しないのである。もし現在彼女が生きて居たなら、將軍としての彼女の繪葉書は賣れて、サルタアナとしての彼女の繪葉書は賣れはしまい。然し彼女が特徴ある容貌だつたことを信ずるに足る一つの理由がある。ジョウンと同時代のオルレアンの一彫刻師が、ヘルメットを冠つた若い女の像を作つた。そ

の顔は、理想化された顔ではなく、單なる肖像であつたが、曾つて見たことの無いやうな非凡な顔である點から見ても、藝術上ユニツクな顔である。ジョウンが知らない間にこの彫刻師にモデルとされたものだと推測される。これに就て別に證據が有る譯ではないが、然し、非常に目と目の間の離れた双の眸は「これがジョウンで無ければ、一體誰なのか」と非常に力强く問ひかけてゐるから、私はこの上證據を擧げるのを差控えよう。もし、この說に反對の人があれば、私は何時でも喧嘩のお相手をする。その彫刻は素敵な顔をして居るが、オペラの美人好きの目から見たら全然中性に見える顔である。

結局、かう言ふ好事家は、彼女が婚約破棄の廉で訴へられて被告になり、自らその事件を裁いて、訴訟に勝つたと言ふ艶消しの事實を聞いたら、さぞ愛想をつかす事だらう。

ジョウンの社會的位置

階級から言へば、ジョウンの父は勞働して暮しを立ててゐる百姓であつたが、村での頭

株の一人であり、近隣の鄕士やその代言達と事務を取引して居た。ジョウンはその娘として育つた。村民が侵掠を避けるに適してゐた城が孤立となつた時に、父は六人の農民と相結んで、城が侵略の恐れある時はこれを守つて奪はれないようにと努めた。子供心のジョウンは、この城中のお孃さんとして面白く暮し勝ちだつた。母も兄弟も御城では人の物笑ひになるやうな事もせずに、ジョウンと共に此處へ來て、同じやうに樂しく暮らすことが出來た。是等の事實から見ると、女主人公としてのジョウンを女王や又は乞食娘に拵へ上げて居る普通のロマンスには根據が無い譯である。これと似たシエエクスピアの場合、シエエクスピアの父は、商人で、社會的地位ある婦人と結婚して一時は富裕だつたと言ふ明かな事實があるにも拘らず、彼シエエクスピアを無學な勞働者であると假定して研究して行つたので、無駄な研究のまるで逆になつた、金字塔（ピラミツト）を作り上げてしまつたのである。ジョウンを羊飼の傭女の位置に追ひ込まうとするのにも——そんなことをしても、彼女はドムレミ村では羊飼の傭女よりは農場のお孃さんとして尊ばれるだらうが——シエエクスピアの場合と同じ傾きがある。

ジョウンの場合とシエエクスピアの場合との違ひは、シエエクスピアは無學文盲ではなかつたと言ふ點である。シエエクスピアは學校に學んで、普通の大學卒業生の憶えてゐる位の、實利上には價値のない羅典希臘語を修めて居た。これに比べるとジョウンは全くの無學文盲であつた。「私はいろはさへ知りません」と彼女は言つて居る。だが、これはその當時もその後久しい間も、多くの女王さへ同じことを白狀しなければならなかつたかも知れない。例へばマリイ・アントワネットは、ジョウンの年頃にはまだ自分の名前を間違へずに書くことが出來なかつた程だ。然しそれだからと言つて、ジョウンが無知な馬鹿であるとか、或は、現今の讀み書きの出來ない人々の樣に世間に對して負け目を感じたり、そのために遠慮したりして居たと言ふ譯では無い。手紙を書くことが出來ぬとしても、ジョウンは他人にそれを書きとらして、充分な、實際ありあまる位の意味を傳へる事が出來た。そして、彼女はさうしてゐたのである。他の女に面と向つて「羊飼の小娘」と罵られると、彼女は躍起となつてそれを殘念がり、相手の女が誰であらうとも、道具の揃つた家の主婦としての遣繰りで腕比べしようと申込むのであつた。現代の新聞仕込みの女子大學卒業生

が自分の國の國際關係を知つてゐる以上に、彼女は佛蘭西の政治軍事の狀態を心得て居た。彼女が最初に味方に入れたのは、近隣のヴオクウルウルを守る司令官であつた。その司令官が、ジョウンの口からヘリングの戰で皇太子の軍が敗北したのを聞いたのは、政府からの公報を受けるずつと前だつたので、彼はジョウンが神のお告をうけてゐるのだと思ひ込んでこれに組みしたのである。ジョウンのやうな田舍者が、かやうな公の事件に就て知識や興味を持つてゐるからとて、兵火を受けた地方では珍らしいことではなかつた。劍をひつさげた政客の往來が繁くて、自然と目を惹いた。ジョウン一家の人達は封建の世の中に何が起つてゐるか知らずに過ごすことは出來なかつた。一家は裕福ではなく、ジョウンも父と同樣に牧場に羊を追ふたりして農に從つて居た。然し彼等がみじめな貧乏暮しをして居たと言ふ證據も、さうらしいと思へる點もなく、又ジョウンが傭人の仕事をしなければならなかつたとか、或は、懺悔式に行きたいと思ふ時や、幻の見えるのを待つたり、教會の鐘の音にお告を聞かうと耳を傾けたりして時を過したいと思ふ時に、少しでも仕事をしなければならなかつたなどと信ずるに足る理由は無い。要するに、彼女は現代の小ブルジ

ヨアジイの普通の娘どころか、智的教養すら持つて居る若い婦人であつた。

ジヨウンの聲と幻

ジヨウンが耳にした聲や目に見た幻は、彼女の名聲について色々なトリツクを行つた。このお告や幻は、彼女を氣違ひだとか、嘘つきで騙りだとか、魔法使（これが火焙りの理由である）だとか、遂には聖者だとか言ふことを證據立てるものだと考へられてゐた。然し、實際は何等かやうなことを證據立てるものではなくて、却つて、かやうに結論の種々雜多なのは、實際主義の歴史家が他人の心を或は自分の心をすら知ることの如何に少ないかを示すものである。世の中には非常に想像力の強い人がゐて、一つの考を抱くと、それが耳に聞える聲となり、時としては目に見える姿がそれを口にする場合さへあるのである。犯罪性精神病院に收容されてゐるものは、多くはこの聲に從つて行動した殺人者である。してみれば、一婦人が、熟睡中の夫の喉を切り子供をくびれと告げる聲を聞くと、彼女は

告げられた通りにしなければならぬと思ひ込むかも知れないのである。法醫學の妄信によつて、今日の法廷では、幻覺となつて表はれた誘惑のために罪を犯した犯罪者は、その行爲に責任を負ふ必要なく、狂人として取扱はるべきだとしてゐる。然し、幻を見る者、天啓を聞く者は、常にきまつて犯罪者だと言ふ譯ではない。靈感と言ひ、直感と言ひ、無意識に理窟の通つてゐる天才の言論と言ひ、同じ幻想によつてゐるのである。ソクラテス、ルウテル、スウエデンボルグ、ブレイクは、聖フランシスや聖ジョウンと同じく幻を見、聲を聞いたのである。もしニユトンの想像力が同じ生々とした劇的な種類のものであつたとすれば、彼はピタゴラスの幻が果樹園にはひつて來て、何故に林檎が落ちるかを說明するのを見たのかも知れない。そんな幻覺を見たとしても、引力の法則に傷つく譯でもなくニユトンの健全な理性があやしくなる譯でもない。尙その上、幻想による發見の方法は、普通の方法より怪しいと言ふことは少しもない。正氣であるか否かを定めるのは、その方法が常軌を踏んでゐるかゐないかの點でなく、發見が合理的であるか無いかの點である。もしニユトンがピタゴラスから、月は靑い乾酪から出來て居ると聞かされたのなら、彼は

監禁の身となつたかもしれないのだ。引力說は、宇宙の自然現象に關するコペルニクスの說に特に適合してゐる合理的な假說であり、ニュトンが非凡な知識を有つてゐるといふ名聲を博したものであつて、彼の法則發見の方法がいかに空想的であつてもこの名聲には變りがないのである。而も、我々に感銘を與へる精神的事業は、彼の引力の理論ではなく、驚嘆すべき彼の年代記である。この年代記では、ニュトンは精神の魔術者の大王に、而も今日では、その權威なんて信ずる者も無い癲狂院の大王にされたのである。豫言者ダニエルが見た巨獸の十一番目の角のことから考へれば、ニュトンはジョウンよりも遙かに空想家である。何故なら、彼の空想は劇的では無く數學的であり、從つて非常に數と言ふものに感受性が强かつた。實際彼の仕事がすつかり失はれてたゞ年代記だけが殘つたとすれば我々は彼をひどい氣違ひだと言つた事だらう。ところが實際はさうではないのだから、ニュトンを狂人と敢て診斷する者があるだらうか。同樣に、空裏の聲を聞いたにしろジョウンは正氣の女であると判斷しなければならない。何故なら、その聲は彼女の常識に基かない忠告を何等與へた譯ではないのであつて、その點丁度引力がニュトンにやつて來たのと

同じである。今日では、殊に最近の世界大戰が多くの婦人を軍事生活に投じて以來、ジョウンの從軍はペチコオトを穿いて居たのでは出來なかつたことがよくわかる。これは單にジョウンが男の仕事をした爲許りでなく、性の觀念を彼女と戰友との間から全然除き去ることが道義上必要であつたからである。彼女も男裝問題の辯明にこの理由を擧げて居る。それ故、男裝と言ふ合理的な必要が、聖キャサリンの口から發せられた神の命令として、先づジョウンの想像に浮んだとしても、それはジョウンが狂人だつたと言ふ證據にはならない。却つて、その命令の健全なものであつたのは、彼女が並々ならぬ正氣の人間であることを證明する。が、このお告の形から考へると、彼女の思慮分別は劇的空想で操られて居たのは明かである。ジョウンの策略も亦全く健全なものだつた。彼女がオルレアンを救ひ、次でランスで皇太子の卽位式を擧げて、皇太子が王としての正當な資格とその稱號とに關して當時流布してゐた世間の疑を一掃したのは、佛蘭西を救うた軍事上政治上の大事業であつた。ジョウンの策略は丁度ナポレオンやその他の幻覺で行動した天才が樹てさうなものだつた。それは、ジョウンの所謂「幻の聖者」と言ふ保護者からの命令として表は

れて來たのであつた。然し、彼女はかう言ふ風にして觀念を想像して、男達を指揮した有能な人間に外ならなかつた。

進化に對する欲求

それなら、ジョウンのお告、幻、神の使に關して現代は如何に解釋して居るか？　十九世紀は、これを彼女の迷想に過ぎないと言ひ、然し、ジョウンは美しい女であつて、墮落した政治的な僧正にそそのかされた中世の迷信坊主のわい〳〵連にひどく虐待されて終に殺されるに至つたので、つまり彼女は、この迷想の犠牲となつた罪の無い女であると言ふのである。二十世紀は、この説明を何の味もない平凡なものと考へ、もう少し何か神祕味の有るものを求めて居る。私は二十世紀の方を正しいと思ふ。何故ならば、ジョウンが明らかに有してゐた精神的長所を認めずに、精神的短所を有する女としようとする説明は、實に可笑しなものだ。ちやんと目に見える立派な衣服を纏つた三人、夫々の名を聖キヤサ

リン、聖マアガリツト、聖ミカエルと言ふこの三人が、天から降りて來て、神から托された命令を彼女に授けたと、ジョウンは信じてゐるが、私はそんな風に信じる事が出來ない——若し信じたにしても、讀者諸君に信じて貰ひたいと言ふのではない。私がこう言ふのは、ジョウンの抱いた樣なかゝる信仰は、現在我々みんなが鵜呑みにしてゐるいくつかの近代的の信仰よりもあり得べからざる事であり架空的であると言ふのではなく、信仰には夫々流儀があり、一家族の習慣が有ると言ふのである。私の型はビクトリヤ式で、私の家庭の習慣はプロテスタント流であるから、私自身はジョウンの幻影の型をば何等客觀的に確實だとする譯にはゆかない。

然し、各個人は人生に於ける中流の狀態で、一生を暮し、富み榮え、尊敬され、安全に幸福に世を送らうとする目的を抱いてゐて、善良な中産階級（ブルジョア）なら誰でも當然それを要求し得るのであるが、その目的を遙かに超越した目的のために個人を動かしてゐる力が働いてゐるのは、一文の儲にもならないどころか實際は却つて十文も損をするやうな場合の多い智識欲や社會改良のために、人々が、貧乏や、恥辱や、追放や、監禁や、恐ろしい困苦や、

死に、進んで直面すると言ふ事實によつて起る事なのである。個人的勢力を利己的に追求するだけでは、自然を征服して人類の勢力を擴張しようとする追求に際して熱心に努力や犧牲を拂ふやうにと、人間を激勵しはしないのだ――成程かゝる勢力の擴張はその追求者の個人の生涯に何の關係もないかも知れないが。であるから、食欲と同樣、知識欲、權力欲には何の不可思議もないのである。兩方共に事實であり、單に事實に過ぎない。二つの差違は、食欲は饑えた者の生命に必要であり、從つて個人的欲求であり、後者は進化に對する欲求であり、從つて超個人的な必要である。

我々の想像力がこの超個人的力の現示を色々に戯曲化するが、その方法は心理學者の問題であつて、歴史家の問ふところでは無い。唯、歴史家は幻を見る者が詐欺師でも狂人でもないと言ふことを理解しなければならない。又言つて置かねばならない事は、ジョウンが聖キャサリンだと見たのは實はほんとうのキャサリンではなくて、進化の背後に潜んで居る衝動力がジョウンを動かし、ジョウンの想像力が戯曲化したものであつて、それが今私の隼比次と呼んだところのものである。ジョウンの描いた幻は、醉拂ひの目に映る二重

の月影や、ブロッケン・スペクトルや、反響(こだま)などとは類を異にして居るものである。これに比べれば聖キャサリンの命令は遙に有力なものである。聖者達を見たり、彼等の話すのを聞いたりした一娘を、狂人だとか嘘つきだとか言つて非難しなければならないやうに感じる唯理主義や唯物論派の歴史家や批評家よりも、神の惠を受けた人間に天人の幻の現はれるのを信じる素朴な佛蘭西の農民の方が、ジョウンに關する科學的眞理に近いのである。もしジョウンを狂人とすれば、あらゆる基督教徒は狂人である。何故なら、天人の存在を敬虔にも信じて居る人達と、天人の姿を見たと思ふ人達とは、結局この意味に於ては同じ狂人なのである。インキ壺を惡魔に投げつけた時のルウテルも、オウガスチン派の修道僧以上の狂人ではなかつた。ルウテルの方がよりはつきりした想像力を持つて居て、恐らくは飲食と睡眠が足りなかつた位のものである。

單なる圖解學(アイコノグラフィ)では不充分である

世間に普通行はれて居る宗教は皆、中心には全智全能の父、時には母と神聖なる子があつて、これを取り卷く一群の傳說上の人物によつて理解出來るやうになつて居る。これらの人物は、子供時代から心の眼に馴れて居るので、その結果、うまく心に刻み込まれる時には一生涯强く根をはる幻想となるのである。かやうな幻想を抱いて成長した人達が、絶えず宇宙に流れて居る靈感の源とか、或は德義心の鞭韃、廉恥の發露、つまり電氣マグネチズムよりもはつきりと實際上の力を有する向上心と良心のことを考へる場合には、結局天上界の幻の考で、それを考へてゐるのである、そして、例外的に强い想像家が、特に固有な謹嚴無欲の狀態になると、幻想は心の眼から肉眼へと擴がり、場合に應じて基督や佛陀や聖母や或は聖キヤサリンを見るに至るのである。

ジヨウンが受けなかつた現代教育

今日の諸君は、この事を理解するのは大切なことである。何故なら、現代の科學は幻想を輕視して、それが象徵する重大な點を見逃がしてしまつて居るからである。もしジョウンが今日再び生れ出たなら、先づ尼寺の學校に送られて、其處で十五世紀と同樣、靈感と良心を聖キヤサリンや聖ミカエルに結びつける樣に穩やかに教育せられるだらう。それから、ルイ・パストゥルやボオル・ベルの聖者達の福音の精力の要る練習を修得させられるだらう。その聖者達はジョウンに（幻によつても出來るが多分小冊子によつて）迷信深い馬鹿者にならず、又、聖キヤサリンやカソリック聖者傳中の人々を古臭くなつた神話の陳腐な圖解として棄ててしまへと教へるだらう。ガリレオは殉教者であつて、彼の迫害者は救ふべからざる無智の徒であり、又、聖テレサの昂奮狀態は間違つたものであつて、彼女は

不治のハイパアピチユイタリ、ハイパアアドレナル、ヒステルオイド、エピレプトオイドのやうなヒステリイや癲癇の類であつて、アスタアオイドでないだけだと、吹き込まれるだらう。彼女は又直感や經驗によつて、洗禮をうけ主の御體を授けられると言ふ事は輕蔑すべき迷信であり、種痘や生體解剖は開化した風習であると信ずる樣にされるだらう。彼女の新しい聖者達ルイやボオルの背後には、宗教を清め又宗教によつて清められる科學がある許りでなく、ヒコポンデリアやメランコリアのやうな憂鬱症、卑怯、愚鈍、殘忍、あら探しの好奇心、智慧の無い知識、自然の裡にある永遠の魂から嫌惡されてゐる凡てのものが存在して居て、聖キヤサリンを中心とした德義心と言ふものが無くなるだらう。新しい儀式に就て言へば、どちらのジョウンがより正氣であらうか？　水と酒精の洗禮を受けさすために赤ん坊を抱いてゆく方のジョウンか、警官を促して兩親に强ひて子供の血管にいまはしい種痘の毒液を注射させる方のジョウンか。赤ん坊に天使や聖母の話を聞かす方か、エヂプス・コンプレックスの心理現象に就ての經驗を赤ん坊に訊く方か。神聖な聖體を德の本體と考へてこれによつて我身を救はふとする方か、甲狀腺エキス、アドレナリン、

シミン、ピチユイトリン、インスリンの程よく混じた食事をとり、ホルモン刺戟の興奮飲料を用ゐ、體内の血液は豫め傳染バクテリヤの種痘や感傳性動物の血清で免疫して置いて傳染病を防ぎ、外科手術で生殖腺の抽出をやつたり、一週一回猿の精液の服用をしたりして老衰を妨いで、我身の健康と情慾を正確に都合よく取締つて行かうとする方か。

こんな藪醫者療治の背後にも眞の科學的生理學の本體が有ることは確である。然し、それと同樣に、聖キヤサリンや精靈の背後にも眞の心理學の本體が無いことがあらうか。そして、どちらがより健全な心であらうか——聖者讃美の心か、猿の精液追求の心か。ラフアエル前派運動が始まる頃から萠芽して現在迄續いて居る「中世へ歸れ」の叫聲は、次の事を意味してゐるのではなからうか。卽ち、この叫は、現代のアカデミイの繪畫に愛想をつかしてゐるばかりではなく、よく考へて見ると、迷信以上の現代の盲信主義、野蠻以上の現代の殘忍性、宗教的信仰だなどと言はさぬ現代の迫害、聖者の代りに成上り者の詐欺漢、ぺてん師、いかさま屋を尊敬する現代の破廉恥、人間をつくつた根元であり、これを無視する時には人間が破滅せねばならぬ或る絶大の力の叫と幻とに對する現代の無關心、それ

等に愛想を盡かして居る叫ではあるまいか。ジョウンやその當時の人達の眼から見れば、我々現代人の姿は、中世時代の信仰や文化から追はれたあらゆる汚れた靈にとりつかれて嶮しい崖を恐ろしい破滅の地獄へ驅け下りて行くガダレエンの豚の群に見えたかも知れない。現在の我々の狀態を正氣の標準としてジョウンがこの標準迄降りないからと言ふ理由で彼女を狂人だと宣言することは、我々の損である許りでなく我々が救はれぬ愚者であることになる。だから今、一度切りでいいから、ジョウンが狂人だといふ謬見を棄てて、彼女を少くともフロオレンス・ナイチンゲルと同樣の正氣な女と考へて見よう。ナイチンゲルは宗教的信仰の單純な具象を、當時の醫者軍人などの御歴々と絶えず爭つた程の力强い精神に結びつけて行動した女である。

お告の誤り

お告や幻は妄想に過ぎず、それから編み出した智慧は實はジョウン自身のものであると

言ふ事實は、その聲や幻が外れた時、殊に彼女を確かに救つて遣ると言ふお告のあつた例の裁判の間に、よく現はれて居る。裁判の際、彼女はいろ〳〵と空頼みを起した。それは無理からぬことだつた。彼女の軍隊での同僚ラ・ヒイルは、さまで遠からぬところに可なりの軍勢を率ゐて居た。又、彼女の一味徒黨であるアルマニャックは、心から彼女を救ひたがつてゐた、そしてその計畫にジョウン自身程の勇氣を起したならば、ジョウンの救命は見事功を奏することが出來る筈だつた。ジョウンには、みんなが自分の死を悅んで居る事や、中世の武將や國王すら教會の中から罪人を救ひ出す事は、軍事上の勳功が示すやうな單なる外形上の困難以上の困難であると言ふことが、理解出來なかつた。彼女自身の見解に從へば、彼女が救を豫期したのも當然のことであつた。だから、聖キャサリンが彼女は必ず救はれると確めてくれるのを聞いたのである。聞いたと言ふのは、實は彼女自身の心を見出してさう思ひ込んだのであつた。彼女が感違ひをして居たことがはつきり分つた時、即ち火焙りの柱へ引き出されても、ラ・ヒイルがルアンの門前へ押寄せもせず、そこを警備して居たウオリクの兵士を襲擊もしないと分つた時、すぐと彼女は聖キャサリンと緣を切り、

前言を取消した。これ以上に正氣なそして實際的なことがあらうか。ところが取消しによつて得たものは終身の嚴しい幽閉囹圄だと知るや、その取消しを徹回し、その代りに思慮深く明白に焚刑を選んだ。この決心は、彼女の英斷的な性格を示す許りで無く、人間の最後の試練に自殺を選んだ唯理論（ラシヨナリズム）を示すものである。而も、これにさへ尙幻想が存してゐた。彼女は自分が死んで天に歸るのは、お告が彼女に命ずるものであると宣言したのであつた。

ガルトン説の幻視者としてのジョウン

いかに疑深い科學的な讀者も、こゝに至つて、心の不完全を何等問ふことなく、ジョウンがフランシス・ガルトンやその他現代の人間能力研究者連が幻視者と呼ぶところの者であることを、明かな事實として認められるであらう。彼女が幻に聖者を見たのは、丁度他の或人達が數學の圖表や數のちらばつてゐる風景を幻に見て、非幻視者には出來ない記憶や計算の巧みさを見せ得るのと同じである。幻視者にはこれはすぐに理解の出來る事であ

る。ガルトンの著書を讀んだ事のない非幻視者には、こゝの所が腑に落ちず、首肯しかねるかも知れない。そんな人は友人にでも一寸聞いて見れば直ぐ次のことがわかる。即ち、心の眼はその働に大小は有るがとにかく魔法の提灯であり、街を歩いてゐる多くの普通の正氣ある人間は、あらゆる種類の幻想を持つて居て、これをすべての人間の極く普通な永遠の飾りと心得てゐることだ。

ジョウンの男らしさと軍國主義

ジョウンの今一つの特異性（アブノルマリティ）は、軍人になる事や男の生活に對する狂望であるが、これは非尋常なものの中では餘りに尋常すぎるから、彼女獨特のものとは言へないだらう。父は彼女にそれをやめさせようとして、もし彼女が軍隊に加はるために出奔したら溺死させるぞと威脅し、自分がその場に居合さなかつたら代つて溺死させてやれと伜達に命じた。この無謀な言附けは明らかに本氣ではなかつたのだが、これを本氣だと考へる程ジョウン

を年若い子供と思つて言つた言葉に違ひない。だから、ジョウンも一途な子供心として、出奔して兵士になりたいと思ひ込んだに違ひない。ムウズ河に投げ込まれて怖い父や強い兄貴達に溺らされると言ふ恐しい豫想があつたので、父の怖さが無くなり兄貴達が彼女の天性の統御力に心服する迄は、彼女はじつと靜かにして居た。その頃には、男子や軍人の生活をするのは、單に家を出奔するだけの簡單な事件ではないと言ふことが分る位に充分な分別が出來てゐた。然し、さうした生活をして見たいと言ふ氣は去らなかつた。そしてこれが彼女の未來を決定する根本的なものであつた。

これを疑ふ人があるなら、自分で考へて見るがいい。——何故に神から皇太子への特命を受けた娘が（これはジョウンがまだ戴冠式をしない王の逆境を恢復し得る非常に有力な方法を如何に考へて居たかを示すものである）同じ使命を帶びて王の狂父や賢明な祖父のところへやつて來る他の婦人達がした樣に、彼女も亦一人の娘として婦人服を着て宮中に出て、女口上で忠言を進める事をしなかつたのか。又、何故に、彼女は自ら進んで軍裝して、武器、劍、馬、鎧を携へて、自分の護衛兵を戰友扱ひにし、性の差別の無いかの樣に、

夜には、彼等と床の上で雜魚寢したのか。それにはかう答へる人があるかも知れない、この遣り方は、敵の軍隊や敵味方の脫走兵の掠奪團がはびこつてゐる地方を旅するには最も安全な方法であるからだと。然し、この答には何の重みも無い。何故なら、この答は、當時の佛蘭西を旅した婦人で、女以外の姿で旅しようなどとは夢にも思はなかつた婦人の全部に適用されるのだから。假りにこの答を受け入れるとしても、次の事實をどう說明するか。卽ち、戰が終つて、彼女が女裝で宮廷に出ても全々安全であり且つそれが明らかに一層適當してゐる時でさへも、尙男裝して居て、ヴイクトリア女王が戰務局に勸めてロバアトをトランバアルへ派遣したやうに、シャルルに勸めてオルレアンのデュノアを救ひにダランソン、ド・レエ、ラ・ヒイル等を派遣する代りに、ジョウン自ら出陣して、攻擊軍を一人で指揮しなければならないと主張してゐるではないか。何故に、彼女は槍術の技倆や騎士としての馬上の雄姿を見せたのであるか。何故に、彼女は鎧や軍馬や男の陣羽織の贈物をうけ、又あらゆる行爲に於て女としての俗習的な性格を拒絕したのか。これ等のすべての疑問に對する簡單な答は、彼女は男の生活をして見たがつて居る種類の女であつたと言

ふ事である。この種類の女達は、陸海軍の何れかゞあるところには何處にでも必ずゐるもので、男に變裝して驚くべき長い間露見を脱れ、往々にして、最後迄露見せず居る。その女達は輿論をものともしない立場に立つと初めて假面を脱ぐ。ロザ・ボンウウルは男子用の外衣とヅボンをつけて畫筆を執り、ジョルジュ・サンドは男暮しをして、彼女のショパンやド・ミュゼに無理に女の暮しをさせて樂しんで居る。もしジョウンが此等の「女らしからぬ女」の一人で無かつたらもつと早く聖者にされてゐたかもしれない。

然し、女の生活をするからとて腰卷を纏ふ必要が無いやうに、男の生活をするためにズボンを穿いたり大きな葉卷を吹かす必要が無い。普通の文明生活中に長上衣（ガウン）を纏ひ婦人用のチョッキをつけ、自分のこと他人のこと又自分の一家族の男達のことをも處理して居る女で、趣味や嗜好の全然男性的な者が澤山に居る。このやうな女は何時でもゐるもので、女が男よりも法律上の權利が少なく、且つ現代の樣な婦人の知事、市長、國會議員などのなかつたビクトリア朝時代にさへゐたのである。今日の我々の世紀でさへ、反動的な露西亞では、女兵士が女丈夫（アマゾン）の有力な聯隊を組織して居たが、この聯隊は革命には反對の近衛

聯隊であると言ふ理由で廢されてしまつた。軍務から女が除かれる理由は、男で無ければ本質上軍務に適應しないと言ふのではなく、大勢の女子を失つては一般社會が繁殖しないからである。男なんて少し位居なくても濟み、從つて犧牲にされると言ふ譯だ。

ジョウンは自殺狂か

以上二つの特異性はジョウンの心にあるどうすることも出來ない力强いものであつた。そして、このために焚刑に處せられたのだ。然し二つとも彼女だけが持つて居るものではなかつた。たゞその精神や性格の熱とゆとり、そして生々とした精力の緊張だけが、彼女特有のものであつた。彼女は自殺狂の傾向があつたと非難されて居る。高さ六十呎と言はれた塔を飛びおりてボオルヴオワアル城を逃げ出さうとしたのは、縛られたまゝ數日後に墜落から恢復したにはしたが、たしかに理性を踏越えた行爲であつた事は事實である。自由を奪はれた生活と自分の命とを交換する考で死を撰んだのはよく〳〵考へた結果であつ

た。ウオタルウのウエリントンのやうに、又戰爭中必ず綺羅びやかに着飾つて堂々と後甲板を歩いたネルスンのやうに、彼女は戰場に於ては死と挑み合つて居た。ネルスンやウエリントンや、その他伸るか反るかの離れ業をやつて、俘虜となるより死を望んだ連中が、自殺狂の譏を受けて居ない以上、ジョウンも自殺狂の疑を受ける要は無い。ボオルヴオワアルの事件では、その身の自由よりももつと重大なものがあつたのだ。即ちコムピエヌが今にも陷落しさうだとの報せで彼女は氣が轉倒して、もし我身が自由になりさへすれば、コムピエヌを救ふ事が出來ると信じたのである。成程、飛び下りと言ふ事は大いに危險であるが、彼女の良心は安閑としてそれをしないでゐる譯にはゆかなかつた。その點を彼女はいつものやうに「初めは聖キャサリンが飛び下りるのを禁じたが、自分がどうしても聽かないので、後ではこれを許した」と言つて居る。

結局のジョウン

今や我々は、並々ならぬ剛健な精神と少年のやうな大膽さを持つた、正氣で敏活な田舍娘として、ジョウンを受入れ且つ尊敬することが出來よう。彼女の行爲は全部目論見があつての事である。そして、その筋道が彼女に殆んど氣が附かぬ程早く進行して行つたので、「お告」のせいにしてしまつたのだけれど、彼女にはちやんと策略があつたので、決して盲目的な衝動で動く女ではなかつた。戰爭では彼女はナポレオンに劣らぬ現實主義者であつた。砲兵に對してナポレオンと同じ目、砲兵の働きに對してナポレオンと同じ知識を有つて居た。彼女は包圍された都市を往時のジェリコの樣に太鼓の音で陷落させようなどとは思はず、ウエリントンのやうに相手の防禦の弱點を攻める方法を採り、自分が飽く迄頑張れば相手は屈服すると言ふナポレオンの戰略に先鞭をつけた。例へば、オルレアンの彼女の最後の勝利だつて、まだ勝敗が定らないのに一日の戰の後で指揮官デュノアが退軍太鼓を

鳴らした後で獲得したものであつた。彼女は一瞬間と雖も、多くのロマンス作家や劇作家の書いてゐる樣なロマンティックな若い女ではなかつた。彼女はその百姓風な實際的なことと頑固さでは、全然土の娘であつて、領主や國王や高僧を尊んだのは、偶然崇拜や賤民根性からではなく、彼等の個人としての價値を一目見て知つたからである。彼女は公の禮節に就ては尊敬すべき田舍婦人としての分別を持つて居て、卑猥な言葉を許さず、常に宗教的なものの見方をし、評判の惡い女が自分の部下の兵士に縋りつくのを容赦しなかつた。彼女の口癖に、敬虔な叫聲 "En nom Dé!" と意味の無い呪 "Par mon martin" と言ふ言葉があつた。彼女はこの呪の言葉を度すべからざる罰當りのラ・ヒイルが自分と同樣に用ゐるのを默つてゐた。風紀の糜爛した軍隊の自尊心を恢復するのに、彼女のこの律義さが大いに價値のあつたのを見ると、これも彼女の一般の策略と同樣、充分の目論見が立つて居たものであるのがわかる。下は勞働者から上は國王に至るあらゆる階級の人々に對する彼女の言動には、何等當惑したところも氣取つたところもなく、彼等が怖れたり墮落したりして居ない時には、彼等に彼女の望み通りの事をさせた。彼女は賺しなだめることも出來たし、促し叱ることも出來た。彼女の舌は柔い一面と鋭い一端を持つて居た。彼女は非常に有能な人間であつた。生れつきの親方肌だつた。

ジョウンの未完成と無知

然し、以上のことには一つの重大な制限が加へられなければならない。彼女は二十歳にならぬ一人の娘に過ぎなかつた。かりに彼女を五十歳位の腕利きの女として考へて見れば彼女はどんな型の女か直ぐに分る。何故なら、我々の間には五十位の腕利きの女が澤山居て、ジョウンが五十迄生き長らへたなら、或はこうも成つたであらうと思はれる種類の女を充分に示して呉れる。何と言つてもジョウンは一人の娘に過ぎない。男の虚榮や、社會力の重さや比例に就ては全くの無知であつた。彼女は天鵝絨の手袋に包まれた鐵の手と言ふものを知らず、只用ゐるに拳あるだけであつた。彼女は政變と言ふものを實際よりは輕視して、一民族以外の世界を知らなかつたマホメットのやうに、各國王に書を送つて一千

年毎に領土の再整理をするようにと要求した。その結果、ジョウンの成功したのは、全く簡單で且つ敏捷な肉體的な力によつて成し遂げられる企許りで、例へば戴冠式とかオルレアンの戰役のやうなものであつた。

學校教育を受けてゐなかつた爲に、中世の大きな宗教上の制度や社會的制度の樣な精巧を極めた人工的な組織を處理しなければならない際には、大いに困窮した。彼女は異端者を非常に恐れて居たが、彼女自身が異端の創始者であり、歐洲を二分して、今尙止まない流血の數世紀を惹き起こしたところの宗派爭ひの先驅者の一人であるのに毫も氣附いては居なかつた。彼女は譯の分つた理由で外國人を拒絕して、佛蘭西の土地は外國人の居るべき處では無いと言つた。然し、それが因で、本質的には國際的な問題であるカソリック主義と封建主義との爭鬪を起すに至つたが、彼女には何故にさうなつたのか分つて居ない。彼女は常識一點張りで行動した爲に、學識が制度や組織を理解する唯一の手づるであるところでは、彼女は暗闇の中を手探るやうなもので、それにぶつかつて向う脛を折つたのであつた。而も途法もなく自負心が强かつたので、それだけに傷がひどかつた。これが彼女

を軍事以外の事件では不注意極まる人間にしたのである。

彼女の年齡が不適當なこと、學問の素養の無いこと、反對に偉大な天禀の能力、氣力、勇氣、獻身、獨創力、奇癖を持つてゐること、これが一つに結合して、彼女の生涯の全事業を十分に說明し、更に彼女を信ずべき歷史的なそして人間的な人物としてゐるのである。然し、このために、彼女の周圍には彼女を偶像化するロマンスが起り、そのロマンスに反抗して彼女を誹る懷疑論が起つて、不調和極まる矛盾衝突を起してゐるのである。

文學に現れた「乙女」

英國の讀者は、ジョウンに就て最も親く讀んだ書物に、此の偶像化と反動とがどんな風に現れて居るかを知りたいであらう。シエエクスピアや或は僞のシエエクスピアの三部劇「ヘンリイ六世」の第一部には、ジョウンが主役の一人となつて出て居る。此の劇中のジョウンの描寫は、倫敦新聞の一七八〇年のジョオジ・ワシントン、一八〇三年のナポレオン、

一九一五年の獨逸皇太子、一九一七年のレニンの描寫よりも正確ではない。此の劇は單なる惡口で終つてゐる。此の劇が與へる印象は、作者は初めジョウンを綺麗なロマンチックの女に拵へ上げようと企てたのだが、わい〳〵連から「英國の愛國心は英軍を破つた一佛人を最負する脚本は氣に入るまい、だから早速書き直して、昔ジョウンが魔法使で淫賣婦だと攻擊されたのをその儘に引用して、ジョウンにはそれ等の罪が有ると書かなければ、その脚本は上演されまい」と告げられたと言つた樣な感じである。嘘のやうだが、これは實際にあつた事なのだ。成程、たゞ一個所だけ明かに、ジョウンをバアガンディ公爵に懇願の熱辯を振つてゐるヒロインとして描寫して最負目な見方を示してゐるところがあるにはあるが、それもその後の大詰邊りでは憎らしい惡體をついて居る。これは、原本は全くジョウンの惡口許りのものであつたのを、シエエクスピアが初めの數場に手を入れたものと推測される。だが、この作品はシエエクスピアが前人の作品の燒き直しを事とし始めたばかりの時で、充分に出來上つた自家の型を持つて居なかつた時期に屬するものだから、この推測を立證する事は不可能である。道德味の貧弱で低級な此の劇には、シエエクスピ

アの筆致は歴然と窺ふべくも無いが、彼は乙女の姿に假りの光輝を注いで、劇の明かな下劣さを救はうとしたのかもしれない。

二世紀飛んでシルレルに至ると、オルレアンの乙女はロマンスの煮え立つ魔女の大釜に溺れて居る。シルレルのジョウンは本當のジョウンと一點の似た所もなく、今迄にこの世に居たことも無いやうな女である。彼の劇に就ては、それは全然ジョウンを描いた劇でないと言ふより外に言ひ樣が無い。否、ジョウンを眞似た劇だとさへ言ひ難い。何故ならばシルレルは彼女が火焙りになるのを見るに忍びないとして、ジョウンを戰場で死なせてゐる。シルレル以前にはボオルテエルがゐて、ラ・ピュセル La Pucelle と題する狂詩を書いて、ホオマアを諷刺的にもじつてゐる。ラ・ピュセルは猥褻な譏文として讀む者の道義的公憤を招き、一般から棄てられて居る。私も確に、甚だ無作法な作品だと言ふ非難を辯護することは出來ない。ラ・ピュセルの目的は、ジョウンを描くのではなくて、その當時の制度風俗中ボオルテエルにとつて當然憎むべきであつた凡てを笑殺しようとするにあつた。彼はジョウンを馬鹿者に仕立てたが、賤しい或は（比較的に）不貞な女とはしなかつた。

そして彼が、ホオマア、聖ピイタ、聖ドウニ、剛勇デユノアをも馬鹿者扱ひにし、詩中の他のヒロイン連を不義不貞な女として居る點から見れば、ジョウンはお手柔かな取扱ひを受けた方だと言つていいかもしれない。彼が作中の各人物を驅使する事すこぶる亂暴で、而も、ホオマア式の自由さで歴史的眞實のあらゆる假託や可能性からさへ離れてゐるから、それを眞面目に考へる風をする人は、お世辭上手の僞善者と言ふことになる。サアミュアル・バアトラは、イリアッドを以て希臘の主戰論や希臘の宗教を諷したもじりで宿屋の亭主か奴隷の書いたものと信じて居た。ラ・ビュセルはバアトラの話を殆んど確定させて居る。ボオルテエルは、皇太子の情人で、ジョウンが一度も會つたことのないアニエ・ソレルを、妾風な貞操を一途に抱いて、そのために熱情を費ひ果し、絶えず好色な仇敵に弄ばれて右から左へと誘拐されて苦しむ運命の女として描いて居る。ジョウンが飛翔する驢馬に跨つて居たとか、裸のところへ不意打を喰ひながらも劍を振つてアニエを庇つて敵に可なりの損害を與へたとか言ふ戰爭の話は、目的あつての拵へ事として躊躇なく一笑し去つてよい。何故なら、正氣の人なら誰れがそれを本當の歴史と考へるものか。だが、ボオルテ

エルの不躾不作法の方がシルレルの眩惑的な感傷主義よりは增しであるかもしれない。成程ボオルテエルは、ジョウンの父を僧侶であつたと確定すべきではなかつたが、然し彼がécraser l'infâme（佛蘭西教會）に屬してゐなかつた時は、これと言つてやつつけるものが無かつたのだ。

今日までのところでは、乙女に就ての文學上の描寫は傳説的であつた。然し一八四一年にキシエラによつて彼女の裁判や名譽恢復の顚末が公開されてからは、問題は新しい立場から眺められるに至つた。此の全くありの儘の記錄は、ボオルテエルのホオマアもじりの狂文やシルレルのロマンチックな馬鹿話が取り逃した生々とした興味を、ジョウンに起こさした。この興味が英米に及ぼした結果の代表的な作品は、マアク・トウエンとアンドルウ・ラングの書いたジョウンの歴史である。マアク・トウエンは、直接キシエラに依つて純然たるジョウン崇拜者に改宗したのである。その後、一人の天才アナトオル・フランスが出て、ジョウン熱中のキシエラ的風潮に逆つて、ジョウンの生涯を書いて、ジョウンの考へは宗教的興奮に基くものであり、ジョウンの軍事上の成功はデユノアが拔目無く彼女を

「福の神」として利用した爲であるとして居る。つまり、アナトオルはジョウンが眞に軍事上政治上の能力を何等持つて居なかつたと言ふのである。アンドルウはこれを眞赤になつて憤慨して、アナトオルの首を叩き斬る勢で、その向ふを張つてジョウンの生涯を書いた。これはアナトオルの謬見を訂正するものとして讀む必要がある。ジョウンの才能は、僧侶や兵士が拵へ上げた幻影に過ぎぬと解釋される樣な不自然な働きでは無くて、正眞正銘の事實であると言ふことを、ラングは容易に述べ表はして居る。

この二人の關係は、從來次のやうな説明で輕く片附けられてゐた。卽ち、アナトオル・フランスは藝術の世界の巴里っ兒であつて、役に立つ、實用向は、がさがさした手を持つた女は、よしんば佛蘭西の田舍を治め商工地の巴里を統べたところで、彼の頭の中へは入つて來ないのであり、一方、ラングはコットランド人の一人で、スコットランド人らしく妻はどちらかと言へば夫に勝ると言ふことを知つて居たのである、と。然し、この説明は私を説き伏せない。アナトオル・フランスともあらう者が誰でも知つてゐることを知らないなどゝは信じられない。又、彼の知つてゐることは誰でも知つてゐて貰ひたい事なのだ。

彼の著書を讀むと、反抗の氣分が漲つてゐるのが感じられる。彼はジョウン反對者ではなく、僧侶反對者、神祕反對者であつて、世間にほんとうのジョウンの樣な者が居ようなどゝ信ずることの根本的に出來ない人間である。

マアク・トウエンのジョウンが、地面にスカアトを引摺り、玩具の箱船のノアの妻と同じ位多くのペティコオトをつけてゐるのは、將軍バイアドとブリイク・ハウスのエスタ・サムマアスンを一緒にして、鎧姿の申分のないアメリカの小學校教員を作るためであつた。エスタ・サムマアスンと同樣に、ジョウンも自分を作つた者を笑ひ者にしてしまつたが、元々天才の作品だけあつて、作者の痴情にも拘らず、詰らない事を有難がる人間的なところが尤もらしく現はれて居る。間違つてゐるのは、描寫であつて、價値ではない。アンドルウ・ラングもマアク・トウエスも共に、ジョウンを綺麗なビクトリア時代の貴婦人にしようとした。然し、二人共にジョウンの統御力を認め、それを主張もした。たゞスコットランドの學者ラングは、ミシシッピ河の水先案内トウエンよりもロマンチック味が少い。それに、ラングは一生涯の職業上の習慣から傳記作者と言ふより傳記の批評家であるが、トウ

エンは明かにロマンスの形で傳記を書く男である。

中世時代に就ての新教徒（プロテスタント）の誤解

然し、彼等作家には共通した一つの無能な點がある。ジョウンの歴史を理解するには、彼女の性格を理解するだけでは充分ではない。是非彼女の環境をも同様に理解しなければならない。十九、二十世紀の環境に置かれたジョウンは、今日十五世紀の鎧姿でピカデリ街を散歩するとしたら、かうもあらうかと思へる様に不調和である。彼女に相應する背景に立たして彼女を見ようとするには、中世時代に存在して、中世時代に解釋されてゐた基督教、カソリック教會、神聖羅馬帝國、封建制度を理解しなければならない。もし諸君が中世時代を暗黒時代と混同して、諸君の伯母が、「中世の衣服」――千八百九十年頃に流行してゐたのを指すのであるが――を着てゐるからとてこれを馬鹿にする癖があつたり、世界はジョウンの時代よりも、道德的にも機械的にも非常に進歩して居ると固く信ずるなら

ば、ジョウンの火焙りの理由も分らぬだらうし、諸君が假りに彼女の裁判の時の役人の一人だとしたら、きつと火焙りの方に贊成したに違ひない事も悟るまい。そして結局、彼女に就て重大なことを何一つ知らずに居ると言ふ事に氣がつくのだ。

ミシシッピ河の水先案内が、この誤解の淵に陷ち込んだのは當然過ぎる事である。中世時代の愛らしい教會堂を眺めても何等の情緒も感じなかつた「海の彼方の無邪氣者」のマアク・トウエン、中世の騎士制度のヒアロもヒロインも街の不良少年の見たお笑ひ者の様に書いてある「アアサ王朝の一ヤンキイ」の著者トウエン、彼は最初から讀まれる價値が無い。アンドルウ・ラングの方が餘計に讀み甲斐がある。然し、ラングはウオルタ・スコットと同様、中世史をばロマンス風な物語の一部分として眺め、カソリック的信仰の上に基礎を置いた高い歐州文明の記錄として眺めなかつた。兩人共に新教徒の洗禮を受けてゐて、すべての教育や大概の讀書によつて、異端外道を火刑に處するカソリックの僧正は、どんな惡事を犯しても良い天下御免の迫害者であり、アルビゼンセズの連中やフス一派や猶太人や激烈な新教徒は皆異端外道であり、宗教裁判所は特にかゝる外道許りを燒き殺す爲に

設けられた恐怖屋敷であると言ふ考を、植えつけられてゐた。だから彼等二人は、ジョウンを火刑に送つた裁判官ペテル・コオションやボオエイの僧正を、良心無き惡人として描き、彼女に下されたすべての尋問は、彼女をそれに掛けて破滅させる爲の「罠」であつたと敍して居る。更に、二人は、コオションに對する陪席判事の位置に居た五六十人の寺院評議員連や法律及び神學の博士達は、少し低い位置に違つた法冠を被つて五六十通りに姿を現はしたコオションの復製であると、躊躇なく主張してゐる。

ジョウンの裁判が比較的に公平だつた事

コオションが、ジョウンに同情し過ぎると言つて英國側から脅迫や侮辱を受けたのは事實である。最近の佛蘭西の一作家は、ジョウンの火焙りを否定し、コオションが彼女を逃がしてその代りに他の人間か他の品物を燒いたのであつて、後にオルレアンやその他の諸處でジョウンの名を騙つた者が現れたが、それこそまがふかた無き本物のジョウンである

と言つて居る。コオションがジョウン最負だつた事を、此の作家は自說を强めるために引用したつて差支無い。陪席判事に就ての異論は、彼等陪席判事を官服を着た惡人の群とせずに、ジョウンの敵方の政治的な同類であるとするのである。これはこの種のすべての裁判には有効な反對論である。然し、中立裁判所が無かつたのだから、この種の裁判は已むを得ない。もしジョウンが佛蘭西の彼女の味方の手で裁判を受けたとしても、それは佛蘭西の彼女の反對黨の手で行はれた裁判と同樣に不公平なものだつたらうと思ふ。又、兩者を同等に混じた裁判だつたら、意見が衝突して裁判は進行しまい。最近のこの種の裁判で獨逸裁判所でのエディス・カベル、英國裁判所でのロオジャ・ケエスメントの裁判のやうなのには、ジョウンの時と同樣の抗議は免れなかつたが、中立裁判所が使へなかつたので、二人は死刑に處せられた。エディスは、ジョウンと同じく異端の女であつて、大戰中に彼女は世界に向つて「愛國主義だけでは十分でない」と宣言した。彼女は負傷した敵を看護し、四人の脫獄を手傳ひ、敵味方の區別なく亡命者困窮者を救ふ旨を遺憾なく示し、基督の前にはトミイもジエリイもピツウも何の差別もなく同じ佛蘭西兵であつた。エディスが次の

事を望んだのも無理からぬことであつた――即ち、中世時代を現代に返して、自分の訴訟を二人の腕利きの判事によつて基督教國のカソリック法に從つた裁判を受け、この判事を助けるに法律の素養あり神に仕へる事を誓つた五十人の公民を有し、その人達を相手に數週間も坐し又坐して議論し續けたいと。だが現代の軍法會議は遠慮會釋のない所だ。彼女は即座に銃殺された。彼女の國の人々は敵にその頑迷を悟らすのが此の時だと許りに、彼女の記念像を建設したが、「愛國主義だけでは十分ではない」の文句はその臺石に彫らないやうに特別の注意を拂つた。だが、この文句を除外したことやその除外の裏に隱れた僞りに關しては、若し何等かの天の力がかゝる德義的卑怯者を明らかに告訴すべきだと考へたとして、彼等が審きを受けなければならぬ場合には、彼等はエディスの仲裁を必要とすることだらう。

この事は、これ以上の詮議には及ぶまい。ジョウンは至當の迫害を受けたので、現代でもあの樣な迫害を受けたに違ひない。火焙りが絞殺や銃殺に變るのは結構な變化だとは思ふが、通常法の下に行はれる愼重な裁判が、軍事的暴政の亂暴極まる即決裁判に變るのは

有難くない變化だとしか思へない。然し、慈悲容赦の點から論ずると、一四三一年のルアンの裁判や刑の執行は今日の事件と何等變りが無い。從つて、我々は我々の良心を非難してもいいのだ。假りにジョウンの事件が今日ロンドンで我々の手で取扱はなければならぬとしたら、彼女は、ミス・シルビア・パンクハアストや、無教會徒（ベキュリアエイプル）や、子供に義務教育を施さぬ兩親や、或は、善惡何れにせよ、我々が引かなければならない容赦と非容赦との間の一線を越えた者は誰でも受ける以上に寛容な取扱ひを受けはしないだらう。

ジョウンは政治犯として裁判されたのでない

その上、ジョウンの裁判は、ケエスメントの樣に國家的政治的なものではなかつた。一體、教會法廷や宗教裁判所は（ジョウンは此の二つの合同裁判を受けたのである）基督教の裁判所である。即ち、國際的裁判所であつて、ジョウンの罪名は、賣國奴ではなく、異

端、瀆神者、魔術使、偶像崇拜者だつた。彼女が告發された罪は、英國や或は佛國内のバアガンデイ人やに對する政治的な犯罪ではなく、神と基督教の一般道德とに對する罪であつた。そして、現代の我々が國家主義と呼ぶ思想は、中世の基督教社會の觀念にとつては全く未知なものであつたので、ジョウンの國家主義は異端の罪を更に重からしめるものとして非難されたであらうと思へるのであるが、事實は左樣な非難を受けては居ない。又、佛人の團體、例へば陪席判事達が抱いてゐた政治上の偏見は、外國人たる英人に都合の好いやうに傾き（たとひ英人が事實とはまるで反對に佛人と調子を合せて居たにしても）、そして英人を征服した自國の女に不利なやうに強く傾いたのだらうと想像するのは不合理である。

この裁判の悲劇的方面は、十戒の最も簡單なものにさへ觸れぬ罪名で判決を受けた囚人と同じく、ジョウンも何故に自分が告訴されたのか分らなかつた事である。彼女はペテル・コオションよりも遙かにマアク・トウエンに似てゐる。教會に對する彼女の歸依は僧正の歸依とは類を異にして居たから、僧正の見地から嚴重に審問されては實際耐まらないのだ。

彼女は教會が感じ易い魂に與へる慰安を悦んだ。彼女にとつては、懺悔や聖餐は悦樂であつて、それに比べると五感の卑しい快樂は芥屑であつた。彼女の信仰は、普通に神に仕へて宗教が一つの仕事に過ぎない人達の目からは、超人間的に見えた。然し、教會が、彼女の好む悦樂を與へずに、神意に就ては教會の解釋に從つて彼女自分の解釋を犧牲にしろと要求した時に、彼女はきつぱりそれを拒んで、カソリック教會に對する彼女の考は自分こそ法王であるといふ考であるのを示した。教會はどうしてこれを默つて居ることが出來たらう。丁度其の頃は、教會はフスを滅した許りであり、ウイツクリフの一生に次第に烈しくなる怒の眼を向けて居て、もしウイツクリフが教會の激怒を招かぬ前に自然な死方をして居なかつたなら、彼も亦焚刑に處せられてゐただらうと思はれる頃だつたのだ。フスもウイツクリフも、ジョウンの樣な露骨な反抗者ではなく、ルウテルの樣に教會改革者であつた。しかるに、ジョウンはエデイ夫人のやうに、教會がその上に建つてゐる土臺石とも言ふべき聖ピイタに何時でも取つて代らうとして居たし、マホメットの樣に、自分だけが得た神の啓示を基にして、凡ての問

題を解決し、あらゆる場合に處してゆる心構へでゐたのだ。

ジョウンの主張の最も悪い事は、彼女自身さへそれに氣が附かなかつたと言ふことでも分る。これは我々から言へば彼女の純眞無垢なところであり、彼女の仲間から云へば彼女の單純さであつた。彼女が直面した事件の解決は、彼女にとつては分り切つた常識のやうに思へたし、又事實大概さうであつた。そして、それ等の解決がお告によつて彼女に現はれて來るのも、彼女にとつては簡單な事實であつた。分り切つた常識や簡單な事實が、どうして彼女には異端といふ恐ろしい事に思へようか。競爭者の女豫言者連が現れて來た時に、彼女はその連中を嘘附きでいかさま師だと罵つたが、彼等を異端であるとは決して考へなかつた。彼女は教會の意見については全くの無知な樣子であつた。教會としても己の權威を放棄する譯にもゆかず、存命中の而も二十歳にも滿たぬ女のために三位一體の側に一席を與へるなどとは思ひもつかぬことであつたしするので、教會は彼女の主張を容赦することが出來なかつた。かくて、一つのあらがふことの出來ない大きな力が動かすことの出來ない障害にぶつかつて、それが終には熱を發して、哀れにもジョウンを燒き盡くして

しまつたのだ。

假りにマアクとアンドルウが宗教裁判に掛けられたとしたら、彼等も亦ジョウンと同じく無知と言はれ、ジョウンと同じ運命に會つたであらう。と言ふのは、裁判に關するこの二人の説明は、もしジョウンが物を書く事が出來たとすればかうもあらうかと思ふ程矛盾だらけなものである。コオションを卑劣漢と言ひ、ジョウンに下された尋問を良であつたと言ふ二人の推測を裏書きするのは、ただ二十五年後に、ジョウンの名譽恢復を取計つた裁判があるといふ事實だけである。而も、この名譽恢復の擧は、英國の王政復古の保守論者がジョウンとは反對にクロムエルの名譽を奪つた裁判同樣に墮落したものである。コオションの墓は發かれ、遺骸は溝の中に投げ込まれた。彼を騙りと非難し、それ故その裁判を無効だと宣言するのは一番面倒が無くてよい。これは、自分の面目が乙女の面目によつて左右されて居た戰勝王シャルルを初め、ジョウンを記念して偶像化した愛國的な國家主義のわいわい連に至る迄、誰もかれも望んでゐたことであつた。英國人は佛蘭西の地を立去つたのだ。英國人に都合の良いやうに下された判決は、折角ジョウンの手で基礎附けら

れた王位や愛國主義に對する侮辱であつたのだらう。

我々には、我々を偏見に陷らしめるこのやうな政治的方便とか輿論とか言ふ力强い動機が無い。我々にとつては、第一回の裁判が有効である。名譽恢復の擧は、その結果としてジョウンの心を索く性格に就いて眞面目な研究が數多起つた事以外に、大して必要なものとも思へない。すると、こゝに一つの疑問が起る——五百年後にジョウンを聖者とした際に、教會はその第一回の裁判の判決を如何に解決したか？

教會は「綸言汗の如し」か

それは分り切つて居る。カソリック教會では、法律に於ける以上に、過失が有れば必ず一方ではそれの救濟が講じられて居る。私(わたくし)の判斷の最上權を個人に對して認めるのが新教(プロテス)徒主義(タンティズム)の根本であるから、反對側のカソリック教會としては、ジョウン流の私の判斷を是認することは出來ないのだ。然し、最高の智慧は個人へ神の啓示として現れるものだと言

ふことを許すことによつて、美點として私の判斷の存在を認めて居る。充分の證據があれば、カソリック教會はかゝる個人を聖者と名附けるのである。だから、啓示とは幻影となつて現れる僧侶姿の人物の言葉よりは寧ろ私の判斷の啓發によるものであるから、聖者とは、英雄的德行ある人で、その私の判斷には特權を與へられてゐる者であると言つて差支なからう。多くの革新的な聖者、殊にフランシスやクララは、その存命中は教會と爭ひ、死後には彼等を聖者とすべきか異端とすべきかの問題を惹き起した。フランシスはもう少し生きてゐれば火刑へ送られてゐたかもしれない。だから、初めは異端外道として破門され、更に考慮の結果聖者に推尊されることは決して不可能な事ではない。一教區の教會裁判が下した破門の判決は、教會が完全無缺と宣言する種類の法令の一つではない。新教徒の讀者には次の如く言つた方が良いかも知れない、法王の完全無缺の教理は存在する中で何よりも一番謙遜な主張である、と。現在の完全無缺なデモクラシイ、現在の完全な醫學會議、現在の完全な天文學者、現在の完全な裁判、現在の完全な議會に比べると、法王は埃の中に跪いて、神の玉座の前に自分の無知を告白し、たしかな歴史上の事柄について

他の誰よりも明らかに多く知つてゐるのに、自分の決定が絶對のものとなるやうにとひたすら祈つてゐる樣なものだ。教會は、ガリレオを聖者にしても良いし、多分後日に至れば聖者にするであらう。その際、教會は單純な人達――重要な事柄に關するその人達の合理的信仰が、ジョシュア戰役の年代記を醫學の論文だと考へる不合理な信仰の爲に束縛されて來たが――そんな人達がジョシュア書に要求する完全無缺さとは妥協しても、教會が法王に要求する完全無缺さとは妥協しないのだ。だが、當分は教會はガリレオを聖者にしまい――しなければ惡いんだが。一方、何等妥協しなくともジョウンを聖者にすることが出來た。ジョウンは太陽が地球を廻ることを疑はなかつた、彼女は太陽の廻るのを絶えず見て居たのだ。とにかく彼女の火焙りは、彼女に對し世界の良心に對して大きな不正であつた。「懷に入る者これを殺さず」の惡魔の感傷癖もこれを許すことは出來ない。裁判所は正直で合法的であつたばかりでなく、囚人が强情張つて宣誓を拒む時に課せられる習しであつた拷問を、ジョウンに勘辨してやつた點から見て非常に慈悲深かつたのを認め、更に、政治上の事件を裁くのに何時でも自分の黨派的階級的偏見の免かれない英國のどの裁判官よ

りも、コオションの方が僧侶としても法律家としても遙かに自制心あり眞面目な人間であつたのを認めるならば、ジョウン・オブ・アルクの火焙りは、戰慄であり、如何なる歴史家も辯明の辭に苦しむ事件であると言ふ人間的な事實が殘るのである。火焙りの肉體的な方面に就ての終局の批評は、英人がジョウンを燒いて喰つたのではないと言ひきかせても、マアキサス島の土人が納得しまいと言ふ點に含まれて居る。彼等は尋ねるだらう、「食ふ爲でなければ誰がわざ〳〵人間を火焙りにするものか」と。彼等には人を燒くことが快樂の一つであるのが分らないのだ。彼等の問に答へようとすれば勢ひ我々の恥を曝らすことになるから、この問題の解決に進む前に、これよりももつと複雜し且つ外觀を裝うた野蠻さのあるのを恥じ、それに含まれて居る他の教訓を求める事にしよう。

殘酷に就ての現代と中世

先づ第一に、我々は、火焙りの單なる肉體上の殘酷さにも重大な意味があると言ふ考を

脱出しなければならない。ジョウンの燒き殺されたのは、其の頃、彼女よりも興味を索かない異端が多數燒き殺されたのと少しも變りが無い。基督は、十字に架けられた時は、名も無い數千の罪人と運命を共にしたに過ぎない。この兩人が受けた肉體上の苦痛は、他よりも激しかつたとは言へない。彼等よりももつと怖ろしい死刑執行の記錄が遺つて居る。所謂壽命が盡きて死んだのでも、最も惡い場合の苦痛を擧げれば際限が無い。

ジョウンの燒き殺されたのは五百年以上も前のことである。それから三百年以上も經つて、卽ち私の生れる百年程前でさへ、私の生れ故鄕のダブリンの「ステイフエン原」で、一婦人が當時の國事犯とされてゐた貨幣贋造の廉で燒き殺されて居る。シドッニィとビアトリス・ウエブの最近の共著「英國地方自治の下に於ける監獄」に載せた私の序文中で、私はかう書いた——「私がもう一人前の大人になつてゐた頃、リヒアルド・ワグネルが二つのコンサアトを指揮してゐるのを見たが、ワグネルが青年時代には、二つの恐ろしい死刑執行法の中でも一層殘酷な車裂きにされる兵士を見物しに群衆が急ぐのを見て、彼はこれを避けたことがある。絞殺や溺殺や四肢切斷やの刑（その詳細な說明は憚るが）廢止されたの

は極く近年のことで、この刑の宣告を受けながらまだ生き殘つてゐる者がある」と。現代ではまだ鞭笞の刑がある。而も益々その刑の使行が叫ばれて居る。だが囚人にとつては、これ等の殘忍無道な刑の最も感覺に訴へる怖ろしいものでさへ、現代の監獄が與へる悲慘さ、墮落、生命の明かな浪費と損失との恐ろしさには遠く及ばなかつた。ことに現代の模範的な監獄ではさうであつて、その上私の見る範圍では、中世に於ける異端の火焙りと同樣、囚人に良心の苛責を起させることがない。中世時代では火刑柱や刑車や絞首臺には何か面白味があつたが、今の監獄からはそんなものさへ見出せない。ジョウンが幽閉か火刑かのいづれかを選ばなければならなかつた時に、自分自身でこの問題を判斷して、火刑を選んだ。その結果、教會は彼女の死には責任がなく、それは俗人の仕事であるといふ、教會の口實が通らなくなつた。教會は彼女を破門する以上の事はすべきではなかつた。破門は教會の權限内にあつたのだし、ジョウンはその權威を認めることや、その規則に服することを拒んだのだから、「お前は俺達の仲間でない、さつさと何處かへ行つて、お前に適する宗教を探すなり、自分で宗教を立てるなりするがいゝ」と教會が言つたとしても、それ

は間違ひではない。然し、「お前は前言を取り消したから俺達の所へ戻つて來てもいゝが、これから一生涯牢獄で暮らさなければならぬぞ」と言ふ權利はないのだ。不幸にも、教會は、教會以外に宗教を救ふ純正な魂のあるのを信じなかつた。原始的カリバニズム（ブラウニングの意味で）とか、兇惡な神を宥める爲に難業するとか犧牲を捧げるとかで、あらゆる教會が昔も今もさうであるやうに、教會なるものは深く墮落してゐたのであつた。教會の取つた手段は、殘酷の爲の殘酷ではなく、ジョウンの魂を救ふ爲の殘酷であつた。然しジョウンは自分の魂を救ふのは自分の仕事で、les gens d'église（舊教の坊主連）の仕事では無いと信じて居た。相手を馬鹿にし切つて、彼女が用ゐたこの言語の裏には、自分は未だ雛つ子であるが、ボオルテエルやアナトル・フランス同樣、徹底的な僧侶反對主義者であるのを揚言して居た譯である。もし彼女が「地上教會やその黑衣の坊主達は芥箱へ入れてしまへ、自分はただ天にある天上教會を認めるだけだ」とくだ〳〵しく數語を費したならば、彼女は反つて自分の意見を、「舊教の坊主連」の語を以てするよりも明瞭に現はせなかつたであらう。

カソリツクの僧侶反對主義（アンテ・クラリカリズム）

僧侶反對主義者であると同時に信仰厚いカソリツク教徒であることは不可能だと考へて貰ひ度くはない。革進的な法王は全部、熱心な僧侶反對主義者であり、僧侶にとつては眞に苦が手であつた。大きな宗派は皆僧侶に對する不滿から起つたものだ。フランシス教團は僧侶の賤民根性に、ドミニツク教團は僧侶の怠惰や不熱心に、エズイト教團は僧侶の不眞面目や無知無學や無節制に、不滿を抱いて起つたものである。最も頑强なウルスタのオリンジマンやレスタの低教派（ロオ・チャアチ）の中產階級民（ヘンリイ・ネビンスンの書けるが如く）は、マキアベリに比べれば單なるガリレオに過ぎない。彼は新教徒ではなかつたが、猛烈な僧侶反對主義の人であつた。カソリツク教徒は誰でも、牧師や牧師一派なんて怠慢で、醉つ拂ひで、のろまで、放蕩で、その尊い教會や信徒の魂を導く僧侶と言ふその職務やに對して不適任だと非難するだらう。又、事實、多くのカソリツク教徒はそのやうな非難の聲を擧

けて居る。然し人々の魂を救ふのは僧侶の仕事ではないと明言するのは、更にそれより一歩を、即ちルビコンを越えた一歩を進んだものである。ジョウンは事實此の一歩を踏んだ。

カソリック主義のみではまだ十分に カソリックではない

であるから、當然の事だが、ジョウンの火焙りは間違ひであると認めるならば、カソリック主義を廣く解釋して、ジョウンもその中に入れなければならない。現代の教會の認めなければならない事は、教會なる機關は、神ならぬ身の人間で組織されてゐるので、その職務には非凡な精神力が伴ふ譯にはゆかないので（如何なる地上教會も事實及び歴史の前ではさうであるやうな風をしてゐるだけだ）、天才の個人的判斷と歩調を共にする事が出來ないのである。たゞ、滅多に起らない事ではあるが、その天才が法王である場合は例外であるが、それとても非常に威壓的な法王でなければ駄目だ。教會は謙讓の德を教へると共

に、それを學ぶべきである。羅馬法王の位は、暴力を以て獲得する事も制限することも出來ないのに、さうしようとして、焰の舌があまりに屢々異端者や追放人の上に下され、聖油を注がれてゐる僧侶をして歴史を汚す卑劣な惡人として殘る儘にしておくのである。地上教會が、既に天上教會のやうに振舞ふならば、それは、ジョウンやブルノやガリレオ達に、この恐ろしい過失を犯すものであつて、自由思想家が地上教會に加はり難く感ずるのはこのためである。そして、自由思想家の入るべき席のない教會、否、自由思想は、眞に自由であるなら、思想自身の法則に從つて必ず教會の胸に入り來るものであると、確く信じ切つて、自由思想を導き勵ますことをしない教會、かかる教會は、現代の文化に未來を有たないばかりでなく、教會自身の教理の確實な科學的價値を信じないことの明かなものであり、神學と科學は、人間の歸依を奪ひ合ふ二つの相反する衝動であると言ふ異端邪說の罪を招くものである。

ここに或カソリック僧が私に寄せた手紙がある。それにはかう書いてある——「あなたの芝居には、王と僧と豫言者の三勢力の爭鬪が劇化され、その渦中でジョウンが身を滅し

たのを見ます。私にとつては、平和を齎らし、神の王國に聖者の御世を出現させるものは、この三勢力のどれか一つが他の二つに勝つことではなく、三つが一つの高價な然し氣高い緊張狀態にあつて互に有効に影響し合ふことだと思ひます。」法王だつてこれ以上うまく言ひ現せまい、勿論私にも出來ない。我々はこの緊張を受け入れ、立派に保持して、糸を燒いて緊張を破らうとするやうな誘惑をうけないやうにしなければならない。これがジョウンの教會に與へた教訓である。そしてこの教訓が一人の僧の手によつて示されて居るのに力を得て、私は敢て主張する——ジョウンの受けた聖者推奠は、新教徒が羅馬教會から聖者に推奠されたものとして、堂々たるカソリックらしい遣方であつたと。そしてその特殊な價値や美點は、このやうに考へ理解されてこそ初めて明らかにする事が出來るのだ。これを亂暴な言葉と考へるやうな單純な僧侶が「そんなつもりでジョウンを聖者にしたのではない」と言ふなら、私はその人に、教會は神の御手に在るもので、單純な僧侶連が想像するやうに、神が教會の手にあるのではないと言ふ事を思ひ起こさしてやらう。そこで、その僧侶が、神の意思については十分自信が有るやうな答をするなら、かう尋ねられるだ

らう、「あなたは海の湧き出るところへはひつたのですか、大洋の底へ行つたことがあるのですか」と（註、ルウテルの言葉）。ジョウンならば、昔からの答を繰り返すのだ、「神、我を殺し給ふとも、我、神を信ぜん。されど、神の前に我自らの道を進まん。」

變化の法則は神の法則である

ジョウンは自分自身の道を進んだ時に、ジョウブの様にかう主張した。考ふべきものには、神や教會があるばかりでなく肉をつくつた詞があると。この意味は、千差萬別の各個人は、人類進化の眞にありうる最高から最低に至る迄の生命を代表してゐて、決して單なる數學的に平均されてゐる者ではないと主張したのである。ところで、教會の教理では、デモクラチツクな均等のために神性を具へた者が出ない譯だ。即ち、規定された僧侶政體があつて、そこでは各員は篩にかけられたやうに列べられて、その列の一番最後の一人が基督の代表者として最高に立つ羅馬法王となる。然し、この一列を調べて見ると、劣等者

から順次に優秀者が選び上げられると言ふ具合で（これがデモクラシイの第一の缺點である）、その結果、大法王の出現は大王の出現と同じく稀れで且つ偶然的であり、且つ、寺院の長や法王にならうとねらつてゐる人間には、活動的な聖者となるよりも老先き短い老いぼれ者で通ほす方が、遙かに安全である方が多かつたのだ。だから、よく見ると、聖者に推擧された法王は數へる程もなく、それも、自ら聖者の德を持つた人々の定めた神聖の標準を下げないで聖者になつた法王と來ては殆んど稀である。

こんな結果になるのが當然の事である。何故なら、數百萬の男女、それも大概貧乏で無知な人々の、精神的な必要である教會と言ふ公の機關は、その主腦者を選擧する場合に、目指すところを誤らずに個人に閃いて來る樣な聖靈の直接の選擇と爭つたつて、それに勝てる筈がないのだ。又、羅馬法王廳の高等諮問院だつて、この聖靈の直接選擇が閃いて來るやうにと祈つたつて無駄だ。劣者が意識的に祈願すべき事は、自分より偉い者を選び出したいと言ふ事にある筈なのに、自己保存の個性のもつ潛在意識的な傾向のある爲に、自分一身の目的に都合よく働いて呉れる下僕を選ばうとするに至るのだ。聖者や豫言者は、

社會の地位や階級の各方面にごく稀に現れて來るものであるが、皆ジョウンのやうに、自ら撰んで聖者や豫言者に立つた人々である。而して、教會も國家も、その制度の現世的な必要上、これ等自選の使者を承認することさへ出來ない以上、我々は、思想や行爲のあらゆる革命進化は、最初は異端で不法行爲であるやうに見えるものであると言ふ單純な根據に立つて、出來うる限り我慢して、異端を許しておくより外仕樣がないのだ。社會は無容赦（イントレランス）の上に成立してゐるが、あらゆる進展は、容赦（トレランス）の上に、卽ち、進化の法則はイプセンの變化の法則であると言ふ事實の承認の上に成立してゐる。現在科學に反對して信仰の證據を司る神の法則は、如何なる意味に於ても、革命の法則である故に、從つて神の法則は變化の法則であり、教會がこのやうな變化に反抗するなら、それは神の法則に楯附くものである。

盲信に就ての現代と中世

有名な醫師アバアネスイが「何故、あなたが患者に不衛生だと注意されるあらゆる習慣に、あなた自身耽溺なさるのですか」と問はれた時、「私の仕事は道標の樣なもので、旅人に或地點へ行くべき道を示すが、そこ迄一緒については行かない」と答へた。彼は更に、「旅人にそこへ行けと强ひもせず、他の道を行つたつて邪魔をしもしない」と附加へたかも知れない。不幸にして、現今の教會の道標は、政治上の權力を與へられると、とかく旅人に强要する癖が有る。教會が精神界並びに俗界の權力を兼ね具へてゐた頃、更にその後、俗界の權力を充分に支配し、勢力を振ふ事の出來た長い間、迫害を道具に用ゐて人々から歸依從順を强奪した。その迫害も計畫が大きかつただけ、それだけに非常な殘忍無道なものであつた。今日、醫者は僧侶の後を受け繼いで、國會と新聞の力を借り、僧侶に對しては遙かに批判的な信頼を抱いて居た人民も、自分達醫者には盲目的信頼を抱いてゐるのを

いいことにして、處方箋なら、どんなに毒にならうと、醫者のものに限ると法律上强制して、勝手な振舞をしてゐるが、それには、宗教裁判所も喫驚し、大僧正ロオドすら膽を消すだらう。現代の盲信主義は中世時代よりも激しい。何故なら、僧は人間の罪惡に對して醫者が我々の病氣に對してもつてゐるやうな金錢上の直接の利害關係を持つてゐなかつたのだ。信徒に間違ひが起らなくとも僧侶は飢えもせず、信徒が死んだからとて僧侶が金持ちになる譯でもなかつた。此の點が現代の個人營業の醫者とは大いに違ふ。尙、中世の僧侶は、生前に不德な事をして居ると、死後に大變惡い報が來ると信じて居たが、この信念は、獨斷的唯物論風の教育をうけた現代の人間の間ではすつかり無くつて居る。現在の職業團體は、職工組合で、地獄へ落ちると言はれる靈魂は持つて居ないが、彼等は足蹴にされる肉體を持つてゐたものとして、やがて我々に思ひ出される日が來るだらう。バチカン宮殿の法王は魂を持つてゐない譯では決してなかつたので、教會を精神界と同樣俗界に於ても最高のものとしようとしたのは、政治的野心に過ぎなかつた。であるから、ジョウンの火焙りによつて起された問題は、未だ餘焰の消えない問題である——それに關聯した刑

罰のことは大した事ではないが。だからこそ、私はこれを研究してゐるのである。これが單にもの好きな歴史的興味に過ぎないなら、私は五分間と雖も、諸君や私自身の時間を浪費しようとは思はない。

容赦に就ての中世と現代

この問題を調べる事が深くなればなる程、問題がむづかしくなる。最初一と目見ただけでは、こう繰り返して言ひたくなる――即ち、ジョウンは當然破門されて、自分勝手の道を行けと教會から突き放するべきであつた、然し、さうなればジョウンは、自分の生命に第一に必要な懺悔や贖罪や御聖體と言ふ精神の糧を奪はれるので、それはあまりに殘酷だと烈しく反抗したのであるが、それはどうも止むをえないと。ジョウンのやうな精神のものなら、法王レオの上諭に屈しなかつた英吉利教會のやうに、この困難に打勝つて、彼女自身の教會をつくつて、これこそ誠にして本來なる信仰の寺院であると斷言し、我を迫害

するものは道を迷へる邪道であると言つたかもしれないのだ。だが、この通りに事が進行すると、當時の教會や國家の眼からは瀆神や無政府主義の傳播と見られたので、これを容赦する事は、人間の政治的宗教的性情として耐へる事の出來ない位の、自由の名に隠れた汚れを信仰の上に加へることになると考へられたのだ。教會は、惡い事が起るだらうとかそれがどんな事だらうなどと豫想せずに、惡い事の結果が陳述されるのを待つてゐればいゝのだと、言ふのは容易な事である。成程さう言ふのは簡單である。然し、假りに現代の公衆衛生局が、「下水及び下水に就ての諸君の意見は、我々の關しない所である。然し、もし諸君が天然痘や窒扶斯に罹るなら、我々醫者はバアトラの有何無郷に於けるお役所の樣に、諸君を告訴して、うんとひどく罰して貰つてやらう」と言つて、衛生問題は自分で考へろと我々を突放すとしたら、そんな衛生局は區立風癲病院へ移轉さした方がいゝし、又甲が衛生を疎略した爲に二哩向の乙の小供を死なしたり、或は、一番眞面目な衛生家迄も殺してしまふ疫病の流行を思ひ出させてやるがいゝ。

我々は、社會は無容赦（インドレランス）の上に立つと言ふ事實を考へて見なければならない。無容赦の弊

の特に目に立つ場合もあるが、とにかく無容赦は、中世時代の特色であると同時に現代の特色である。それの現代の代表的の例と對照を擧げるならば、種痘强制であつて、これは中世に於て實際强制的であつた洗禮に代るものである。然し、種痘强制に反對するのは、未完成な非科學的の且つ危險な非衞生的の藪醫療であるからで、幼兒が疾病に罹らぬ樣に親達を强制することは惡事だと言ふ理由からでは無い。種痘反對者は種痘を一種の罪惡とするだらう、そして、恐らくは今後長く反對を續けて、遂には種痘の强制者と相共に頑迷無容赦の徒になつてしまふだらう。パストウル派の醫者もその反對派の衞生論者も、親達に、子供の裸體養育はお好き御勝手になさいと放つて置けもしまい、裸體養育に對する尤もらしい辯護も無いではないが。我々としては口では好きなだけ容赦を唱へる事も出來ようが、社會としては、聖人を狂人と誤り救世者を瀆神者と間違へる懼れは有るにしても、容赦し得る行爲と狂行犯罪とを劃する一線を引かなければならない。迫害も行はなければならない、そのために殺すやうなことがあつていゝ。然し、迫害の危險を出來るだけ少くするには、第一に迫害を加へようとする者によく注意する事であり、第二には次のことを

念頭に置くのである、即ち、因習的な人々を喫驚させる程の大きな自由とか、又は、獨創や個性や特質やの價値に對する充分の思慮判斷とかが無いと、その結果として、進化力を壓制して、その上を著しい沈滯の氣が漲り、それが遂には猛烈なそして恐らくは破壞的な暴威を以て爆發するのである。

寛容の變化性

その時々に當つて可能である容赦の程度は、常に社會が結合を保持する上の緊張に比例する。例へば、戰時には、福音の布敎を禁じ、クエエカ徒を牢へぶち込み、新聞の記事を差し止めたり、夜間の點燈を重大な罪の一つに數へる。外寇で緊張した佛國政府は一七九二年に四千人の首を刎ねて居る。それは大概、平和の時なら、犬一匹魔醉にかけたつて何等政府が咎めない樣な理由であつた。一九二〇年には英國政府は、愛蘭で殺戮や燒拂ひを行つて、現在迄も餘波を及してゐる例の立憲上の政變の辯護者達を迫害した。その後、黑

シャッ黨が愛蘭でやつたと同じことを、ファスシスチが伊太利でやつたが、前者よりも奇怪な恐怖の作つたもので、これは、資本家が資本主義を理解しない以上に社會主義を理解しない社會主義者が、産業革命を起してどちを踏んだので國内が緊張した爲である。アメリカ合衆國では、本當とは思へない位の殘酷な露西亞人迫害が行はれた、これは一九一七年後のロシヤのボルシエビク革命に對する恐慌が擴がつた爲である。かやうな例はいくらもあるが、これだけの例でも充分次の事が分る。即ち、寛大な容赦の極限と殘酷な無容赦の迫害主義（テロリズム）との間には、一つの階段があつて、容赦が絶えずそれ上下して居る事や、又十九世紀は十五世紀よりも寛容であつて、ジョウンの死刑のやうな事件は所謂る文明開化の今日では起りつこが無いと言ふ、氣休め的な確信は少しも抱くことが出來ないと言ふ事である。數千の女が、而もその中の誰一人として、ジョウンが當時の政府に對するよりも現代の政府に對して千分の一の危險や恐れにもならなかつたのに、最近十年間に、サラセン人から聖墓を取戻すと言ふ以外には別に大法螺も言はなかつた中世の十字軍と異なつて、遙かに暴虐な虚飾をはつた今度の十字軍の間に、或は屠り殺され、或は飢死させられ、或

は家や家庭を燒き拂はれ、その他迫害と恐怖がなし得る限りの事を受けて居るのである。英國では「星法院」と同じ意味をもつた宗教裁判所は、その名が今日では用ゐられないと言ふ意味では存在してゐない。然し、現代の宗教裁判所に代るもの、特別裁判所と役員、征討軍、人身保護令の停止、戒嚴令及び小國包圍令の布告、その他種々の法令の内どれ一つとして、その被告に下す裁判は、ジョウンが内亂外寇で國内が極度に緊張して居た時に、宗教裁判と中世時代の精神から受けた裁判程に公平であり、各訴訟を處理する適當な法典が有り、裁判手續を嚴重に踏んだ眞面目な裁判官が有ると、主張出來るか。現代だつたら、ジョウンの受ける裁判や法律は、凡ての法律を中止させる國防令だけで、裁く判事は精々のところで口喧ましい市長か、惡くすると紅の法服を着た成り上りの辯護士であつて、此の辯護士の眼から見れば、コオション程の腕利きの僧が斷乎たる處置を執らなかつたのは、馬鹿げてゐて男らしくない事に思へるだらう。

天才と拘束との爭鬪

かやうに問題を現代に迄說き及ぼしたのだから、次にジョウンを不羈奔放な女としたその精神組織の特徴を考へて見よう。一方何等の理由も聞かさずに命令を發する支配者と、一方その命令を受けた時にそれを理解する事の出來ない人民達は、問題外である。だが、この世にある支配なるものは、外交、產業、家庭のいづれの場合にしろ、かやうな狀態で命令が發せられ受入られて、大概行はれてゐるのだ。「理窟を言はずに、言はれた通りにしろ」の文句は、子供や兵士に言はれる許りでなく、實際誰にでも言はれなければならない。幸にも、大概の人間は理屈を言ひたがらない。自分で考へる面倒が省けるのを非常に悅んで居るだけだ。そして、才能のある獨立的な思索家でさへ、自分自身の特殊な部門の事を理解するだけで甘じて居る。他の部門のことになると、彼等思索家は巡査の命令でも仕立屋の忠告でも受け入れて、說明を要求しもしなければ、說明して貰はうともしない。

然し、一つの命令が權威をつけられるには何か根據が無ければならない。子供は兩親に、兵士は上官に、哲學者は踏切番人に、職工は職工長に、何等の疑問も起さずに服從するだらう。何故なら、命令者はその命令をよく理解して居て、命令を出す正しい權威や義務すら有ると、一般に考へられて居るからであり、又、日常生活の實際危急の際に、命令に解釋說明を加へたり、その正否を議論したりする余裕が無いからだ。かやう服從が、社會組織の不斷の運轉に必要なことは、恰も地球の回轉が晝夜の繼續に必要であるのと同じだ。だが、かやうな服從は外見程に自發的なものではないのだから、よく注意して取扱ひ維持して行かなければならない。帝王には服從する僧正でも、一と度牧師補から命令を受けた場合には、その命令がどれ程緊要で氣の利いたものであつても、僧正は我身の職責も忘れて、牧師補の厚かましさを罵倒するだらう。一般に認められた權威に對して從順な人間程、他の權威の無い人間からあれこれと指圖されるのを忌々しがるものだ。

これ等の事を念頭に置いて、ジョウンの生涯を考へて見給へ。彼女は一田舍娘に過ぎない。羊や豚や犬や雞に、又父に傭人が居たとしたら或る程度迄その傭人に、幅が利いたで

あらうが、その他の者にはからきし駄目だつた。農場から一歩踏み出れば、彼女は權威も名聲もなく、他人から僅かの尊敬さへも得る事が出來なかつた。それなのに、彼女は周圍の凡ての者に、下は彼女の伯父から、上は參謀總長、大僧正、國王に至る迄に、命令を與へて居る。伯父は羊のやうに服從して、彼女を地方司令官の城へ伴つて行つた。司令官も彼女からあれこれと命令されて、初めは我意を張らうとしたが、直ぐに折れて服從した。かやうにして、これを國王に迄も及ぼしたのは、我々の見る通りである。假令彼女の命令が當時の社會の有力者が陷つて居た絶望的な困苦狀態に對する道理のある救濟法として提出されたにしても、我慢のならない程癪に障つた事だらう。然し、その命令はそんな意味で出されたのでは無い。又ジョウン自身の氣儘な意志の發表として出されたのでもない。その命令はいつでも「私がさう言ふ」のでなくて「神がさう仰しやる」のであつた。

神政者としてのジョウン

爲政者が此の方法を執れば、他人に對して面倒な事も起らないし、起つたにしてもその責任を負ふ必要が無い。彼等は冷淡な歡迎を喰ふ恐れが無い。つまり彼等は神の使となるか濟神の詐欺師となるのだ。中世時代の魔術に對する一般の信念は、この對照を一層激しくした。何故なら、はつきりした奇蹟が現はれると（オルレアンで風の方向が變つた場合のやうに）信じ易い人にはそれが神の使と見え、疑ひ深い人には惡魔との契約と見えたのだ。ジョウンは絶えず、自分を天使の再來として歡迎して呉れる連中に賴つて、彼女の潜越さをひどく憎んで彼女を魔術使だとして頑迷にも毛嫌ひする人々に對抗しなければならなかつた。かやうにジョウンは嫌はれてゐる上に、更に、お告げを信じないでジョウンを嘘つきで山師であると考へた人々の極度の憤慨を買はなければならなかつた。政治家や司令官や寵臣にとつて、この上なく激しい怒を感じさせるものは、一人の蓮葉な若い成上りの女が、事毎に自分達を威壓し、又、王位にある主權者がこれにすつかり耳を貸してゐる事で、而も、その女たるや、有難がりの連中には奇蹟として通用する運のいい偶然の出來事を巧に利用して、庶民の輕信や未成年の王子の虚榮と愚昧を欺いてゐるといふ事であつ

た。嫉妬深い、賤しい、競爭的な野心を抱いてゐて、彼女に成功されて怒り立つた下劣な根性の人間ばかりでなく、彼女の味方の中でも、彼女の無知と無鐵砲なのを正しく觀察することによつて、彼女の能力を批判して合理的な疑や不信任を抱いた賢い人達は、彼女に反對する行動をとつたのであつた。そして彼女が此等の抗議や批判を受けた時に、議論も辯明もしないで、ひたすら神の權威に訴へ、神の特別の信頼を受けてゐるのだと主張したから、ジョウンに心醉しない人達には、ジョウンが非常に憎く思はれたに違ひない。が、彼女は戰場でも政治界でもとん〳〵拍子にすばらしい成功を續けて居たので、僅かに他人の怒を免れてゐたが、それとても終に、この怒の爲に身を亡ぼすに至つた。

神政政治(セオクラシイ)に必要な成功の連鎖

かやうな成功の連鎖を作るためには彼女は、國王やランスの大僧正やオルレアンの私生兒(バスタア)の役を演じ、その上に彼女自身をも活躍させる必要があつた。そして、これは不可能な

事だつた。シャルルを勵まして、即位式に續いで直ちに巴里を一掃しようとし、それに失敗してからは彼女は駄目になつた。王や他の連中が、バアガンデイ公を買收してこれと同盟すれば十分に英國に反抗する事が出來るなどと、愚圖々々と下らない事を考へて居た時に、彼女は巴里襲擊を主張して止まなかつたので、國王達には彼女が怖ろしい邪魔者となつて來たのである。その時以來、彼女は戰場をぶら〳〵徘徊して、將軍連を寄せ集めてうんと大きな行動に出る好機を待つてゐるより外仕方が無かつた。然し、好機は敵の手に渡つた。彼女はコンピエヌの城前でバアガンデイ兵との戰に捕へられると、直ぐ政界には彼女の味方が一人も無いのを知つた。若し彼女が脫走したとしたら、多分英兵が居なくなる迄戰を續けてゐただらうが、その後は宮廷から足を拔いて、ガリバルヂイがカプレラへ引退した樣にドムレミイへ引退しなければならなかつたらう。

ジョウンの歴史に對する現代の牽强附會

以上がジョウンの經歴の散文的な方面に就て、私が言ひ得る全部であると思ふ。彼女の奮起のロマンス、死刑の悲劇、死刑の償ひをしようとする子孫の企畫の喜劇、これ等は私の脚本に屬するもので、序文には屬さない。序文はただ事實に關する眞面目な論文に止まるべきである。かかる論文が是非必要である事は、現代の標準的な參考書のどれを調べて見ても分る。これ等參考書は、ヴオクウルウルへの訪問、シノンに於けるシャルルへの聲明、オルレアンの解除及び其の後の戰爭、ランスに於ける卽位式、コンピエヌでの捕虜、ルアンでの裁判と死刑等の事件を、その年月日と關係人物の姓名を併せ擧げて、十分精密に記して居る。然し、それ等は凡て邪惡な僧正、欺かれた乙女、その他を組み合せたメロドラマ風な傳說に終つて居る。それよりか、事件そのものの記述に間違はあつても、事件に就ての解釋が正しいなら、まだしも方向を誤つてゐないのである。ところが實際は、彼

等は「考へ方の流行は衣裳の流行の樣に變るもので、その時代に流行してゐる型以外で物事を考へるのは、不可能でなくとも、困難なことである」と言ふあまりに思慮のない眞理を示してゐるのだ。

歴史は常に今日のものではない

序に言つて置くが、以上の理由で子供達は同時代の歴史を決して敎はらないのである。子供達の歴史敎課書には、考へ方が流行遲れになり、事情が生きた活動的な生活に當て嵌らなくなつた時代の事が載せてあるのだ。例へば、子供達はワシントンに關する歴史は敎はるが、レニンに就ては嘘を敎へられるのだ。ワシントンの時代では、矢張りワシントンに就ては嘘（同樣な嘘）を敎へ、クロムウエルに就ては本當の歴史を敎へた。十五、六世紀の人々はジョウンに就ては嘘を聞かされたが、現代ではジョウンに就て眞理を話したつて良いのだ。不幸にも、ジョウンに關する嘘は、政治狀態が變つてしまつても改まらなか

つた。ジョウンが無意識のうちに豫想した革命は、彼女に關して起こつた問題を今日迄も尙燃やして居る（その證據には愛蘭で今尙燒き拂はれた家が澤山ある）。その結果、ジョウンは、僧侶反對の嘘や、特殊な新教徒（プロテスタント）の嘘や、ジョウンの無意識のプロテスタント主義からの羅馬カソリックの忌避やの問題を殘した。ソオスをかけた眞理は喉に引掛かる。ソオスをすつかり除かなければ、眞理は呑み込めない。

眞實のジョウンは我々にとつてまだ十分に不可思議ではない

ジョウンの要求した信仰は、その最も簡單なものに於てすら、英米に力强く殘り佛蘭西に於て殊に烈しい十九世紀の反形而上學的傾向のために、嘲笑的に否定されるのである。我々は、彼女と同時代の人間のやうに、惡魔に魂を賣つた魔女から飛退くやうに彼女から飛退いて極端に反對するやうな事はしない。何故なら、我々は惡魔を信じないし、惡魔と

取引きが出來るなどとも思はない。現代の盲信は、實に大きいけれども、際涯がない譯ではない。今日の降神者、透視術者、手相讀み、スレエト・ライタア、基督教精神療法者、心理解剖者、電子振動豫言者、免許無免許のあらゆる派の治療術者、占星者、太陽は殆んど十億哩の遠方にあり、ベテルグウズ星は全宇宙の十倍もあると唱へる天文學者、原子（アトム）が小の極であると述べてベテルグウズと平均を保つ物理學者、その他懷疑的歡喜の哄笑の中に中世時代を氷解する程の盲信を抱いてゐる大勢の驚嘆すべき何々屋、それ等の連中の爲に現代人の盲信の貯へがすつかり無くなつてゐる。中世時代では人間は地球は平たいと信じて居た。少くとも、目にはさう見えると言ふ證據を持つて居た。現代では地球は丸いと信じて居る。誰一人この奇妙な信念に有形的な證據を與へ得る譯ではないが、現代科學がかう言つてゐるからだ、卽ち、明白でない事が全部眞實であり、不可思議な事、證明出來ない事、異常な事、巨大な事、微小な事、無情な事、或は法外の事が科學的である、と。

序に言ふが、私の述べた意味は、地球が平たいとか、現代の盲信の全部或は何れかが、妄想や詐欺であると言ふのでない。私は唯、現代は中世時代よりは空想的でないと言ふ批

難を辯護してゐるだけだ。十九世紀、否二十世紀さへも尙、あらゆる種類の驚異、奇蹟、聖者、豫言者、魔術使、巨人、お伽噺を許容する點では、十五世紀を踏み躙つてゐると、私は確言する。最近版の英國百科辭典では、容易に信じ得る記事に對する不可思議な事の記事の割合は、聖書に於けるよりも遙かに多い。一本の針の尖端で舞踏し得る天使の數は幾人であるか定めようとしなかつた中世紀の神學博士は、電子の舞踏するあらゆる運動と位置を萬億分の一粍（ミリメートル）で測定した現代の物理學者に比べると、ロマンチックな盲信の世界では實に貧弱な姿である。これ等の計算の正確さや、電子（それは何であらうと）の存在を、私は世に問はうとするのでは決してない。ジョウンの運命は、私にかゝる異端に陷らぬ樣にと警告を與へる。然し、電子を信ずる人が、何故天使を信じた人より盲信的でないのか、私には分らない。一四三一年のルアンの陪席判事達はジョウンは魔女であると信じたが、電子を信じる彼等はそんな事を信じるのは眞つ平だと言ふなら、それは彼女が魔女だと言ふ意見が不可思議極まるからではなくて、未だ十分に不可思議ではないからだ。

歷史的再現に對する舞臺の制限

ジョウンのストオリに就ては、後にある戯曲を讀んで貰ひたい。戯曲中にはジョウンについて知る必要のある全部を含めてあるが、舞臺で使ゐるために、歷史的な事件としては拾數ケ月にわたる事件の連續を、三時間半に縮めなければならなかつた。何故なら、自然は時間と空間に就ては自由であつてそれを際限なく浪費してゐるが、演劇ではこの二つの一致を强ひられるのである。だから讀者は、ジョウンが實際の場合にも拾五分間でロベエル・ド・ボオドリクウルを丸め込んだとか、彼女の破門や取消しや再犯や死刑が一時間半そこそこの出來事であると思つてはならない。又、ジョウンと同時代の人物の戯曲化に就ても、私の要求する事はたゞ僅かに、その幾人かの描寫は、フロレンスのウフイツイに今日尙ほ（先年私が行つて見た時も）莊重に展覽してある聖ピイタから暗黑時代を過ぎる迄の間の歷代法王の假想的な肖像より、ほんの少しばかり本物に近いといふ事である。私のデユノアは又、ダランソン公の役も演じて居る。この二人の殘したジョウンの描寫は大變似

通つて居るので、一體人間は他人の事を書いて居ながら知らず識らずに自分の事を書くのが常であるから、この善良な二青年はお互に非常に似通つた精神を持つて居たと、私は推測したのである。そこで、二人を寄せて一人の人物に拵へ上げた。かうすれば、舞臺監督に一人分の給料と鎧一揃を儲けさせてやれると言ふものだ。シャトオダンの記錄に殘つてゐるデュノアの面影は、彼を思ひ出させる助けにはなる。然し、私がほんとうにこれ等の人々やその周圍の樣子を知つてゐる程度は、丁度シエエクスピアがフアルコンブリツジやオオストリヤ公、マクベスやマクダツフを知つてゐる位の程度である。私は、彼等が歴史の中で行つた事蹟を見、此の劇中で再び演じなければならない役割から考へて、彼等に適當な性格をシエエクスピア風に作り出す事が出來るだけだ。

エリザベス時代の戯曲の一缺陷

とにかく、私はエリザベス時代の人よりも有利な地位に居る。中世時代は四百五拾年間

の中絶後、十九世紀の中項に再び復活したと言ひ得るから、私は中世時代を全部見ながら戯曲を書き得る譯だ。十六世紀に於ける古代の文藝美術のルネツサンスと資本主義の目覺ましい發展、この間に中世時代は埋められて居た。そして、それの復活が第二の文藝復興である。ところで、シエエクスピアの史劇中には、中世時代の空氣が流れて居ない。彼のジヨウン・オブ・ゴオントは、ドレイクの晩年の研究の樣である。家風から言へばシエエクスピアはカソリツクであるが、彼の描く人物は凡て、猛烈な新教徒、個人主義者、懷疑論者、自分の戀愛事件以外では萬事に自己中心主義者、而も戀愛に於てすら全然個人的で利己的である。彼の描く國王は政治家ではなく、彼の大僧正は宗教を持たない。どんな小僧つ兒でも彼の戯曲を次から次へと讀むことが出來るが、結局この世を支配するものは、騷動ばかり起こして居る卑賤な野心家ではなく、宗教や法律に現れて各時代を劃する大きな力であるのを知らず終ひになるのだ。どんな亂暴な生涯を送つても必ず其の最後を司るのは神性であると言ふ事が、彼の劇では宿命論的に書かれてゐて、通り一遍のぼんやりした考のやうに、すぐに忘れられてしまふばかりである。マアク・トウエンと同じくシエエクスピア

にも、コオションはカソリック徒ではなく、暴君で空威張り屋に見え、宗教裁判長ルメイトルは法律家でなくて淫虐狂(サディスト)に思はれたであらう。又、ウオリクは、「ヘンリイ六世」劇に出て來る彼の後繼者キングメイカアと同樣に封建制度の武士氣質を持つて居なかつたと考へられたであらう。此の三人は、自分自身にさへ忠實にして居れば、他人に對して間違ひのあらう筈がなく(これは中世氣質に對する反動の最も烈しかつた頃の思想である)、何等の社會的責任も無く、まるで空中に浮んでゐる者のやうに考へてすつかり滿足し切つて居る人間のやうに、我々の目に映つて來るやうになるのだ。シエエクスピアの人物は皆さうである。だからこそ、現代の中產階級——自分さへ暮しが樂なら他人のことにはお構ひなしで、その狀態を恥ぢもしなければ、意識さへもしてゐない中產階級連の目には、シエエクスピヤの各人物が至つて自然に見えたのである。自然はシエエクスピアの此の空虛を憎む。だから私は、自分の劇中には中世時代の空氣が自由に吹くやうにと氣を附けた。この劇の上演されるのを御覽になれば、此處に書いてある驚嘆すべき事件を、單なる個人的事件と思ひ誤られるやうな事はあるまい。觀客は、舞臺の上で人間の姿をした目に見える人

形ばかりでなく、教會、宗教裁判、封建制度、及びこれ等の頑强な拘束と絶えず衝突して居る神の靈感を認めて、それ等の劇的な力のうちに、板金の鎧姿でがちや〳〵騷いだり、ドミニツク教團の上衣と頭布を被つて默々と動いたりしてゐる小つぽけな人間共の芝居よりも遙かに悲愴なものを感ずるであらう。

悲劇であつてメロドラマではない

世の中が平和な時には惡人が出ない。犯罪は疾病と同樣結構なものではない。共同一致で絶やしてしまはなければならないものだ。そして、ただそれだけの事だ。人間が立派な心懸を持つて、全力を盡してする事や、普通の男女が、自分の考がどうであらうと、すべき事であり、又、將來に於てもしようと考へる事、それが我々にとつて大事なのだ。マアク・トウエンやラングの書いた惡人の僧正や、殘酷な宗教裁判長は、掏摸のやうで興味が薄く、ジョウンは又、掏摸(すり)られる人間の樣に益々興味の無い者にされて居る。私は、この兩

者を地上教會と教會訴訟人との兩方を代表する手腕ある雄辯な人物として描いた。何故なら、さうする事によつてのみ、私の劇を悲劇中の高位に置き、單なる法廷噂書たることを免かれ得るからである。一體、劇中の惡人なるものは、diabolus ex machina（機械による惡魔）以上のものであり得ない。恐らく deus ex machina（機械による神）よりは感動を與へる一手段であらう。然し、兩方共機械的であるから、從つて機械學としての興味しか湧かない。繰り返し言ふが、普通の無垢な人間のする事が我々にとつて重大なのだ。もしジョウンが正義の念に燃えた普通の無垢な人間のために火焙りにされたのでなければジョウンの死は數多くの婦女子を燒き殺した東京の大震災と同樣何の意義もないだらう。ジョウンの樣な殺戮が悲劇である所以は、殺人者の手で行はれたものでないからである。人を救ふべき法律が犯した殺戮であり、神を敬ふ心がなした殺戮である。この矛盾が急ち悲劇の中へ喜劇の要素を齎らすのだ。天使は人の殺されるのを泣くだらうが、神は人を殺す者を笑ふのだ。

悲劇に於ける避け難い誇張

何故に聖ジョウンの生涯を描いた私の戯曲が、一方では本質的眞理を傳へて居るかも知れないが、他方ではいくつかの偶然的の事件に就て不正確な描寫を與へてゐるか、その一理由は今述べたところである。言ふ迄もない事だが、凡てを惡人とヒアロの、ジョウンの場合では惡人とヒロインの爭鬪に歸着せしめてゐる古いジアンヌダルクのメロドラマの數々は、主眼點を失つたばかりでなく、性格を作り變へて、コオションを惡黨、ジョウンを花形女優、デュノアを戀人にして居る。然し、高級な悲劇や喜劇の作者が、出來るだけの眞實を傳へようと目指してゐるならば、メロドラマ作家がコオションを卑しめたと殆んど同程度に、これを誇張して褒めてやる必要がある。私が調べ得た限りでは、コオションが良からぬ信仰を抱いて居たとか、ジョウンに對する法律上の取扱ひに特に苛酷だつたとか、現代の裁判所では當然の事とされて居る囚人いじめ、警察贔負、階級及び宗派上の偏見のあつた人間だと言ふ證據は一つもないが、俗界の榮耀高官に對する憧憬から全く解脱した偉

いカソクリツ僧だつたと言ふ保證もない。宗教裁判長ルメイトルも、私が褒めて書いてゐるやうに、その職務や提出された事件を巧みに處理した人間であるとは、彼に關して今日手に入る僅かの文獻の中には出てゐない。然し、劇の人物を、その實際よりもはつきりした人間に拵へ上げるのが舞臺の仕事であつて、さうしなければ人物が觀客にはつきり分らないのだ。そして、この場合には、コオションやルメイトルは自分自身をはつきりさせるばかりでなく、教會と宗教裁判をはつきりさせなければならない。同樣にウオリクは封建制度をはつきりさせなければならない。かくして、三人の間にあるこの三つの制度組織が、二十世紀とは根本的に相違して居る一時代を二十世紀の觀客に意識させなければならないのだ。本當のコオションやルメイトルやウオリクにはこんな事の出來なかつたのは明白である。彼等は中世時代の一部分であり、從つて呼吸して居る空氣の原子の型が意識出來ないと同樣に、中世時代の特質と言ふものを意識出來なかつたのだ。然し、私が彼等にこの意識を充分に與へて、彼等の態度を二十世紀に對して說明出來る樣にしてやらなければ、この戲曲は分らないものになつてしまふだらう。私の要求する凡てはかうである——このやうにやむを得ず眞實らしさを犧牲にすることによつて、私の次の主張を是認するに充分な眞實を摑んだ、（他に可能方法がなかつた）卽ち有力な記錄や自分の判斷力から綜合して考へ得る範圍では、劇中のこの三人の代表者に言葉として現はしてある事は、もし彼等が眞に自分達の爲してゐる事を知つたならば、實際さう言つたに違ひない事なのである。そして、私の筆としては、これ以上の劇も物語も書く事が出來ないのだ。

當戲曲改訂に就ての有難い提言の二三

英米の諸批評家、及び私の戲曲を寬大な態度で熱心に賞讃して下さつた人々に對して、どうしたらこの劇が良くなるだらうかと誠意のある忠告を賜つた事を感謝しなければならない。その人達の指摘される事は、終曲（エピロオグ）を除いたり、教會、封建制度、宗教裁判、異端論などのやうな非劇的で冗漫な事柄に關する意見の全部を削るために、誰か經驗ある舞臺監督が、無慘な迄に靑鉛筆を振つたならば、この劇を餘程短くする事が出來るだらう、と言

ふ事である。それが間違ひだと私は思ふ。劇を切斷して一時間半程を節約する青鉛筆傾きの經驗ある騎士は、同時に、見事な舞臺裝置を作つて、ロアル河に本水を流し、實物の橋を架け、此の橋の奪ひ合ひの模擬戰をさせて、本物の馬に乘つたジョウンに勝ち誇つた佛兵を率ゐて出て來させて、二時間餘りを費したがるものだ。そんな監督なら、卽位式の場面はこれ迄のあらゆる舞臺裝置も光を失ふやうなものを拵へる事だらう。先づ、ランスの街の行列、次いで大伽藍内の儀式の場を見せ、兩方共に特に作曲された音樂が附くといふ具合だ。マアシスン・ラングが「彷徨へる猶太人」でいつもされる樣に、ジョウンは舞臺で燒かれることになるだらう。その理由は、女だつて燒かれるのなら燒かれたつて少しも構はないし、見物は燒かれるのを見る爲に金を拂つてゐるのだといふ意見なんだ。大道具方がこんな大仕掛けの裝置を建てたり壞したりする幕合は、永遠かと思ふ位長くなり、其の結果休憩室の酒場が大儲するだらう。そして、疲勞し風紀の亂れた觀客は、我慢がしきれなくなつて、こんな無暗に長い無茶苦茶に詰らない無意味な芝居を書くと言つて私を呪ふだらう。然し、新聞は異口同音に褒めて呉れるだらう。もし私が自分の仕事を充分に理解せず

に、これ等の親切な然し迷惑な忠告者達に耳を傾けたとしたら、上述の樣な結果になる事は、シエエクスピアの演劇史を知つてゐる人なら誰一人疑ふまい。實際私に上演權が無くなれば、そんな事になるだらう。だから、私の生きてゐる間に此の芝居を御覽になるのは、皆樣の爲にも良からうかと思ふ。

終曲

終曲に就て一言すると、ジョウンの此の世に於ける歷史は死刑と共に不幸な終りを告げたのであつて、死刑と共に新しく始まるのではないといふ書き振りをして、自分を笑ひものにする氣は更にない。燒け滅んだジョウン並びに聖者に推奠されたジョウンを描き出す事は、とにかく必要だつた。何故なら、自分の不注意からモスリンのスカアトを應接間の煖爐の中につつこんで燒け死んだ女は澤山あるが、聖者に推奠されることは別問題であり、もつと重大な事である。だから、終曲はなければならないと思ふ。

批評家達を無視したのでない證據として
彼等に

職業的批評家（私自身もさうであつたが）にとつては、芝居見物はアダムの呪である。芝居は彼が額に汗を流して我慢して金を貰ふ禍なのだ。だから、芝居が早く濟めば濟む程いゝのだ。こんな譯で批評家は、金を拂つて芝居を見に行く常客とは、全く相容れない反對の立場に立つてゐるやうだ。見物の考へでは、芝居が長ければ長いだけ餘計の享樂が拂つた金に對して得られるのである。實際、見物はさう言ふ立場に立つのだ。ことに田舍ではさうである。田舍では見物は全然芝居を見る爲に劇場へ行つて、數時間の享樂を求めて止まないので、地方巡業の監督は、倫敦劇が短いために、而も他に出し物がなくて是非それをやらなければならない場合には、すつかり困るやうな事が度々ある。

何故なら、倫敦では批評家は非常に大勢の人々の後楯を持つて居て、その大勢の人々と言ふのは、他の多くの人が教會へ行くやうに劇場へ來るのであるが、その目的たるや、最上

の衣裳を見せびらかし、他人の衣裳と較べ合ふためであり、流行に遲れないやうにとか、宴會で話す話の種を見附けるためであり、或はお氣に入りの俳優を讃美したり、家に居るより何處か他の處で毎晩暮らしたい爲であつて、つまり、演藝そのものに興味があるのではなく、その他の何等かの、或はあらゆる理由のためなのだ。流行の中心地では、教會へ行く無信仰者、音樂會やオペラへ行く音樂無理解者、劇場へ行く演劇の分らぬ人間の數は甚だ多いので、說教は十分間に切りつめられ、芝居は二時間に制限されると言ふ奇妙な現像が生ずるのだ。而も、それでさへも、會衆は最後の祝禱の濟むのを、觀客は最後の幕の下りるのを待ちあぐんでゐる。それは、彼等の本當に望んで居るランチか晩餐へゆくためなのだ。彼等の爲に出來るだけ遲らした開始の時間に、きつかりと或はそれより遲くさへやつて來た癖にさうなのだ。

かくて、特等席からそして新聞に、僞善の空氣が漲る。だが、本物の芝居は退屈で厄介な代物で、それを二時間以上（二回の休憩の長い幕合ひがあつても）見て呉れと言はれるのは耐へられない課稅だとは、誰も公然とは言ひはしない。「自分はお說教や音樂が嫌ひな

様に、古典の悲劇や喜劇は嫌いだが、警察事件や、離婚沙汰や、自分や或は自分の妻か夫に情慾を起させるやうなダンスや裝飾なら何でも好きだ。偉い人が何と言はうと、自分は頭を使ふ必要のある動作には何の樂しみも感じない。そして、誰だつてさうだらうと思ふ」と口にする者は居ない。誰もそのやうな事を口にはしないが、歐米各都市の新聞に載せてある演劇批評の拾中九つ迄は、それの亂雜なパラフレイズ以外のものではない。そんな意味ではないと言つたつて、外に意味のとり樣がない。

私はこれに就て不平を言ふのではない、かう言ふ人の方が私に譯の分らぬ不平を並べてゐるが。然し、アインシュタインが數學の出來ない人達を構はなかつたやうに、私もこんなことには構つて居れない。古典的な悲劇や喜劇それ自身に興味を持つて劇場へ來て、その作品が立派なものであり、うまく演ぜられた時はすつかり悦んで、家へ歸る最終列車や乘合馬車に間に合はす爲に澁々劇場を去る人達の爲に、私は古典風に作るのである。八時か八時半頃の夕食の爲に遲れて來て、少くとも芝居の最初の半時間を見逃す人達とは大違ひで、かかる人達は、席をとる爲に刺すやうな冷たい空氣の中に數時間前から入場口に縱

列を作つて立つて居るのだ。一週間も一つの芝居が續く田舍でも、お辨當入りのバスケットを持つて來て、最後まで芝居を見て居る。そんな人達が私の衣食を賴り得る私のペイトロンである。だが、私は十二時間の芝居を見せて上げる譯にもゆかない。と言ふのは、朝飯後から芝居を始めて日沒に終らすのは、オベルアムメルガウに於ける樣にサアリやミドウルセックスでは、肉體上から言つても技藝上から言つても可能な事だし、劇場に一晩中座り續ける事は少くとも衆議院に一晩中座りつゞけるのと同樣の興味があり、より以上の利益がある事だが、現在の狀態ではそんな芝居を演じるのは實行不可能なのである。だが「聖ジョウウン」では、私は全力を盡して、巧く定められた昔の制限の三時間半ぶつ通しの芝居にして、たゞ藝術には何の關係もない方面の事を顧慮して幕合を一つ入れた。これは、似而非批評家や僞善的に芝居に行く流行の人間には辛いものである事は、私とても知つて居る。彼等が「成程、君の劇は傑作だらうが、九時十五分前に始めて十一時迄に終らないが故に、見込みの立たない位に失敗するに違ひない」と斷言するのを見ると、私は氣の毒に思はざるを得ない。事實は全く彼等に反對して居る。凡ての者が、彼等と同意見ではない

と言ふ事を彼等は忘れて居る。然し、彼等には氣の毒な事だが、私は彼等の爲に自分の作品を臺なしにして、劇場を嫌ふ人々に媚びて劇場を愛して呉れる人々を追ひ出す事は出來ない。だが、彼等自身も救はれる道を持つて居るのを知らせて上げよう。彼等は例の如く遲く來れば、初めの一部分を見ないで濟む。早く歸つてしまへば終曲を見物しないでよい。かやうにして手に入る最小限さへまだ苦痛なら、全然劇場へ來ないと言ふ方法もある。だが、この極端な方法は執らないやうにお願ひする。私の懷にも都合が惡いし、彼等の魂にも善くないからだ。彼等のうちの少數は既に、重大な點は、一つの劇に要する初めから終りまでの時間の長さではなく、その時間が流れゆく速力であるのに氣がついて、劇場なるものは、アリストオトル式な瞬間には淨罪界となるけれども、必ずしも彼等が絶えず出會つてゐるやうな退屈な場所ではないと言ふ事を知つて來たのである。劇場の不愉快さは、劇がそれを忘れさしてくれるなら、何でもないではないか。

アイオト・聖・ロオレンス

一九二四年五月

序文目次

事實のジョウンと推測のジョウン……一
ジョウンとソクラテス……三
ナポレオンとの比較……五
ジョウンは無罪か有罪か……八
ジョウン美醜論……一二
ジョウンの社會的位置……一四
ジョウンの聲と幻……一八
進化に對する欲求……二三
單なる圖解學では不充分である……二六
ジョウンが受けなかつた現代教育……二七

お告の誤り……三〇
ガルトン説の幻視者としてのジョウン……三一
ジョウンの男らしさと軍國主義……三三
ジョウンは自殺狂か……三七
結局のジョウン……三九
ジョウンの未完成と無知……四一
文學に現れた「乙女」……四三
中世時代に就ての新教徒の誤解……五〇
ジョウンの裁判が比較的に公平だつた事……五二
ジョウンは政治犯として裁判されたのでない……五五
教會は「綸言汗の如し」か……六〇
殘酷に就ての現代と中世……六三
カソリックの僧侶反對主義……六七

カソリック主義ではまだ十分にカソリックではない……六八
變化の法則は神の法則である……七一
盲信に就ての現代と中世……七四
容赦に就ての現代と中世……七六
寛容の變化性……七九
天才と拘束との爭鬪……八二
神政者としてのジョウン……八四
神政政治に必要な成功の連鎖……八六
ジョウンの歴史に對する現代の牽强附會……八八
歴史は常に今日のものではない……八九
眞實のジョウンは我々にとつてまだ十分に不可思議ではない……九〇
歴史的再現に對する舞臺の制限……九二
エリザベス時代の戯曲の一缺陷……九四

悲劇であつてメロドラマではない……九七
悲劇に於ける避け難い誇張……九九
當戯曲改訂に就ての有難い提言の二三……一〇一
終曲……一〇五
批評家を無視したのでない證據として彼等に……一〇四

聖ジョウン

「聖ジョウン」の初演は、紐育のガリック・シアタアにて、ザ・シアタア・ギルドによつて、一九二三年十二月二十八日。英國に於ける初演は、聖マアティンズ・レエンの新劇場(シアタア)にて、一九二四年三月二十六日。

第一場

紀元一四二九年の或朗らかな春の朝。ロレエヌとシャンパニユの間を流れるムウズ河の邊の、ヴオクウルウルの城。

城主ロベエル・ド・ボオドリクウル將軍は、鄕士であつて、男前もよく、肉體も强健であるが、自分の意志と言ふものを有たない。彼はいつものやうにこの缺點を隱すために、踏みつけられた虫ともの言ふべき賄方を恐ろしく叱りとばしてゐる。賄方は、肉も乏しく、髮も少く、靑春が花のやうに咲き誇つた事が一度もないので、年齡が凋む事の出來ないと言ふ型の男であつて、十八歲から五十五歲までの齡であれば、何歲でも構はない。

二人は城の二階の、日當りの好い石造りの部屋にゐる。城主は白木の丈夫な樫の卓の傍に、それに似合ふやうに椅子に腰を下ろして、左の橫顏を見せてゐる。賄方は卓の他の側に彼と向き合つて立つてゐるが——若し、彼のやうな、そればかりは御容數と言はんばかりの嘆願的な態度をも「立つてゐる」と言つて差支ないなら、立つてゐるのである。十三世紀風の縱仕切の窓が、彼の後に開いてゐる。それに近く、隅の方に、狹いアアチ型をした戸口のある小塔があつて、その戸口は、中庭へ下りる廻り階段へ通じてゐる。卓の下には四足の頑丈な腰掛、窓の下には木の箱がある。

ロベエル　卵が無い！　卵が無い!!　やい、何だと、卵が無いつて、貴樣何を言ふのだ。

賄方　殿樣、それはわたくしのせいではございません。神樣のお仕業でございます。

ロベエル　罰あたり奴が。貴樣はわしに卵が無いと言ふんだな。そして、それを神樣のせいにするんだな。

賄方　殿樣、わたくしにはどうする事が出來ますでせう。わたしは、卵を生む事は出來はしません。

ロベエル　（皮肉に）へえ、貴樣はこれも冗談にしてゐるんだな。

賄方　いいえ、殿樣、飛んでもないことです。あなたお一人ではございません、わたしどももみんな卵無しで濟さなくてはならないのでございます、はい、殿樣。牝鷄が卵を生まうとはしないのでございます。

ロベエル　何だと。（立上つて）おい、わしの言ふ事を聞け。

賄方　（恐れ入つて）はい、殿樣。

ロベエル　わしは何者だ。

賄方　あなたが何者だと仰しやるのでございますか。

ロベエル　（彼に近づいて）さうだ。わしは何者だ。わしはロベエルではないか、ボオドリクウルの郷士、このヴオクウルウル城の城主ではないか。それともわしは牛飼の若僧か。

賄方　おお、殿様、申すまでもなく、あなたはこのお城では王様よりもお偉い方でございます。

ロベエル　その通りだ。ところで、貴様は何者だか知つてゐるか。

賄方　はい、わたしは忝けなくもあなたの賄方をつとめる詰らない人間でございます。

ロベエル　（形容詞に次ぐに形容詞を並べて、彼を壁の方へぐんぐん逐ひ詰めながら）忝けなくも貴様はわしの賄方であるばかりか、フランス中で、一番悪い、一番無能な、涎垂しの、鼻つ垂しの、ぢやぢや馬の、お喋り好きな、阿呆の賄方なんだ。（彼は卓のところへ大股で歩いて戻る）

賄方　（箱のところにちぢこまつて）さうですとも、殿様。あなたのやうなお偉い方には、わたしなんぞそんな風に見えるに違ひございません。

ロベエル　（振向いて）なに、わしのせいだとでも言ふのか。え。

賄方　（嘆願するやうに彼に近附き）おお、殿様。あなたは何時でも、わたしが何にも知らずに言つた言葉をそんな風におとりなさるのです。

ロベエル　わしが、卵がいくつあると訊いた時に、わたしには卵が生めませんなどとほざいたが最後、今度こそ頸つ玉をへし折つてやるぞ。

賄方　（辯解しながら）おゝ、殿様、おゝ殿様——

ロベエル　おい、「おゝ、殿様、おゝ、殿様」ぢやない。「いゝえ、殿様、いゝえ、殿様」と言ふんだ。わしのあの三羽のバアバリイ種と黒い鶏は、シャンパニュ中探したつてあんなによく卵を生む奴はないんだ。而も、貴様はわしに向つて、卵が無いと言ふんだな。誰が盗んだのだ。やい、まつすぐに白状しろ。でないと、貴様を嘘つきでわしの所有を泥坊に賣渡した奴と見做して、城門から蹴り出してしまふぞ。それに、昨日は牛乳も少なかつたぞ。よく覺えておけ。

賄方　（必死となつて）存じてをります、殿様。存じ過ぎる位存じてをります。牛乳もございません。卵もございません。明日になれば、何もかもなくなるでせう。

ロベエル　何もかもなくなる！　貴様、すつかり盗む氣だな、え。

賄方　いゝえ、殿様、誰もなんにも盗みは致しません。でも、わたしどもは呪文をかけられてゐるのです。何かかう魔法にかかつてゐるやうで。

ロベエル　わしにそんな話をしたつて何になるのだ。ロベエル・ド・ボオドリクウルは、妖婆を焼き殺し、泥坊は絞め殺してしまふのだ。行け。卵を四ダアス、牛乳を二ガロン、正午までにこの部屋へ持つて来い。でないと、貴様の背骨があぶないぞ。わしを馬鹿にしようものなら、目にもの見せてくれるぞ。（決然たる態度で自分の席に坐る）

賄方　殿様、卵がないのでございます。これからもございますまい——假令そのためにわたしをお殺しにならうとも——あの娘が門口にをります以上は。

ロベエル　娘！　誰のことだ。貴様、何の話をしてゐるんだ。

賄方　あのロレエヌの娘でございますよ、殿様、ドムレミイから参つた。

ロベエル　（眞赤に怒つて立上りながら）な、な、なんだと。やい、畜生。貴様、あの娘のことを言ふのか。二日前に厚がましくもわしに面會を求めたあの娘、貴様に言ひつけて、父親の許へ送り返してうんとひつぱたかせるやうにと命じておいたのに、あいつ、まだ此處にゐるのか。

賄方　はい、娘に歸れと言つたのですが、どうしても訊かないのでございます。

ロベエル　歸れと言へと言つたのではない。追ひ出してしまへと言つたのだ。わしの命令を果すためには、武裝した兵士五十人と屈竟な召使が十二組もゐるではないか、みんなあの娘を恐れてゐるのか。

賄方　あいつ、ひどく強情な奴でして、殿様。

ロベエル　（彼の襟頸を摑んで）強情だと？　やい、見てゐろ。貴様を二階からほり出してやるぞ。

賄方　どうぞ、殿様、そればかりは。

ロベエル　よし、では、強情張つてわしのやる事を留めてみろ。譯はないぢやないか。詰らない娘つ子だつて出來るのだ。

賄方　（彼の兩手でぐにやぐにやになるばかりに小突き廻されて）と、殿様、殿様。わたしをほり出したつて、あの娘から脱れる事は出來やしませんよ。（さう言はれて止むを得ずロベエルは彼を放してやる。彼は床の上に倒ひつくばつて、諦めたやうに主人をつくづくと見詰めてゐる）申すまでもな

く、殿様、あなたはわたしなんぞよりずつと強情でいらつしやいます。然し、あの娘もさうなのです。

ロベエル　いゝえ、殿様。その事ぢやございません。あなたの性格がお強いと申すのです。あの娘はわたしどもよりはずつと弱うございます。たかが可弱い娘つ子でございます。然し、わたしどもはあいつを追ひ拂ふ事が出來ないのです。

賄方　いゝえ、殿様、わたしどもの心に勇氣を注ぎこんでくれるのでございます。あいつにはほんとうに怖いものがないやうでございます。多分、あなたでしたら、あいつを恐れさす事も出來ますでせう。

ロベエル　卑怯な野良犬め、あいつが怖いのだな。

賄方　（用心深く立上りながら）いゝえ、殿様、わたしどもの怖がつてゐるのはあなた様でございます。でも、あの娘は、わたしどもの（むつちりと凄く）さうあるべきだ。その娘は何處にゐるのだ。

ロベエル　下の中庭で、いつものやうに兵隊達と話をしてをります。あの娘はお祈りしてゐるか、

でなければ何時も兵隊達とお喋りしてゐるのでございます。

ロベエル　お祈りする！　え！　貴様、あの娘がお祈りすると、ほんとうに思ふのか、馬鹿めが。何時も兵隊とお喋りしてゐるやうな女は、どんな女だかわしにはよく分つてゐる。わしが少しその娘と話してみてやる。（彼は窓際へ行つて、外へ向つて荒々しく怒鳴る）やい、其處にゐる女。

娘の聲　（晴れやかで、力強く、粗野である）あたしですか、お殿様。

ロベエル　さうだ。貴様だ。

聲　あんた、城主なの。

ロベエル　さうだ。いけづうづうしい奴だな。如何にもわしが城主だ。此處へ上つて來い。（庭にゐる兵士達に向つて）おい、その娘を案内してやれ。愚圖々々せずに引つ立てて來い。（彼は窓際を離れて、卓のそばの席に歸り、威丈高に腰を下ろす）

賄方　（囁き聲で）あの娘は自分でも軍人になつてみたいと言つてゐるのです。あなたから軍人の支度を頂きたがつてゐるのです。殿様、鎧や、劍や！　全くでございますよ。（彼はロベエル

の背後に隠れる）

ジョウンが小塔の戸口に姿を現はす。彼女は十七八歳の強健な田舎娘で、赤い色の賤しからぬ服裝に尋常普通でない顔付。兩眼は、想像の強い人によくあるやうに、廣く離れてゐて、飛び出してゐる。鼻孔の大きい、鼻筋通つた形の好い鼻。短い上唇。引締つてはゐるがふつくらした口。負けじ氣の現はれた美しい顔。彼女はさうとうボオドリクウルの面前に立つまでに漕付けたのを悦び、その結果についても希望に充ちて、いそいそと彼の卓に近附く。彼が睨みつけても、辟易もしなければ怖れもしない。彼女の聲は普段の儘でも、心を捕へる魅力に富んだ聲であつて、確信に充ち、心に訴へるやうで、それを耳にしては否とは言ひ難いところがある。

ジョウン　（ひよいと膝を曲げて挨拶して）お早うございます、城主のお殿様。あんたは、あたしに鎧と馬と兵隊を何人か下さつて、あたしを皇太子（ドオファン）様のところへお遣りにならなくちやいけないわ。それが、あたしの主からあんたに下さつた御命令よ。

ロベエル　（憤然として）お前の主人からの命令だと！　一體全體お前の主人と言ふのは誰だ。その主人のところへ歸つて、わしは、そんな者の命令に從ふやうな大名でもなければ小名でもない、わしはボオドリクウルの領主だと、さう言へ。わしは王様の命令でなければ聞かないのだ。

ジョウン　（心配御無用と言ふ風に）　さうよ、殿様。それで結構だわ。あたしの主は天の王様ですもの。

ロベエル　やあ、こいつ氣違ひだな。（賄方に）何故それならさうと言はないのだ、間抜けめ。

賄方　殿様、その女を怒らせちやいけませんよ。欲しいと言ふものをお遣んなさいまし。

ジョウン　（焦つたさうに、然し親しげな樣子で）あたしが話しかけるまでは、みんなあたしを氣違ひだと言ふのよ、殿様。でも、あんたには分るでせう、神様があたしの心にお授けになつた事を、あんたが實行なさるのは神様の思召（おぼしめし）なのよ。

ロベエル　わしがお前を父親の許へ送り返して、監禁して、その狂つた心をお前から叩き出すやうにと言ひつけるのが、神様の思召なんだ。どうだ、それに對して何か言分があるか。

ジョウン　あんたはさうするおつもりなんでせう、殿様。でも、愈々となると、すつかり變つてしまつてよ。あんたはあたしに會はないと仰しやつたが、あたし、ちやんと此處に來てゐるわ。

賄方　（哀訴するやうに　さうですよ、殿様。お分りでせう、殿様。

ロベエル　默つてろ、貴様は。

賄方　（屈從して）へい、へい。

ロベエル　（少なからず確信の無くなつたのを苦々しく感じながら、ジョウンに向つて）では、わしがお前のお相手するものときめてゐるんだな。

ジョウン　（愛らしく）ええ、さうよ。

ロベエル　（益々危くなつたのを感じて、兩の拳をしつかりと卓の上に置いて、この好ましくない、しかも自分にとつては決して珍しくない心持を除かうとして、威丈高に胸を張る）　さあ、よく聞け。わしはどんな人間だか見せてやらう。

ジョウン　（せはしく）何卒見せて頂戴、殿様。馬は十六フランかゝるわ。大した金高だけれど鎧で儉約出來てよ。兵隊の著る鎧で、あたしの體にしつくり合ふのがすぐ見つかるわ。あたしそりや頑丈だから、あなたの著ていらつしやるやうな、體に合せて造つた綺麗な鎧なんて要りやしないわ。兵隊だつて澤山要りやしないわ。オルレアンの包圍を解くに必要なものは、皇太

子が殘らずあたしに下さるでせう。

ロベエル　（呆然として）オルレアンの包圍を解くつて！

ジョウン　（率直に）ええ、さうよ。だから、神様があたしをお遣はしになつたのよ。あたしと一しよに寄越して下さる兵隊は、いゝ人であたしに親切にしてくれるなら、三人で澤山だわ。あの人達はあたしと一しよに行くつて約束してくれたの。ボリイとジャツクと、それから——

ロベエル　ボリイだと！　貴様、何て圖々しい奴だ。わしの面前でベルトラン・ド・ブウランジエ殿をボリイと呼ぶのか。

ジョウン　あの人のお友達がさう呼んでゐるんだもの。あたし、他の名前のあるのを知らなかつたわ。ジャックは——

ロベエル　それはジョン・オブ・メッス氏のことだな。

ジョウン　さうよ。ジャツクは悅んで來てくれるわ。大變親切な人で、貧乏人にやれと言つてお金を下さるの。あたしの考では、ジョン・コッドセイブも來るでせうし、射手のデックに、それからあの人達の召使のジョン・オブ・オネクウルとジュリアンも來てよ。あんたには迷惑になり

やしないわ、殿様。あたし、もうすつかり手筈はしてあるの。あんたがたゞ命令さへ與へて下されば、いゝのよ。

ロベエル　（あまりの事に茫然として、彼女をつくづく見守りながら）あゝ、あゝ、何つて事だ。

ジョウン　（強ひて見せようとしない愛らしさで）いゝえ、殿様、神様はそりや慈悲深い方よ。それに、有難い聖キャサリンと聖マアガリットの聖者が、毎日あたしに口を利いて下さるが、（ロベエルは口あんぐり）あんたのためにおとりなしして下さるわ。あんたは天國へゆけてよ。あんたの名は、あたしを最初に助けた人として永久に殘るでせう。

ロベエル　（依然として當惑してゐたが、新しい手掛りを求めようとして調子を變へて、賄方に向つて）ムッシュウ・ド・プウランジエの話はほんとうかな。

賄方　（熱心に）ほんとうでございます、殿様。それにメッス様のお話もほんとうでございます、お二人とも、この娘と一しよに行きたいと仰しやいます。

ロベエル　（考へ込んで）むう！（窓際へ行つて、中庭へ向つて怒鳴る）おおい、みんなのもの。ムッシュウ・ド・プウランジエを此處へ寄越してくれ。（ジョウンの方へ振向いて）出て行け。中庭につてゐろ。

ジョウン　（晴れやかな微笑を見せて）はい、殿様。（去る）

ロベエル　（賄方に）あの女と一しよに行け、何をぶる〳〵慄えてゐるのだ、馬鹿めが。呼んだら聞えるところに居れ。そして、あの女から眼を離すんぢやないぞ。もう一度、あの女を此處へ呼び出すから。

賄方　何卒さうして下さい、後生ですから。シャンパニュ中で一番よく卵を生むあの牝鷄に御用心なさつて、そして——

ロベエル　わしの靴に用心しろ。靴の屆かぬところへ貴様の背骨を持つてゆくがいゝ。

賄方急いで出て行かうとして、戸口のところでベルトラン・ド・プウランジエにばつたり出會ふ。彼は腺病質なフランス將校。三十六歳前後。憲兵司令部に勤務してゐる。何時も夢みるやうにうつとりしてゐて、話しかけられなければ滅多に口を利かない。而も、その返答たるやまだるつこくて強情なところがある。とにかく、獨斷的で、大言壯語の、素晴らしく元氣のいい、その癖意志力の缺けてゐるロベエルとはいい對照である。賄方は彼に道を讓つて去る。

プウランジエは敬禮して、命令を待ちながら立つてゐる。

ロベエル　（親しげな樣子を見せて）用事ではないよ、ボリイ。少し打解けて話したい事があるのだ。まあ、掛け給へ。（彼は卓の下から足の甲にひつかけて腰掛を取出す）

プウランジエは、普通の姿勢に歸つて、部屋へはいつて來て、腰掛を卓と窓との間に置いて、思案顏で腰を下ろす。ロベエルは卓の端に凭れるやうに半ば腰を掛けて、親しげな樣子で話し始める。

ロベエル　まあ、聞き給へ、ボリイ。わしは、君に親父のやうに話しなければならない事があるのだ。

プウランジエは、暫く生眞面目な顏で彼を見上げてゐたが、何にも言はない。

ロベエル　話と言ふのは他でもないが、君が興味を感じてゐるあの女のことなんだ。今、わしはあの娘に會つて、話をしてゐたところだ。第一に、あいつは氣違ひだ。それは大した事ではない。第二に、あいつは賤しい百姓娘ぢやない。中產階級だ。これが重大な點だて。わしはあの女の階級をよく知つてゐる。あいつの親父は、去年訴訟事件で村を代表して此處へ遣つて來たことがある。村での有力者の一人だ。百姓なんだ。大地主ぢやない。百姓をして金を儲けて暮しを立てゝゐるんだ。さうかと言つて、勞働者ぢやない。職工ぢやない。從兄弟の一人に、

辯護士や牧師もあらうと言ふ家柄なんだ。かう言ふ種類の人間は、社會的にはどうと言ふ事もないが、よく〳〵お上を困らせるものだでなあ。言ひ換へれば、このわしをなあ。ところでだ、君があの娘を欺いて、あいつを皇太子のところへ連れて行くのだと思ひ込ませて、あいつを連れ出すのは、君にとつちや譯のないことだらう。それは分り切つたこつた。だが、君があいつのために面倒な事でも惹き起すと、わしがひどく困る事になるんだ。わしは、あいつの親父の領主で、あの娘を保護する責任があるんだからな。だから、ボリイ、わし達が友達であらうがなからうがそれは別問題として、まあ、あんな女から手をひいてゐた方がいゝぜ。

プウランジエ　（思慮深い感銘を現はしながら）僕にとつては、あの女をそんな風に考へるなんて聖母マリアをそんな風に考へると同じだ。

ロベエル　（卓を離れて）だが、あの女は、君やジャックやデックが一しよに行つてくれると申出たと言つてゐたぜ。何のためだ。まさか君は、あの女が皇太子のところへゆくと言ふ氣違ひじみた考を、本氣でとりあつてゐるんぢやあるまいなあ。

プウランジエ　（ゆつくりと）あの女には何處か偉いところがある。下の衛舍には、隨分口の汚

ない心の下劣な連中もゐるのだが、あの娘が女だと言つて淫らがましい口を利いたものが一人もゐないのだ。あの女の前では、呪の言葉も口にしないのだ。あの女にはどうも偉いところがある。何處か不思議なところがある。遣らせてみても損はないかも知れない。

ロベエル　おい、おい、ボリイ！　しつかりしろ。君は元來が常識の欠けてゐる男だが、これぢや少しひど過ぎるぜ。（胸糞惡さうに元の坐へ退く。）

ブウランジエ　（動ずる氣色もなく）常識が何になるんだ。若し我々に少しでも常識があるなら、我々はバアガンデイ公か英國王の味方をしてゐる筈だ。英國軍はロワル河に到る迄の、この國の半分を占領したのだ。バリイも手に入れてゐる。この城もやつ等のものだ。君によく分つてゐるやうに、我々はこの城をベッドフオド公に開渡さなきやならないのだ。今では君は宣誓上この城の主であるに過ぎないのだ。皇太子は、隅つこに追詰められた鼠のやうにシノンに行つてゐるが、戰ふ氣は更にないのだ。我々にはあれが皇太子だとはどうしても考へられない。母君はあれは皇太子ではないと言つてゐられるのだ、よく知つてゐるべき筈の母君がね。考へても見給へ、王妃でさへ、自分の生みの子を、正統な子ではないと言つてゐるのだぜ。

ロベエル　さうさ、王妃は自分の娘を英國王に嫁がせてゐるんぢやないか。君はあの婦人を非難するのか。

ブウランジエ　僕は誰も非難しやしない。だが、有難いことには、あの母のお蔭で皇太子は落目になり駄目になつてしまつたのだ。そして、我々にとつちやそれもいゝだらう。英國軍はオルレアンを占領するだらう。「私生子（バスタアド）」（譯者註——オルレアンの指揮官デュノアを指す）では敵軍を喰ひとめる事は出來ないだらうからね。

ロベエル　あいつ、一昨年モンタルヂで英國軍を打破つたぜ。わしも一しよだつた。

ブウランジエ　駄目だよ。今ではあれの部下はみんな腰拔けだからな。それに、あいつではとても奇蹟は行へないだらう。今となつては、我軍を救ふものは奇蹟をおいて外には無いのだ。

ロベエル　奇蹟大いに結構さ、ボリイ。ただ何よりも困つた事には、今日（けふび）日では奇蹟は起らないつて事だよ。

ブウランジエ　僕もいつもさう思つてゐたんだ。だが、今ではさうは思へなくなつたよ。（立上つて、考に耽りながら窓際へと歩いて行き）とにかくだね、今となつては何もかもやつて見るに如（し）

かずだね。あの娘には何處か不思議なところがある。

ロベエル　あは！　君はあの女が奇蹟を行ふ事が出來ると思つてゐるんだね、え。

ブウランジエ　僕には、あの女そのものが既に奇蹟のやうに思へるんだ。とにかく、あの女は我々の手に殘つた最後のカアドだ。勝負を投げ出すよりは、そいつをうまく使つてみる事だな。（小塔の方へぶらぶら歩いてゆく）

ロベエル　（迷ひながら）君はほんとうにさう思ふのかい。

ブウランジエ　（振向いて）かうなつては、他に考へやうが無いぢやないか。

ロベエル　（彼に近寄つて）おい、ボリイ。若し君が僕の立場に立つたら、あんな女の望みに應じて、馬一匹に十六フランも出すかい。

ブウランジエ　僕は出すよ。

ロベエル　出す！

ブウランジエ　さうさ。僕は自分の言ふのに間違のないのを保證するよ。

ロベエル　ぢや君は、まるで見込の無い事に、ほんとうに十六フラン賭ける氣か。

ブウランジエ　賭ける。こりや賭博ぢやないよ。

ロベエル　ぢや、何だ。

ブヴランジエ　確かな事實だ。あの女の言葉、あの女の神への熱烈な信仰、それが僕の心を燃え立たせたのだ。

ロベエル　（どうも仕樣のない奴だと諦めて）ふん！　君もあの女同樣氣違ひだ。

ブウランジエ　（頑固に）目下の我々には氣違ひの二人や三人は入用なんだ。正氣の人間が、我々をどんな羽目に陷れたか考へて見給へ。

ロベエル　（彼の不決斷なところが、斷乎たる態度を裝つてゐたのを裏切つて明らかに現はれて來る）どうも僕には途法もない馬鹿な事のやうな氣がする。だが、君がたしかにさう思ふなら——

ブウランジエ　僕はたしかにあの女をシノンへ連れてゆけると思ふ——君が留めさへしなければ。

ロベエル　そりや男らしくないよ。君は責任を僕に負せようとするんだ。

ブウランジエ　どつちに決めたつて君の責任だよ。

ロベエル　さう言やあ全くさうだ。ところで、俺はどつちに決めたらいいのかなあ。この事件は僕にとつてどんなに困つた事だか君には分らないんだ。（ジョウンが彼に決心を與へてくれるかも知れないと言ふ不確な望を起して、これ幸ひとばかり生溫い手段を取つて）どうだらう、あの女ともう一度話して見る方がいいと思ふかい。

ブウランジエ　（立上つて）それがいいだらう。（窓際へ行つて呼ぶ）ジョウン！

ジョウンの聲　行つてもいいの、ポリイ。

ブウランジエ　上つておいで。はひつて來いよ。（ロベエルの方へ振向いて）君達二人でゐるやうに、僕は遠慮してゐようか。

ロベエル　いや、ゐ給へ、僕の後楯になつてゐてくれ給へ。

ブウランジエは箱の上に腰を掛ける。ロベエルは嚴めしい椅子のところへ戻つたが、前よりも一層威嚴を繕ふために立つた儘でゐる。ジョウンは、嬉しい報せにいそいそとはひつて來る。

ジョウン　ジャックが馬の代を半分出してくれるわ。

ロベエル　ほお！（氣抜けして、坐る）

ブウランジエ　（眞面目に）お坐り、ジョウン。

ジョウン　（少しためらひ、ロベエルを見ながら）坐つていいの。

ロベエル　言はれた通りにするんだ。

ジョウンは膝を曲げて禮をして、二人の間の腰掛に腰を下ろす。ロベエルはひどく嚴然たる態度で、どぎまぎしたのを隱す。

ロベエル　お前の名前は何だ？

ジョウン　ロレエヌではみんながジエンニイと呼ぶの。ここいらのフランスでは、あたしジョウンよ。兵隊さんは「娘」つて呼ぶわ。

ロベエル　お前の苗字は？

ジョウン　苗字？　苗字つて何。お父さんは時々自分をダアルクつて言ふの。でも、あたし何のことだか知らないわ。あんた、あたしのお父さんに會つた事があるでせう。お父さんが——

ロベエル　うん、うん、覺えてゐるよ。お前はロレエヌのドムレミイの生れだつたなあ。

ジョウン　ええ、さうよ。でも、それがどうなの。あたしたちはみんなフランス語を喋つてゐ

るぢやないの。

ロベエル　質問するんぢやない。返答すればいいんだ。お前はいくつだ。

ジョウン　十七よ。みんながさう言ふの。もしかすると十九かも知れないわ。あたしよくは憶えてゐないの。

ロベエル　お前は、聖キャサリンや聖マアガリットが毎日言葉をかけて下さると言つたが、ありやどういふ意味だ。

ジョウン　ほんとうに言葉をかけて下さるのよ。

ロベエル　ぢやその聖者達はどんな様子だね。

ジョウン　（急に强情になつて）その事ならなんにもお話出來ないわ。そんな事をしてもいいつてお許がないですもの。

ロベエル　だが、お前には實際聖者様が見えるんだらう。そして、わしがこうしてお前に話してゐるやうに話して下さるんだらう。

ジョウン　いいえ、まるで違ふの。あたし、お話出來ないわ。あたしの耳に聞える聲のことは

なんにも仰しやつちやいけないわ。

ロベエル　何を言つてゐるんだ。聲だと。

ジョウン　あたしには、ああしろかうしろと仰しやる聲が聞えるの。それは神様のお告だわ。

ロベエル　そりやお前の空想のせいだ。

ジョウン　無論さうよ。神様の思召つてそんな風にしてあたし達には分るのよ。

ブウランジエ　一本やられたね。

ロベエル　なに、大丈夫だ。（ジョウンに）で、神様は、お前にオルレアンの包圍を解けと仰しやつたんだな。

ジョウン　それから、ランスの大伽藍で皇太子様に即位させるやうにつて。

ロベエル　（喘ぎながら）即位、皇太子に——ちえつ。

ジョウン　それから英吉利軍をフランスから退去させるやうにつて。

ロベエル　（皮肉に）他に何か仰しやらなかつたかい。

ジョウン　（愛嬌よく）今んところはこれだけよ、有難う、殿様。

ロベエル　お前は、包圍を解くのは譯のない事で、牧場から牝牛を追ひ出す位のもんだと思つてゐるんだな。お前は、兵隊には誰でもなる事が出來ると思ふのか。

ジョウン　若し神樣がお味方して下さつて、あんたが悅んで神樣に命を委せるおつもりなら、大して難しい事だとは思へないわ。でも、兵隊さんつてみんな、そりや單純なのね。

ロベエル　（むつとして）單純だ！　お前は英吉利軍の戰爭してゐるのを見た事があるのか。

ジョウン　英吉利兵だつてやつぱり人間でせう。神樣はあの人達もあたし達も同じやうにおつくりになつたんだわ。でも、あの人達にはあの人達の國とあの人達の言葉をお授けになつたのよ。だから、あの人達が、あたし達の國へ侵入して、あたし達の言葉を使はうとするなんて、そりや神樣の思召ぢやないのよ。

ロベエル　誰がこんな馬鹿な事をお前の頭に注ぎ込んだのだ。兵隊と言ふものはめいめいの封建制度の領主に隷屬してゐるもので、その領主がバアガンディ公であらうと、英吉利王であらうと、フランス王であらうと、それは兵隊どもやお前の知つた事ぢやないのが、お前には分らないのか。兵隊どもの使ふ國語が何だらうと、それがどうしたと言ふんだ。

ジョウン　あたしにはあんたの仰しやる事がちつとも分らないわ。あたし達はみんな天の王樣にお仕へしてゐるんだわ。そして、あの方があたし達に國や言葉を下さつて、何時までもそれを失くしないやうにと仰しやるのよ。若しさうでないとしたら、戰爭で英吉利人を殺すのは人殺しぢやなくつて。そして、殿樣、あんたなんかは一番恐ろしい地獄の火の中にゐる譯だわ。あんたの封建制度の君主に仕へる務なんか考へないで、神樣に仕へる務のことをお考へにならなくちやいけないわ。

ブウランジエ　もう駄目だよ、ロベエル。君はそんな風に事毎にこの娘に遣り込められるんだ。

ロベエル　この娘が！　聖ドウニも御照覽あれ。今に分るよ。（ジョウンに）我々は神樣の話をしてゐるんぢやない。實際問題を話してゐるんだ。もう一度尋ねるが、お前は英吉利軍の戰爭してゐるのを見た事があるか。奴等が掠略を恣にし、家を燒拂ひ、一地方を荒野にしてしまふのを見た事があるか。惡魔よりも黑かつたと言ふ黑王子（ブラックプリンス）、卽ち英國王の父の話を聞いた事がないのか。

ジョウン　怖がらなくともいいのよ、ロベエル——

ロベエル　畜生、わしは怖がりやしないよ。それに、誰の許を得てわしをロベエルなんて呼ぶのだ。

ジョウン　あんたは神様の御名に於て教會でさう呼はれてゐるんでせう。他の名前はみんな、あんたのお父さんか、御兄弟か、他の人の名前だわ。

ロベエル　ちえつ！

ジョウン　まあお聞きなさいよ、殿様。ドムレミイでは、あたし達は英吉利軍を避けて、隣り村へ逃げなくちやならなかつたのよ。ところが、英吉利兵が三人、負傷して後に取り殘されてゐたの。あたし、この三人の可哀さうなゴッダムとすつかりお友達になつたの。あの人達、あたしの半分も力が無いのよ。

ロベエル　何故ゴッダムと言ふのか知つてゐるか。

ジョウン　いゝえ、知らないわ。みんながゴッダムと言つてるんだもの。

ロベエル　そいつあ、奴等は何時も自分の魂が地獄に落ちるやうにと神様にお祈りしてゐるからだよ。ゴッダムと言ふのは、奴等の言葉ではさう言ふ意味なんだ。お前、それをどう思ふ。

ジョウン　神様はあの人達にもお慈悲をかけて下さるわ。あの人達だつて國へ歸れば、神様の良き御子として振舞ふでせう。神様は、あの人達のためにその國をおつくりになつたのだし、その國のためにあの人達をおつくりになつたんだもの。あたし、黑王子の話を聞いたわ。王子がこの國の土に觸れると、忽ち惡魔が取りついて、あの方を黑鬼にしてしまつたんだわ。でも神様があの方のためにおつくりになつた國にゐれば、あの方だつていゝ人なんだわ。何時だつてさうよ。若しあたしが神様の御心に抗つて、英吉利へ行つて、英吉利を征服し、其處に住んで、其處の言葉を話さうとするなら、惡魔があたしに取つつくでせうよ。その上、年をとつてから、自分のなした惡事を憶ひ出すと、屹度慄え上つてしまふわ。

ロベエル　さうかも知れない。然し、惡魔になればなる程、戰爭が強くなるんだぜ。だから、ゴッダムの奴、今にオルレアンを占領するだらう。お前なんか喰止める事は出來やしないよ。お前のやうな人間が一萬人ゐたつて駄目だ。

ジョウシ　あたしのやうな者が千人ゐれば、英吉利軍を喰止める事が出來るわ。神様のお味方があれば、十人だつて喰止める事が出來るわ。（彼女は凝乎としてゐるのもどかしげに立上つて、

彼に近寄り、この上靜かに坐つてゐる事が出來ない樣子である）あんたにはお分りにならないのよ、殿樣。我軍が何時も負けるのは、怪我をせぬやうに、怪我をせぬやうにと戰爭してゐるからだわ。怪我をしない一番の近道は、逃げる事ですからね。フランスの騎士達と來ちや、身の代金で儲けるお金のことばかり考へてゐるんだわ。あの人達には、殺すか殺されるかが大事なことではなくて、お金を遣るか取るかが大事なのよ。でもあたしは、神樣の御心がフランス中に行はれるやうに、みんなに戰爭する事を敎へてやるわ。さうすれば、あんなゴツダムなんか羊のやうに追つ拂つてしまへるのよ。あんたやボリイの命のあるうちに、フランスの土地には英吉利兵の一人もゐなくなる日が來てよ。そして、封建的な英吉利の王樣ではなく、神樣のおきめになつたフランスの王樣が、たつた一人この國をお治めになる日が來てよ。

ロベエル　（プウランジエに）こいつあみんな讒言かも知れないぜ、ボリイ。だが、軍隊の奴、それを眞に受けないもんでもないぜ。僕達が何と言つたつて、奴等に戰爭する氣を起こさせる事は出來ないんだが。皇太子までが眞に受けないもんでもない。若しこの女があの皇太子に戰爭する氣を起こさせる事が出來るなら、誰にだつて起させる事が出來るわけだなあ。

プウランジエ　ものは試しだ、やつてみたつて害にはなるまい。どうだ、やつてみては。それにこの女には何處か不思議なところがある——

ロベエル　（ジョウンの方へ振向いて）さあ、わしの言ふ事をよく聞け。そして（必死となつて）わしの考へてゐる間、口を出しちやならんぞ。

ジョウン　（柔順な女生徒のやうに、再び腰を下ろして）はい、殿樣。

ロベエル　お前に命令するが、この方とそのお友達三人の警護の下に、お前はこれからシノンへ行くのだ。

ジョウン　（歡喜に輝いて、兩手を握りしめながら）まあ、殿樣！　あんたの頭の周りには、聖者のやうに後光が一ぱい射してゐるわ。

プウランジエ　さて、どんな風にしてこの娘を皇太子に拜謁させたらいゝだらうか。

ロベエル　（寧ろ不安さうに、後光が射してゐるのかときよろきよろしてゐたが）さあ、わしには分らないな。一體この女はどういふ風にしてわしの面前へ遣つて來たのだ。若し皇太子がこの女を近づけないなら、あいつ、思つたよりも立派なところがある譯だ。（立上つて）わしがこの女を

シノンへ遣さう。さうすれば、この女は、わしから派遣されて來たと言つて差支ないのだ。後はどうとも成行次第だ。わしにはこれ以上の事は出來ん。

ジョウン　ぢや衣裳は！　兵隊の装をしてもいゝでせう、ね、殿様。

ロベエル　好きなやうにするがいゝ。わしはこの事件にはこれ以上關係しないから。

ジョウン　（思がかなつたのでひどく昂奮して）さあ行きませう、ボリイ。（躍び出してゆく）

ロベエル　（プウランジエの手を握つて）ぢや、さようなら、君、俺は大きなやまをはつた譯さ。こんな事の出來る奴は、さう澤山あるまいよ。だが、君の言ふやうに、あの女には何處か不思議なところがあるなあ。

プウランジエ　全く不思議なところがあるよ。ぢや、さようなら。（去る）

ロベエルは、氣違ひ女の、而もおまけに自分より社會的に劣つた奴に馬鹿にされたのではないかどうかと、心甚だ隱かでなく、頭を掻いて、ゆつくりと戸口のところから歸つて來る。

賄方が籃を手にして駈込んで來る。

賄方　殿様、殿様――

ロベエル　どうしたんだ。

賄方　牝鷄の奴、氣違ひのやうに卵を生んでゐるんです、五ダアスも！

ロベエル　（痙攣するやうに硬くなつて、十字を切り、唇も青褪めて言葉を發する）天にましますクリスト。（聲高に、然し息をきらして）あの女はまさしく神様のお使だ。

第二場

ツウレエヌのシノン城。城中の玉座のある部屋の一部を、幔で距ててしつらへた控の間。ランスの大僧正と、内大臣のラ・トレムイユ閣下とが、皇太子のお出ましを待つてゐる。大僧正は、齢五十に近く、肥滿した政治家型の僧正で、威壓的な態度の外には何處にも僧侶らしいところが無い。内大臣は身體の巨大な、傲慢な人間で、まるでワインスキン(家畜の皮を剝いで原型の儘でつくつた葡萄酒袋)のやうである。時は一四二九年の三月八日の午後晩くである。大僧正は威儀正しく立つてゐるし、内大臣は、その左手に、不機嫌極まる樣子でぶり〳〵してゐる。

ラ・トレムイユ　我々をこんなに待たせておくなんて、一體全體皇太子はどういふ氣なんだ。あんたがまるで石像のやうに我慢强く立つてゐられるのには、全く敬服の外はない。

大僧正　御覽の通り、わたしは大僧正だ。大僧正なんて、いはば一種の偶像だ。とにかく、落著きはらつて、馬鹿なことを辛抱强く我慢する修業をしなきやならないのだ。まあ内大臣、それに、君をそんなに待たせておくのは皇太子たるものの特權ぢやないかな。

ラ・トレムイユ　あんな皇太子なんか呪はれてゐろだ！　まあ大僧正の前でこんな言葉を口にしちや何だか。あれがわたしからどれぐらゐ借金してゐるか御存知かな。

大僧正　わたしから借りてる借金よりずつと多いだらう。さうあるべきだ。あんたはわたしなんぞより遙かに金持だからな。だが、皇太子はあんたの財力の許す限り借りたらしいな。わたしからもその通りだ。

ラ・トレムイユ　二萬七千。とうとそこまで引つ張られた。掛値なし、正味二萬七千。

大僧正　その金をすつかりどうしたんだらう。皇太子と來ちや、わたしが牧師補にくれてやりさうな著物さへ有つてゐないんだ。

ラ・トレムイユ　それに、けちな鷄や羊肉の切つぱしばかり食つてゐる。わたしの財布の底まではたかせて借りる癖に、その金の使ひ途がちつとも外へ現はれないんだ。(小姓が戸口へ現はれる)とうと遣つて來たな。

小姓　いいえ、閣下、殿下ではございません。ド・レエがおいでございます。

ラ・トレムイユ　青髯の若僧か。何だつて又、取次ぎなんかさせるんだ。

小姓　ラ・ヒイル將軍も御一しよでございます。何か事があつたやうに思はれます。

ジル・ド・レエがはひつて來る。彼は敏捷で沈著な二十五歳の青年。髯を綺麗に剃つた宮廷中で、少し縮れた髯を青く染めて、その贅澤さを樂しんでゐる男である。彼は努めて愉快さうにしようと心懸けてゐるが、自然な愉快さが缺けてゐる。そして實際愉快ではないのである。事實、十一年程後に教會に公然と反抗した時、恐ろしく殘忍なことから快樂を得ようとした咎で、絞首にされるのである。然し、今迄のところでは、絞首臺に登るやうなところが影にも見えない。彼は陽氣さうに大僧正に近づく。小姓は退出する。

青髯　御身の忠實なる羊でござる、大僧正。今日は、閣下。ラ・ヒイルに何事が勃發したか御存知ですか。

ラ・トレムイユ　惡たれ口を叩き過ぎて痙攣でも起したんだらう。大方そんな事だらう。

青髯　いや、大違ひ、まるで反對です。ツウレエヌでたつた一人の、惡たれ口にかけてはあの男より上手の、惡口屋のフランクの奴が、或兵士から、そんな言葉は死ぬ間際にだつて使つてはいけないぞ、と注意されたのです。

大僧正　死ぬ間際ばかりではない、何時だつていけないさ。だが、惡口屋のフランクはほんとうに死にかけてゐたのか。

青髯　さうなんですよ。あいつ、丁度その時井戸に落つこちて、水膨れになつちまつたんです。

ラ・ヒイルの奴、吃驚仰天、正氣を失つてをります。

ラ・ヒイル將軍はひつて來る。彼は武骨一點張りの男で、宮廷の禮儀作法を辨へず、明かに武人の態度しか知らない。

青髯　丁度内大臣と大僧正に話してゐたところだ。大僧正は、君を神に見放された男だと仰しやるのだ。

ラ・ヒイル　（青髯の傍を大股に通過ぎて、大僧正とラ・トレムイユの間に立塞がつて）いや冗談事ぢやありません。我々が考へてゐたよりずつと惡いんです。あれは兵士では無くて、兵士の服裝をした天使でした。

大僧正、内大臣、青髯　（一しよに叫ぶ）天使だ！

ラ・ヒイル　さうです、天使です。あの女はたつた六人のものを引連れて、あらゆるものを突破

し、バアガンデイ人や、ゴツダムや、脱走兵、追剝、その他種々様々の奴の間を通過して、シャンパニュから遙々遣つて來たのです。田舍の百姓以外誰一人あいつに會つた者は無いとの事だ。拙者はあの一行の一人であるド・ブウランジェと知合ですが、あの女は天使だと言つてゐます。若し拙者が二度と呪の言葉を口にしたら、拙者の魂が永久に地獄へ墮ちても構ひません。

大僧正　それはそれは、大層信心深い事を言ひ出したもんだな。

小姓　殿下の御出ましでございます。

一同その聲でお役目的に直立する。皇太子は一葉の紙を手にして帳を開いてはひつて來る。彼は二十六歳、父王の薨去後まさしくシャルル七世であるが、まだ戴冠式を濟ましてゐない。彼は肉體的に貧弱な青年で、その上、髯を剃り落し、頭髮を殘らず頭巾類で包み隠す當時の流行のために、一層風采を下げてゐる。眼は小さく細く、目と目の間が狹い。長い鼻はのつぺりと、厚くて短い上唇の上に垂れ下つてゐる。その表情たるや、始終蹴られ通しで、その癖惡戯で仕樣のない手におへない小犬のやうである。然し、彼は下品でもなく馬鹿でもない。人を食つたヒュモアを有つてゐて、他人との應接にも立派に自分と言ふものを見せてゆく。現在のところ、新しい玩具を貰つた子供の

やうにはしやいでゐる。彼は大僧正の左手へゆく。青髯とラ・ヒイルは帳の方へ退く。

シャルル　ねえ、大僧正、ロベエル・ド・ボオドリクウルがヴオクウルウルから何と言つて寄越したか知つてゐるかい。

大僧正　（人を馬鹿にしたやうに）わたしは、玩具なんてどんなに珍しいものでも興味はありませんよ。

シャルル　（むつとして）玩具なんかであるもんか。（眼れつ面で）然し、僕は君に興味を有つて貰はなくとも結構困りやしないんだよ。

大僧正　殿下、用もないのにさうお腹立ちになるもんぢやありません。

シャルル　有難う。君は何かと言ふとすぐお説教と來るね。

ラ・トレムイユ　（荒つぽく）不平はもう澤山。そこに有つてゐるのは何かね。

シャルル　何だらうが、君の知つた事ぢやないよ。

ラ・トレムイユ　わたしは職務上、あんたとヴオクウルウルの守備兵との間にどんな通信があるか知つておく必要があるんです。

彼は皇太子の手から書面をひつたくつて、それを讀み始めるが、どうもうまく讀めないので、指で文字を辿りながら、一字一字綴つてゆく。

シャルル　（口惜しさうに）君達はみんな、君達の好きなやうに僕を取扱つていいと思つてゐるんだね。そりや僕は君達に借金はしてゐるし、戰爭にかけちやからつきし駄目さ。然し、僕の血管には王樣の血が流れてゐるんだぜ。

大僧正　それもいささか疑はしいのですよ、殿下。あんたをシャルル賢王の孫だとは殆んど誰一人認めませんからね。

シャルル　祖父さんの話なら、聞くのはもう澤山だ。祖父さんと來ちやあんまり賢こ過ぎて、祖先傳來の智慧の蓄へを五代分すつかり使ひ果してしまつて、僕をこんな馬鹿にして、君達みんなからいぢめつけられ輕蔑されるやうにしてくれたのさ。

大僧正　まあ我慢なさるんですね。そんなに癇癪を起すのは見好いもんぢやありませんよ。

シャルル　又お說教か。有難うよ、成程君は大僧正だが、聖者も天使も君のところへ遣つて來ないなんて、實にお氣の毒千萬な話さ。

大僧正　何と仰せられる。

シャルル　あはは！　あの空威張り屋に聞いて見るがいい。（ラ・トレムイユを指す）

ラ・トレムイユ　（憤然として）お默んなさい。聞えますか。

シャルル　ああ、聞えるとも。さう怒鳴らないでもいいぢやないか。御殿中響き渡るよ。何故君は、英吉利軍のところへ出掛けて行つて、その聲で怒鳴り立てて、僕のために奴等を打負してくれないんだい。

ラ・トレムイユ　（拳を振上げて）この若僧が——

シャルル　（大僧正の陰へ逃げ込んで）僕に向つて拳を振げ上るのはよくないぜ。そいつあ大逆罪だよ。

ラ・ヒイル　まあ、お靜かに、公爵。お靜かに。

大僧正　（決然たる態度で）まあ、まあ、そんな事をしたつて何の役にも立ちやしない。內大臣、後生だ、後生だ、物の秩序は或點まで保たなくちやいけない。（皇太子に）ところで殿下、あんたは御自分の國を治める事が出來ないなら、せめて御自身だけでも何とかなさらなくちや。

シャルル　又お説教か。有難うよ。

ラ・トレムイユ　（大僧正に書面を手渡しながら）さあ、この忌々しい手紙を讀んでくれ給へ。あいつのお蔭で頭の血が煮えくり返る。字も何も區別がつきやしない。

シャルル　（出て來て、ラ・トレムイユの左の肩越しに覗きこんで）好ければ僕が讀んであげようか。僕なら讀めるぜ。

ラ・トレムイユ　（この嘲罵を受流して、烈しい嘲笑を以て）ええ、さやうでいらせられますとも。精々で手紙を讀む位があんたには適任でせう。どうだ、すつかり讀めたかね、大僧正。

大僧正　わたしはド・ボオドリクウルをもう少し常識のある男かと思つてゐた。あいつ、此處へ田舍の氣違ひ娘を寄越して——

シャルル　（口を挾んで）いや、聖者を寄越すんだよ、天使をさ。そして、あの娘は僕のところへ遣つて來るんだよ、王樣である僕んところへさ。君んところへ來るんぢやないよ、成程君は有難い坊さんだが、大僧正の君んところぢやないよ。君達には分らなくとも、あの娘には王樣の血統（ちすぢ）をちやんと分つてゐるんだ。（彼は青髯とラ・ヒイルの間の帳のところまで、容態ぶつて歩いて

ゆく）

大僧正　あなたはあんな賤しい氣違ひ女にお會ひになるべきではありません。

シャルル　（振向いて）でも、僕は王樣だぜ。僕は會ふよ。

ラ・トレムイユ　（荒っぽく）ぢや、あの女があんたに會ふべきではない。そんな事が許されませんん。

シャルル　僕は會ふつもりだと言つてるぢやないか。僕は何と言はれたつて思ひ通りにするよ——

青髯　（彼を笑つて）駄々つ子だな。あなたの賢明なお祖父さんは何と仰しやるでせう。

シャルル　そんな事を言ふのは、君の無智なのを曝け出すやうなもんだぜ、青髯君。お祖父さんには聖者が一人ついてゐて、その聖者はお祈りすると何時でも空中に浮び上つて、お祖父さんの知りたいと思ふ事を何でも告げてくれたんだよ。お父さんにも、マリイ・ド・マイエとガスク・オブ・アヴィニョンの二人の聖者があつたんだよ。これは僕の一族みんながさうなんだ。だから、僕は君が何と言つたつて構ひあしない、僕も僕の聖者を有つつもりだよ。

大僧正　あんな奴が聖者なもんですか。あいつは品位ある女の仲間入りさへ出來ないのだ。あの女は女の着物を著てゐやしない。軍人の裝をして、兵士と一しよに田舍を馬で乘り廻してゐるのだ。そのやうな女を殿下の宮中へ入れて差支ないとお考へなさるかね。

ラ・ヒイル　ちよつと暫く。（大僧正に近づいて）女の癖に、軍人同樣鎧を著てゐると言はれるのですか。

大僧正　さやう、ド・ボオドリクウルの手紙にはさう書いてある。

ラ・ヒイル　だが、畜生、な、なんと言ふ――おゝ、神樣、お許し下さい、こんな言葉を口にしたのを――聖母樣やあらゆる聖者樣に誓ふ、それこそまさしく、あの惡口屋のフランクが呪の言葉を口にしたので、死を以て罰しられた天使に違ひない。

シャルル　（勝誇って）それ見給へ！　奇蹟だ。

ラ・ヒイル　若しあの女に抗ふと、我々すべて死を以て罰せられるかも知れないのだ。後生です、大僧正、あなたのなさる事に氣をつけて頂きたい。

大僧正　（嚴しく）馬鹿な！　誰一人死を以て罰せられたものはありはしない。呪の言葉を口に

するので百遍も叱られた横着者が、醉つぱらつて、井戸へ落ちて溺れ死んだつて、そりや偶然の暗合だ。

ラ・ヒイル　偶然の暗合とはどんなものか、拙者は一向に存じません。拙者が間違ひなく知つてゐるのは、あの男が死んだと言ふ事、そして、あの女があいつにもうおつゝけ死ぬぞと言つたといふ事です。

大僧正　我々はみんなそのうち死ぬんだよ、將軍。

ラ・ヒイル　（十字を切って）そんな事はわたし厭です。（彼は會話から身を退く）

青髯　我々は、あの女が天使であるかないか、たやすく見分ける事が出來ますよ。どうです、一つ、あの女が遣つて來た時、わたしが皇太子になるやうに仕組んで、あの女がそれを見破るかどうか見ようぢやありませんか。

皇太子　さうだ、そいつあ贊成だ。若しあの女が王樣の血統を見分ける事が出來ないなら、僕はあの女なんかに何の用があるもんか。

大僧正　聖者をつくるのは教會の仕事だ。ド・ボオドリクウルは自分の仕事に氣をつけてゐれ

ばいゝのだ、牧師の職責を奪ふなんて沙汰の限りだ。わたしは言つておくが、あの女を入れる事は斷じて罷りならん。

青髯　然し、大僧正――

大僧正　（嚴然と）わたしは教會の名に於て言ふのだ。（皇太子に）あなたは、あの女を入れても差支ないと强ひて仰せられるのか。

シャルル　（威嚇されて、然し脹れっ面で）あゝ、若し君がこれを破門になるやうな事件にするなら、僕はもう何も言ひやしないよ、無論ね。でも、僕はまだ手紙のお終ひを讀んでないんだ。ド・ボオドリクウルは、あの女はオルレアンの圍を解いて、英吉利軍を打破るだらうと言つてゐるぜ。

ラ・トレムイユ　馬鹿な！

シャルル　君は何かと言ふと威張つてゐるが、オルレアンを救へるのかい。

ラ・トレムイユ　（野蠻に）面と向つて、二度とそんな事を言ふと容赦しないぞ。わたしは、あんたがこれ迄にした戰爭よりも、これからする戰爭よりも、ずつと澤山戰爭してゐるんだ。然し

到る處へ行くと言ふ譯にはゆかないのだ。

シャルル　さう、そいつあ事だからね。

青髯　（大僧正とシャルルの間へ來て）オルレアンで我軍を指揮してゐるのは、ジャック・デュノアです。あの勇敢なデュノア、あの男前のいゝデュノア、並ぶものなき不敵のデュノア、天下のあらゆる婦人の戀慕の的、あの美しい私生兒（バスタアド）。あのデュノアさへ出來ない事を、たかが田舍娘のあの女に出來ようなどとは思ひもよらない事です。

シャルル　ぢや、何故あの男は圍を解かないんだい。

ラ・ヒイル　それは風向きが惡いのです。

青髯　オルレアンでどうして風向が邪魔になるんだい。海峽の上ぢやあるまいし。

ラ・ヒイル　いや、ロワル河のほとりだからだ。そして英吉利軍が橋のたもとを占領してゐるのだ。デュノアは敵軍の背後を突くには、部下を船に乘せて河を横切つて遡らなければならない。ところが、風の畜生、反對の方へ吹きまくるので、それが出來ないつて譯さ。あいつ、西風が吹くやうにと坊主に金を拂つてお祈りして貰ふのに飽々してゐるのさ。デュノアに必要なのは

奇蹟なんだ。あの女が悪口屋のフランクに對してなした事は奇蹟ではないと、あんたは仰しやる。だが、どうだつていゝぢやありませんか、とにかくフランクはやつつけられたんです。若しあの女がデュノアのために風向きを變へても、それは奇蹟ぢやないかも知れない。然し、英吉利軍を打破る事が出來る譯です。試してみたつて、何も損にはならないぢやありませんか。

大僧正　（手紙をすつかり讀み終つて、前よりは考深くなつて）ド・ボオドリクウルが非常な感動を受けたのは事實らしい。

ラ・ヒイル　ド・ボオドリクウルと來ちや評判の大馬鹿です。然し、あの男は軍人だ。若しあいつがあの女の力で英吉利軍を破る事が出來ると考へるなら、軍隊の他の連中もやつぱりさう考へるでせう。

ラ・トレムイユ　（躊躇してゐる大僧正に）まあ、やらせて見たらどうだ。デュノアの部下は、誰かが新しい勇氣でも與へてやらない以上は、デュノアがゐたつて町を見棄てゝしまふだらう。

大僧正　あの女に何か重大な事をやらせるには、先づ教會があの女を取調べなければならないのだ。然し、殿下がお望みとあれば、この宮中へ連れて來るがいゝ。

ラ・ヒイル　わたしがあの女に會つて、さう言つて來よう。（出てゆく）

シャルル　僕と一しよにおいで、青髯。僕が誰だかあの女に分らないやうに、一つ仕組んでみようぢやないか。君が僕のやうなふりをするんだ。（帳から出てゆく）

青髯　そんな眞似をするなんて！　おゝ、聖マイケル樣！（皇太子の後に從ふ）

ラ・トレムイユ　あの女には見つけ出せるか知ら。

大僧正　無論見つけ出すよ。

ラ・トレムイユ　何故。どうしてあの女に分るんだ。

大僧正　シノンでは誰一人知らないものはないのだ、あの女だつて知つてゐるだらう——皇太子と言ふのは宮中では一番貧弱な容貌で一番粗末な身裝（みなり）をしてゐる事や、青い髯をつけた男はジイル・ド・レエだ位のことはね。

ラ・トレムイユ　わたしはさうは思はなかつた。

大僧正　あんたは、わたし程には奇蹟には慣れてゐないのだ。奇蹟なんてわたしの職業の一部分だ。

ラ・トレムイユ　（當惑し、いささか反感を起して）だが、それぢやちつとも奇蹟になりやしないぜ。

大僧正　（落著き拂つて）何故だね。

ラ・トレムイユ　ぢや訊くが、奇蹟とは何だね。

大僧正　奇蹟とは、そりや君、信仰を創り出す事件さ。それが奇蹟の目的であり性質であるのだ。奇蹟は、それを目擊する者には非常に不思議に見えるかも知れないが、それを行ふ者には何でもない事なんだ。だが、そんな事はどうでもいゝ事で、信仰を確立するか創り出すかすれば、それが眞の奇蹟なんだ。

ラ・トレムイユ　ぢや、假令それが詐欺であつてもいゝのかね。

大僧正　詐欺とは人を僞ることだ。信仰を創り出す事件は人を僞りはしない。だから、それは詐欺ではなく、奇蹟だ。

ラ・トレムイユ　（當惑して頭すぢを掻きながら）まあ、大僧正の仰しやる事だ。間違ひはないだらう。わたしにはどうも信じられない。わたしは僧侶ぢやないから、かう言ふ事はどうも理解

出來ない。

大僧正　君は僧侶ぢやないが、外交家で軍人だ。君は人民に戰時稅を拂はせたり、兵隊には命を投げ出させてゐるが、若し、彼等が實際の事情は自分達の思つてゐるよりもまるで違つてゐるのを知つたなら、そんな事が出來るだらうか。

ラ・トレムイユ　いや、とんでもない、どうも日暮までには大變なことが持ち上るだらう。

大僧正　みんなに本當のことを話してやるのは、全く譯のない事ぢやないか。

ラ・トレムイユ　何だと、あいつ等はそんな事を信じるもんか。

大僧正　いかにもさうだ。君は身體保護のために人間を治めなければならんやうに、教會は靈魂保護のために人間を治めなければならない。さて、さうするには、教會も君と同じ遣り方をしなきやならんのだ。即ち、詩で以てあいつ等の信仰を培ふのだ。

ラ・トレムイユ　詩だと！　わたしはそんなものはぺてんだと言ひたい。

大僧正　君、そりや違ふよ。譬話は、それが決して起つた事のない事件を書いてゐるからつて、嘘だとは言へない。奇蹟は——常にとは言はないが——度々、非常に單純で罪のない仕組にな

つてゐて、それに依つて僧侶が信者の信仰をかためゐるからつて、それは詐欺だとは言へまい。若しあの女が多くの家來の中から、皇太子を見つけ出しても、わたしにとつては奇蹟でも何でもないのだ。と言ふのは、わたしにはその譯が分つてゐるし、わたしの信仰も増しはしないだらうから。然し他の人間はどうかと言へば、超自然的なものゝ戰慄を感じて、忽ち神の貴さを識つて己の罪深い肉體を忘れるならば、それは奇蹟、而も有難い奇蹟になるのだ。その上、あの女自身が誰よりも感動するやうな事になるだらう。あの女は、ほんとうにどうして皇太子を見つけ出したかも忘れてしまふだらう。若しかすると、君もさうかも知れないぜ。

ラ・トレムイユ　成程、ぢや、わたしも一つ悧巧になつて、あんた方の幾人位が神に仕へる大僧正で、ツウレエヌには狡猾極まる狐が幾人位ゐるか知りたいもんだ。さあ、行きませう、でないと茶番を見落してしまふ。わたしは、奇蹟か奇蹟でないか、それが見たいのだ。

大僧正　（暫く彼を引留めて）わたしは詐欺ぺてんが好きだなどゝ思つて貰つては困る。今、人間の心には新しい精神が起りかけてゐる、我々は一層廣い時代の曙に立つてゐるのだ。わたしはたゞの坊主で、人間を治めるべきでなかつたなら、わたしは聖者とか聖者の行ふ奇蹟なんぞ

よりは、アリストオトルやピタゴラスと共に自分の精神の平和を求めてゐたゞらう。

ラ・トレムイユ　一體全體ピタゴラスつて誰だ。

大僧正　この地球は圓くて、太陽の周りを廻つてゐると考へた聖人だ。

ラ・トレムイユ　何て大馬鹿だ！　眼が明いてゐても見る事が出來なかつたのか。

二人は帳から出てゆく。間もなく帳が引かれて、玉座のある間が奥まで見え、廷臣が大勢集つてゐる。右手、一段高きところに王と后の玉座の二個の椅子。青髯は國王になりすまして、容態ぶつて玉座に立つてゐる。彼も廷臣達もこの冗談を明かに面白がつてゐる。玉座の背後の壁には、帳のかかつたアアチ型の戸口。然し、表口は部屋の反對の側にあつて、武裝した兵士で護られてゐる。そこから玉座に通ずる道には、廷臣が列をなして立並んでゐる。シャルルは部屋の中央あたり、この道の中にゐる。ラ・ヒイルはその右手。大僧正は、その左手、玉座近くに坐を占めてゐる。ラ・トレムイユはその反對の側に立つてゐる。ラ・トレムイユ公爵夫人は、王妃のふりをして、后の椅子に腰を下ろしてゐる。その傍には女官が一團をなして大僧正の背後に集つてゐる。

廷臣達の喋り聲が騷がしいので、小姓が戸口に現はれたのに誰も氣がつかない。

小姓　公爵——（誰も聞き入れない）え、公爵——（お喋りが續いてゐる。耳を傾けさす事が出來ない

ので業を煮やして、すぐ近くにゐる兵士の矛をひったくって、それで床を叩く。お喋りが止む。一同默り込んで彼を見る）申上げます！（矛を兵士に返して）公爵ヴンドオムがジョウンなる娘を連れて殿下に拜謁を願つてをります。

シャルル　（指を唇にあてて）しいつ！（すぐ近くの廷臣の後に隱れて、成行如何にと覗いてゐる）

青髯　（嚴かに）その娘を玉座近うへ呼べ。

ジョウンは兵士の服裝をして、斷髮にした髮を、顏の周りに厚く垂らしながら、羞にかんだ無口の一貴族に導かれてはひって來たが、その貴族から離れて立止り、あたりを見廻して熱心に皇太子を探す。

公爵夫人　（すぐ近くに侍る女官に向って）まあ、御覽、あの髮を！

女官達一同、思はずどつと笑ひ出す。

青髯　（笑をこらへ、手を振って陽氣に笑ってゐるのを制して）しいつ——しいつ！　婦人達！　これ、婦人達！

ジョウン　（少しも狼狽しないで）こんな風にしてゐるのは、あたし軍人だからですの。皇太子

は何處なの？

ジョウンが玉座へ近づくにつれ、廷臣一同くすくす笑ひ出す。

青髯　（柔和な樣子で）皇太子の面前だぞ。

ジョウンは暫く彼を疑ふやうに眺め、確めようとして見上げ見下ろして細かに調べてゐる。死のやうな沈默。一同彼女を見守ってゐる。冗談だと言ふのが分った樣子が次第に彼女の顏に現はれて來る。

ジョウン　およしなさいよ、青髯さん。からかつたって駄目よ。皇太子は何處。

どつと笑ひ聲が起る。ジイルは降參したと言ふ身振をして、一しよに笑って、玉座から躍び下りてラ・トレムイユの傍に立つ。ジョウンも亦、齒をむき出して笑って、振り返り、廷臣の列を順々に探し歩き、すぐと列中へ潛り込んで、シャルルの腕を摑んで引っ張り出す。

ジョウン　（手を放し、ひょいと頭を下げて挨拶して）お優しい皇太子樣。あたしが此處へ參つたのは、英吉利軍をオルレアンから、このフランスから追ひ出して、フランスのまがひなき王樣の必ず卽位遊ばすランスの伽藍で、あなたを位におつかせ申すためでございます。

皇太子　（勝誇つて、廷臣一同に）どうだ、みんなの者、この女には王様の血筋が分るのだ。僕が父上の子でないなんて、もう誰も言へやしないぞ。（ジョウンに）でも、君が僕をランスで位につけたいと言ふんなら、僕ではなく、大僧正に話しなくちや駄目だよ。そら、大僧正は——（大僧正はジョウンの後に立つてゐる）そこだ！

ジョウン　（素早く振向き、いたく感慨に打たれて）おゝ、お上人様。（彼の前に兩膝ついて、首を垂れ、敢て仰ぎ見ようとはしない）お上人様、あたしはほんの詰らない田舎娘、そしてあなたは神様御自身の祝福と光榮を一身に集めておいでになる方でございます。でも、あなたの御手で觸つて頂いて、あなたの祝福を授けては下さいませんか。

青髯　（ラ・トレムイユに囁く）あの古狐め、顔を赤くしてゐるぜ。

ラ・トレムイユ　こいつも奇蹟だ。

大僧正　（感動して、ジョウンの頭に手を載せて）あゝ、お前は宗教に戀してゐるのだ。

ジョウン　（吃驚して、大僧正を見上げて）あたしが？　そんな事は考へてもみませんでした。宗教に戀するつて、いけない事でせうか。

大僧正　いけなくはないがね。然し危險だよ。

ジョウン　（立上り、向う見ずな幸福さにその顔を日の照るやうに輝かしながら）天國でない限り、危險はこの世の常ですわ。おお、お上人様、あなたは大した力、大した勇氣をあたしに與へて下さいました。ほんとうに大僧正つて何て素晴らしいお役目でせう。

廷臣一同無遠慮に微笑を浮べ、中にはくすくす笑ふものさへある。

大僧正　（きつとなつて身を引締めて）諸君、この娘の信仰は諸君の輕薄な上つ調子へのいゝ見せしめである。不肖わたしは何の値打もない人間ではあるが、君達の笑ひさざめきは恐ろしい罪でありますぞ。

一同首垂れる。死のやうな沈默。

青髯　大僧正、わたし達はこの女を笑つたのです。あなたぢやありません。

大僧正　何？　わたしの値打のないのを笑つたのではなく、この娘の信仰を笑つたのだと。ジル・ド・レエ、この娘は神を瀆したものはその罪のために溺れ死ぬと豫言したのですぞ——

ジョウン　（憂はしげに）いえ、そんな事が。

大僧正　（默つてゐろと言ふ身振をして）今度はわたしが豫言する、若し君が、何時笑ひ、何時祈るべきか辨へないならば、君はその罪で絞め首になるのだ。

青髯　お咎めを蒙るのは尤もです。わたしは殘念ですが、これ以上一言もありません。然し、わたしが絞首の罪に問はれると、あなたが豫言なさる以上は、わたしはもう誘惑に打克つ事が出來なくなるでせう。何故と申しますに、どうせ絞め殺されるものなら、うんと惡人になつてやれと言ふ氣持が絶えず起るだらうと思ひます。

一同これに氣を取直し、くすくす笑ふ。

ジョウン　（憤慨して）あんたは怠け者だわ、青髯さん。それに、大僧正に口答へするなんてほんとうに無禮だわ。

ラ・ヒイル　（大口開いてくつく笑つて）よく言つた、娘さん。うまいぞ。

ジョウン　（我慢が出來ないやうに大僧正に）まあ、お上人様、あたしが皇太子と二人きりで話が出來るやうに、この馬鹿な人達をあつちへ遣つて下さいませんか。

ラ・ヒイル　（機嫌よく）拙者はのみこみが早い。（挨拶して、踵を返して、出てゆく）

大僧正　さあ、皆さん。この娘は神の祝福を受けて來たのです。服從しなくてはならない。

廷臣一同、或者はアアチから、或者はその反對側から退く。大僧正は部屋を横切つて戸口の方へ行き、續いて公爵夫人に、ラ・トレムイユ。大僧正がジョウンの傍を通り過ぎた時、彼女は跪いて、大僧正の法衣の縁に心をこめて接吻する。彼は本能的にそれを拒絶するやうに頭を振つて、衣を掴き寄せて、出てゆく。ジョウンは跪いた儘、丁度公爵夫人の通り路に坐つてゐる。

公爵夫人　（冷やかに）どうぞ、通して頂戴。

ジョウン　（急いで立上つて、身をひいて）御免なさい、奥様、さあどうぞ。

公爵夫人通り過ぎる。ジョウンはその後を見送り、それから皇太子に嘶き聲で訊れる。

ジョウン　あの方、お后なの。

シャルル　いや、さうぢやない。自分でさう思つてゐるだけだ。

ジョウン　（再び、公爵夫人を後から睨と見詰めて）おゝ——おゝ——おほー（ジョウンはこの素晴らしく著飾つた婦人の姿に、目を見張つて驚いてゐるが、それは必ずしもお世辭ではない）

ラ・トレムイユ　（ひどく不愛想に）殿下、わたしの妻を愚弄しないで頂きたい。（去る。他の者は

既に退出してゐる）

ジョウン　（皇太子に）あのがみ〳〵屋のお爺さんは誰？

シャルル　あれはラ・トレムイユ公爵さ。

ジョウン　役目は何なの。

シャルル　あいつ、自分ぢや軍隊の指揮者を以て任じてゐるのさ。そして、僕が氣の合ふ友達をこさへると何時でも、あいつその友達を殺してしまふんだ。

ジョウン　何故、默つてそんな事をさしとくの。

シャルル　（むっとして、彼女の磁石のやうな引力から脱れやうとして、廣間の玉座のある方へ行き）どうして僕が留める事が出來るもんか。あいつ、僕をいぢめるんだよ。みんな寄つてたかつて僕をいぢめるんだよ。

ジョウン　あなた、怖いの。

シャルル　さうだ、僕は怖いんだ。そんな事を僕にとやかく言つたつて駄目だよ。圖體の大きいあの連中にとつちや、あれはあれでいゝのさ。僕には重くてとても著られさうにもない鎧や

僕には持上げるのさへ精一杯な劍をつけ、あの逞ましい筋肉の、あの怒鳴り聲の、あの怒りつぽい連中にはね。あいつ等は戰爭が大好きで、大概の連中は、戰爭してゐない時はしよつちゆう馬鹿な眞似ばかりしてゐるんだ。然し、僕は音無しい、分別のある人間だ。人を殺すなんて大嫌ひさ。僕はたゞ、一人で勝手にさせておいて貰ひたいんだ。僕は王樣になりたいなんて言つた事はありやしない。みんながさうさしたんだ。だから、若し君が「聖王ルイの御子、祖先傳來の劍を帶びて、我等を勝利に導き給へ」と言ふつもりだつたら、そんな事を言ふ口で、君のスウプでも冷ました方がましだよ。僕にはそんな事は出來やしないんだから。僕と言ふ人間はそんな風には出來ちやゐないんだ。それだけのことさ。

ジョウン　（鋭く、横柄に）まあ、馬鹿な事を。あたし達は初めはみんなさうよ。あたし、あんたに勇氣をつけてあげるわ。

シャルル　僕は勇氣なんかつけて貰ひたかないよ。僕は氣持のいい寢床で眠りたいんだ。やれ殺されるの、やれ怪我をするのと、しよつちゆびくびくして生きてゐるのは眞つ平だ。勇氣なんて他の奴につけてやるといゝよ。そして、戰爭にたんのうさしてやるがいゝ。でも、僕には

構はないでくれ給へ。

ジョウン　そりや駄目よ、シャアリイ。神様があんたにお指圖なさつた事を恐れずにやらなくちやいけないわ。若しあんたは王様になりそこなつたら、それこそ乞食になつてしまつてよ。他にこれと言つてあんたのなれるものはないんだもの。さあ！　玉座に坐つて見せて頂戴。あたし、それが見たかつたの。

シャアルル　命令は殘らず他の奴が發するのに、僕が王座に坐つたつて何になるもんか。だが、待てよ。（彼は玉座に坐る。いささか哀れを催す姿である）さあ、君の望通り王様が出來たぞ。この哀れな野郎を心ゆくまで御覽じろ。

ジョウン　あんたはまだ王様ぢやないわ。あんたはほんの皇太子よ。お側の者に迷はされないやうになさいよ。いくら衣裳を著飾つたつて、空つぽの頭はどうにもなりやしないのよ。あたし、人民を知つてるわ。あんたを養つてくれるほんとうの人民を。でも、人民達は、聖油を頭に注ぎ、ランスの伽藍で、神様に身を捧げて冠を戴くまでは、フランスの王様だとは思ひはしないのよ。それに、あんたは新しい着物が要るわ、シアヤリイ。何故、お后があんたのことを

ちやんとお世話なさらないの。

シャアルル　僕達はひどく貧乏なんだ。その上后と來ちや、遣りくりして殘す金をすつかり、自分の身のまはりにつけたがるんだ。それに、僕もあいつが綺麗な着物を着てゐるのを見るのが好きなんだよ。僕は何を着てゐようと構ひあしないさ。どうせ男つぷりが惡いんだから。

ジョウン　あんたには何處か好いところがあるわね。でも、それはまだ王様の好さぢやないわ。

シャアルル　今に分るよ。僕は見かけ程馬鹿ぢやないよ。僕はちやんと眼が開いてゐる。いい條約の一つは勝味のある戰爭を十遍するよりは値打のあるのを、僕はよく知つてゐるんだ。あんな戰爭一點張りの連中は、條約となると、戰爭で手に入れたものを殘らずなくしてしまふのさ。若し我々が條約を結ぶことが出來さへすれば、英吉利軍は屹度損をするに違ひない。奴等と來ちや、考へる事より戰爭する方がうまいんだから。

ジョウン　若し英吉利が勝てば、條約を決めるのは向うだわ。さうなつたら、神様、哀れなフランスをお救ひ下さい。あんたは厭でもおうでも戰爭しなくちや駄目よ、シャアリイ。あんたに勇氣をつけるために、先づあたしが行きませう。あたし達は勇氣を兩手で掴まなくちやいけ

ないの、さうよ、そして、兩手でそのお祈りをしなくちやいけないのよ。

シャルル　（王座から下りて、彼女の人を壓するやうな催促を脱れようとして、又部屋を横切つて向うへ行きながら）　まあ、神様やお祈の事を言ふのはよしてくれ。僕はしよつちゆお祈りしてゐる人間には我慢がならないんだ。すべき時にだつてお祈りするのは、どうもよくないもんだよ。

ジョウン　（彼を憫んで）まあ、可哀さうな子供ね、あんたは。あんたは生れてからまだお祈りした事がないのね。これぢや初めから教へなくちやいけないわ。

シャルル　僕は子供ぢやないよ。僕はもう大人で、而もお父さんだ。もう教へて貰ふことあないよ。

ジョウン　さうさう、あんたには坊ちやんがあつたのね。あんたがお亡くなりになればルイ十一世になる方がね。その坊ちやんのために戰爭しようとは思はないの。

シャルル　とんでもない。あいつ、憎らしい子供さ。僕を嫌ふんだ。あいつと來ちや誰でも嫌ふんだ。我儘なちびさ。僕は子供のことで氣を揉むなんて眞つ平だ。僕は父にもなりたくなきや、息子にもなりたくないよ。ことに聖王ルイの息子なんて眞つ平だ。僕は、君達みんながな

りたがつてゐるやうな立派なものには、ちつともなりたいとは思はないよ。僕は僕でゐたいんだ。何故、君は君のことを氣にかけ、僕の事は僕に委せておいてくれないんだい。

ジョウン　（再び輕蔑するやうに）自分の用事だけを氣にかけるのは、自分の體だけを氣にかけるやうなものよ。それは病氣になる一番の近道だわ。あたしの仕事つて何？　うちで母さんの手助けをすることなの。ぢや、あんたの仕事つて何？　小犬を可愛がつたり飴棒をしやぶつたりする事なの。あたしに言はすりや、そんな事は屑の屑よ。あたし達がしなければならないのは、神様のお仕事で、あたし達だけの仕事ぢやないのよ。あたし、神様があんたに下つたお口傳を持つてゐるの。それを怖れてあんたの心の臓が裂けようとも、あんたはそれを聞かなくちやいけないのよ。

シャルル　口傳なんてどうでもいいよ。でも、君は何か祕密を教へてくれる事が出來るのかい。何か病氣をなほす事が出來るのかい。鉛を金にするとか、それに似た事が出來るのかい。

ジョウン　あたし、あんたを王様にする事が出來るわ、ランスの伽藍でね。それは屹度、爲甲斐のある奇蹟だと思ふわ。

シャルル　若しランスへ行つて、戴冠式をあげるやうな事になれば、アンヌは新しい著物を欲しがるだらう。でも、著物なんて出來やしない。僕はこの儘だつて構ひやしないが。

ジョウン　その儘で！　何つてことです！　あたしの父の一番哀れな羊飼にも劣つてゐるのに。あんたは儀式の濟まないうちは、あんた御自身の土地であるこのフランスの正當な持主ではないのよ。

ジャルル　然し、僕はどの道自分の土地の正當な持主にはなれあしないよ。儀式を擧げたら、抵當の金が拂へるのかい。僕はこの土地を一坪のこらず抵當にして、大僧正とあの太つちよの威張り屋から金を借りてゐるんだ。僕は青髭にさへ借金があるんだ。

ショウン　（熱心に）シャアリイ、あたしはこの土地の生れで、この大地で働いてこんな力を得たのです。ほんとうにこの土地はあんたのもので、正しく治めて神様の平和が汎くゆき渡るやうにすべきもので、醉ひどれ女が子供の著物を質に置くやうに質屋へ抵當に置くべきものではありません。あたしは神様から遣はされて、あなたが伽藍の中で跪き、あなたの國をとこしへにとこしへに神様に恭々しく棒げ、神の執事、神の代官、神の兵士、神の召使として、この世

の最も優れた王様におなりになるやうにと申しに來たのです。さうすれば、フランスの土塊（つちくれ）まで、が神聖になり、フランスの兵士は神様の兵士となり、謀反人の諸侯達は神様に對する謀反人となるのです。そして、英吉利軍は地に跪いて、自分達の住むべき故郷へ安らかに歸してくれと嘆願するでせう。それとも、あなたは哀れな小ユダとなつて、あたしやあたしをお遣はしになつた神様を裏切りたいのですか。

シャルル　（とうと誘惑されて）ああ、若し僕に勇氣がありさへすれば！

ジョウン　あたしが屹度やります、やります、幾度でもやります、神様の御名に於て。さあ、賛成です、反對ですか。

シャルル　（昂奮して）思ひ切つてやつてみよう。だが、斷つておくが、僕には持ちこたへられないかも知れないよ。然し、思ひ切つてやつてみよう。まあ、見て居給へ。（表口のところへ走りよつて、叫ぶ）おおい！　戻つて來い、みんな。（反對側のアアチ型の戸口へ駈け戻りながら、ジョウンに）ねえ、君は僕の味方して、僕がいぢめられないやうに加勢してくれなくちやいけないよ。（戸口から）おい、みんな、やつて來ないか。（彼が玉座に腰を下ろすと、一同急いではひつて來

て、元の席につき、お喋りしながら不思議がつてゐる）もうかうなつちや後へひけなくなつたぞ。だが、構ふもんか。やつちまへ！（小姓に）おい、小姓、靜肅にしろと言つてくれ給へ。

小姓　（以前のやうに矛を以て、幾度も床を叩いて）國王陛下の御前です。御靜肅に。陛下のお言葉があります。（威丈高に）こら、お默りなさい。（沈默）

シャルル　（立上つて）僕は軍隊の指揮權をこの娘に與へた。娘はそれを好きなやうに用ゐていいのだ。（玉座を下りる）

一同吃驚する。ラ・ヒイルは悅んで、籠手で鋼鐵の股當を叩く。

ラ・トレムイユ　（威嚇するやうにシャルルの方へ振り向いて）何ですと。軍隊を指揮するのはこのわたしです。

ジョウン　（シャルルが思はずたぢろぐのを見、素早く彼の肩に手を置く）！

シャルル　（異樣な元氣を出して、その果が途方もない身振をして、内大臣の面前へ指を彈（はじ）いてみせる）！

ジョウン　これがあなたへの返答だ、がみがみ爺。（今こそ時到れりと見て、急に劍とさつと引き拔いて）神とその娘の味方する者は誰？　あたしと一しよにオルレアンへ赴く者は誰？

ラ・ヒイル　（我を忘れて、同じく劍を拔いて）神とその娘の味方だ！　さあ、オルレアンへ！

騎士一同　（熱狂的にラ・ヒイルの後に續いて）さあ、オルレアンへ！

ジョウンは、歡喜に輝き、神に感謝を捧げるために跪く。一同跪く。ただ大僧正は立つた儘手で祝福のしるしを與へ、ラ・トレムイユは、呪の聲を上げながら、ぐつたりとする。

第三部

ホルレアン。一四二九年の五月二十九日。當年二十六歳のデュノアがロワルの南岸、遠く上流下流を見渡す空地を行きつ戻りつしてゐる。地面には長槍が突立つてゐて、その先につけた細長い三形旗は、強い東の風に吹き流されてゐる。その傍には、ペンド・シニスタア の標章のついた楯が置いてある。彼は手には指揮棒を持つてゐる。彼は體格は良く、鎧を輕々と著てゐる。その廣い額と尖つた顎とのために、顔は等邊三角形をなしてゐて、それは既に働きあり責任を重ずる事を示し、氣取りもせず馬鹿げた幻想を追ふやうな事もない善良にして有爲の青年である事を物語つてゐる。彼の小姓は、地面に蹲つて、膝に肱を凭らし、頬杖ついて、退屈さうに流を見守つてゐる。時は夕暮である。主從共に、ロワル河の美しさにうつとりと心を奪はれてゐる。

デュノア　（暫く足を停めて、吹き流される小旗をちらと見上げて、懶さうに頭を振り、又歩き始める）西風、西風、西風よ。淫婦め、靡けばいゝ時に人を振り、振るべき時に靡くとは。白銀のロワルを吹き渡る西風よ。はて、どういふ言葉でロアルに韻を合せたものかな。（再び小旗を見上げ、

それに向つて拳を振り上げ）英吉利兵に身を賣つた風の賣女め、忌々しい奴め、變れ、變れ。西だ、西だ、西だと言ふに。（呻り聲を上げ、再び默つて歩を進める。然し、すぐ又始める）西の風、多情な風、移り氣な風、女女しい風、河向うから吹く僞りの風、お前はもう一度西から吹く氣はないのか。

小姓　（飛上りながら）そら。あすこだ。あ、あすこへ行く！

デュノア　（驚いて夢想から醒めて、熱心に）何處に？　誰が？　あの娘かい？

小姓　いゝえ、かはせみが。青い稻妻のやうに。あの茂みの中へはひりました。

デュノア　（恐ろしく絶望して）なあんだ、それだけのことか。忌々しい小僧つ子め。貴樣を河の中へたゝき込んでやりたいな。

小姓　（彼をよく知つてゐるので、怖れる樣子もなく）さつと閃いた青い色つたら、恐ろしく綺麗でした。そら！　又、一羽とんでゆく！

デュノア　（熱心に川縁へ走り寄つて）何處に？　何處に？

小姓　（指さして）葦の中を通つて。

デュノア　（悦んで）成程。

二人は鳥の消え去るまで、飛びゆく後を見送つてゐる。

小姓　昨日はお呼びするのが遲れて、かはせみを見損つたと言つて、わたしをお叱りになりましたね。

デュノア　貴樣が吼え始めれば、わしは例の娘が來たのかと思ふのは分り切つたことぢやないか。今度は一つ、貴樣に吼え面かかしてやるから。

小姓　あの鳥は可愛いゝでせうか。一羽つかまへてやりたいな。

デュノア　あいつを罠にかける貴樣を一つひつとらへて、一月ぐらゐ鐵の籠へ押しこんで、籠の味でも嘗めさしてやらうか。貴樣、憎らしい小僧だな。

小姓　（笑つて、以前のやうに蹲る）！

デュノア　（歩き廻り）青い鳥、青い鳥、われは御身の友なれば、わがために、風の向きをば變へよかし。いや、これぢや韻が合はない。汝がために、罪を犯せし者のため。これがいゝ。だが、これでは心持がこもつてゐない。（小姓の近くに來てゐるのにふと氣付いて）憎らしい小僧め！

（くるりと踵を返して）かはせみ色の、青い紐で髪を結んだマリア樣、あなたは、わたしのために西風を出すのを惜しむのですか。

西方の歩哨の聲　止まれ！　そこを行くのは誰だ。

ジョウン　娘。

デュノア　通してやれ。こちらへ來るがいゝ、娘。わしのところへ。

ジョウンは、見事な鎧に身を堅め、ぷんぷん怒りながら駈けこんで來る。風が落ちて、小旗はだらりと槍にぶら下がる。然し、デュノアはジョウンにすつかり心を取られてゐるので、それに氣がつかない。

ジョウン　（打ちつけに）あんたがオルレアンの私生子（バスタアド）？

デュノア　（冷たく嚴かに、楯を指さして）この楯のベント・シニスタアのしるしが分るだらう。君が娘ジョウンなのかい。

ジョウン　えゝ、さうよ。

デュノア　君の軍隊は何處にゐるんだ。

ジョウン　數哩後方に。みんながあたしをだましたんですよ。川岸の間違つた方へあたしを連れて行つてしまつたのよ。

デユノア　僕がさうするやうに言ひつけたのだ。

ジョウン　何故そんな事をなさるの。英吉利兵は向う岸にゐるのに。

デユノア　英吉利軍は兩岸にゐるよ。

ジョウン　でも、オルレアンは向う岸にあるんでせう。あたし達はあすこで英吉利兵と戰爭しなくちやいけないのだわ。どうして河を渡るの。

デユノア　（凄い顏付で）橋が一つある。

ジョウン　神様のみ名に於て、ぢや、その橋を渡つて、攻めこみませうよ。

デユノア　何でもないやうに見えるが、それが出來ないんだよ。

ジョウン　誰がさう言ふの。

デユノア　僕がさう言ふのさ。又、僕より年をとつた賢い人達も同じ意見なんだ。

ジョウン　（控え目にすることなく）ぢや、その年とつた賢い人達はみんな鈍物で、あんたを馬鹿

にしたんだわ。そして、今度はあたしを馬鹿にする氣なんだわ、川岸の間違つた場所へあたしを案内したりして。あたしがまだどんな將軍もどんな町も得たことのないやうないゝ助を、あんたのところへ持つて來たのが分らないの。

デユノア　（我慢強くにこにこしながら）君自身の？

ジョウン　いゝえ、天の神様の助とお告げよ。橋へはどう行けばいゝの。

デユノア　君は性急だなあ。

ジョウン　氣長にしてゐていゝ時なの。敵は間近に迫つてゐるのに、あたし達は何にもしないで此處に突つ立つてゐるなんて。まあ、あんたは何故戰爭しないの。まあお聞きなさい、あたし、あんたを怖くないやうにしてあげるわ。

デユノア　（心から笑つて、彼女に向つて手を振りながら）駄目、駄目、君が、僕を怖くないやうにしてくれたつて、僕はお話の本にはお誂へ向きの騎士になれても、軍隊にとつちや至つて惡い指揮官になるのさ。さあ！　君を一つ軍人にして上げようかな。（彼女を水際に連れて行つて）橋のこつちのたもとに砦が二つ見えるだらう。大きな砦が。

ジョウン　えゝ、見えるわ。あれは味方の、それともゴッダムの。

デュノア　靜かに。まあお聞き。今かりに僕があの砦のどつちか一つに十人の兵士をつれて立て籠つてゐるとすれば、敵の一軍位は向うに廻してもそれを守る事が出來るのだ。ところが、英吉利軍の奴、あの二つの砦に十人どころかその十倍もゐて、我軍を防いでゐるのだ。

ジョウン　英吉利軍だつて神様には刄向ひ出來ないのよ。神様はあの砦の下の土地をば、あいつ等にはお與へにならなかつたの、だから、あいつ等、神様からそれを盗んだのだわ。神様はあの土地をあたし達に下さつたのよ。あたし、あの砦を占領しよう。

デュノア　一人でかい。

ジョウン　あたし達の軍隊が占領するわ。あたしがその先頭に立ちませう。

デュノア　誰も君にはついて行かないだらう。

ジョウン　ついて來るものがあるかどうか、あたし振向いて見ようとは思はないわ。

デュノア　（彼女の勇氣を認めて、心から優しく彼女の肩を叩きながら）偉い。君には軍人になる素質があるよ。君は戰爭に戀してゐるんだ。

ジョウン　（吃驚して）あら！　大僧正は、あたし宗教に戀してゐると仰しやつたし。

デュノア　僕は、神もお恕しあれ、僕自身もいさゝか戰爭に戀してゐるんだ、あの醜い惡魔めと。僕は妻を二人もつた男のやうだ。君は、夫を二人もつた女のやうになりたいのかい。

ジョウン　（眞面目腐つて）あたし、夫なんか有ちたいと思はないわ。ツウルでは或男が婚約を破つたと言つて、あたしを訴へた事があつたの。でも、あたし婚約なんかしやしなかつたわ。あたしは軍人だわ。あたし、女だと思はれたくはないの。女の身裝をしようとは思はないわ。女の大事にするやうなものは、あたし見向きもしないの。大概の女は、戀人やお金のことを夢みてゐるの。でも、あたしは、戰の先頭に立つて突擊する事や、大砲を配置する事を夢みてゐるのよ。あんた方兵隊さんは大砲の使ひ方を知らないんだわ。大きな音や烟を立てさへすれば、戰爭に勝てるものと思つてゐるんだわ。

デュノア　（肩を聳かして）その通りだ。大砲なんて、大概の場合、有難いよりは迷惑になるもんだ。

ジョウン　さうよ、あんた。でも、馬で石壁に向ふ事は出來ないのよ。だから、大砲は無くち